

福岡市早良区

# 四箇周辺遺跡調査報告書

( 7 )

福岡市埋蔵文化財調査報告書第482集

1996

福岡市教育委員会

福岡市早良区

し か しゅう へん  
**四箇周辺遺跡調査報告書**

( 7 )

福岡市埋蔵文化財調査報告書第482集



次数	調査番号	遺跡略号
四箇遺跡群11次	7727	SIK-11
四箇遺跡群14次	7815	SIK-14
四箇遺跡群15次	7816	SIK-15

1996

福岡市教育委員会



# 序

早良平野の中央部に流れる室見川の東側には四箇田団地の高層ビルが聳えています。

四箇田団地建設に伴い四箇周辺地区にも数多くの埋蔵文化財が発見されています。

その結果、縄文時代から古墳時代にかけての古代の人々の生活の跡が数多く発見され、関係各方面の注目を集めました。

これらの成果を踏まえ、昭和51年度より周辺部の調査を開始し、国庫補助対象事業を行ってきました。

今回報告します四箇周辺遺跡は昭和52年度から同53年度に調査を行った国庫補助対象事業の報告です。弥生時代の生活の跡や古墳時代の遺構が発見されており、古代の人々が使用した土器・石器・木器の他に水田耕作に必要な水路が発見されました。また、当時の人々の技術の高さを物語るものばかりです。

本書が学術研究や学校、社会教育の分野において役立てていただければ幸いです。調査に際し、土地所有者の方、有益な御助言をいただいた先生方をはじめ参加御協力願った作業員のみなさまに、心より感謝申し上げる次第です。

平成8年3月14日

福岡市教育委員会

教育長 尾 花 剛

## 例　　言

1. 本書は四箇周辺地域における宅地造成等の開発事業に先行して、同庫補助を受けて埋蔵文化財の事前調査を昭和52年度、同53年度に実施した四箇周辺地域内緊急調査の報告書である。
2. 事業は福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財第一係が行った。発掘調査は柳田純孝・塙屋勝利・二宮忠司が担当し、補助員として渡辺和子が加わった。資料整理・報告書は二宮の他調査員の大庭友子が担当した。
3. 本書の執筆は二宮・大庭が行った。
4. 掃図は大庭が担当した。遺構写真・遺物写真は二宮が行った。
5. 本書の編集は二宮・大庭が行った。
6. 発掘調査によって出土した遺物や図面・写真等の記録類は収藏要項に基づき整理し、埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。
7. 四箇周辺遺跡は從来100mグリッドを単位として上からA~Rまで、左から1~25までの範囲を設定し、グリッド内の調査順にaから番号を付していたが、混乱を招く事態となつたため次数方式に変更した。今回報告する地点はJ-11a-2地点が11次調査、K-11a地点が14次調査、K-11b地点が15次調査となる。
8. 掃図・図版内に記した番号は遺物登録番号を示す。
9. 写真図版には写真番号を付した（福岡市埋蔵文化財収藏要項に基づく写真番号である）。

# 本文目次

第一章 はじめに.....	1
1. 発掘調査に至る経過.....	1
2. 発掘調査の組織と構成.....	5
第二章 発掘調査の概要.....	6
第三章 調査の記録.....	9
第一節 各地点の試掘調査.....	9
第二節 第11次調査の記録.....	13
1. 調査概要.....	13
2. 土層.....	17
3. 検出遺構.....	19
4. 出土土器.....	21
第三節 第14次調査の記録.....	25
1. 調査概要.....	25
2. 上層.....	29
3. 検出遺構.....	30
4. 出土土器.....	33
第四節 第15次調査の記録.....	35
1. 調査概要.....	35
2. 土層.....	37
3. 検出遺構.....	40
4. 出土土器.....	43
第四章 出上遺物.....	43
1. 木器.....	43
2. 石器.....	51
第五章 まとめ.....	55

# 挿 図 目 次

Fig. 1	四箇周辺遺跡群の位置図 (縮尺 1/50,000) .....	VI
Fig. 2	四箇周辺の遺跡分布図 (縮尺 1/25,000) .....	2
Fig. 3	調査地点と微高地推定図 (縮尺 1/2,000) .....	4
Fig. 4	四箇周辺緊急調査地点位置図 (縮尺 1/2,000) .....	6
Fig. 5	四箇周辺遺跡遺構全体図 (縮尺 1/2,000) .....	7
Fig. 6	四箇周辺遺跡検出遺構と微高地 (縮尺 1/2,000) .....	8
Fig. 7	J-10j・J-12d地点試掘調査土層断面図 (縮尺 1/60) .....	10
Fig. 8	J-11f地点試掘調査土層断面図 (縮尺 1/60, 1/400) .....	11
Fig. 9	L-11a・K-12d地点試掘調査土層断面図 (縮尺 1/60, 1/200, 1/400) .....	12
Fig. 10	第11次調査地点と周辺の調査 (縮尺 1/300) .....	14
Fig. 11	第11次調査地点と周辺の遺構配置図 (縮尺 1/120) .....	15
Fig. 12	第11次調査土層断面図 (縮尺 1/60, 1/300) .....	16
Fig. 13	第11次調査遺構全体図 (縮尺 1/60) .....	18
Fig. 14	遺構配置図と SK-01・02平面・断面図 (縮尺 1/20, 1/40) .....	20
Fig. 15	第11次調査出土土器-1 (縮尺 1/3) .....	22
Fig. 16	第11次調査出土土器-2 (縮尺 1/3) .....	24
Fig. 17	第14・15次調査地点と試掘調査地点位置図 (縮尺 1/600) .....	26
Fig. 18	第14次調査地点の試掘調査土層断面図 (縮尺 1/60) .....	27
Fig. 19	第14次調査土層断面図 (縮尺 1/60) .....	28
Fig. 20	第14次調査遺構配置図 (縮尺 1/100) .....	30
Fig. 21	第14次調査杭列検出平面図 (縮尺 1/100) .....	31
Fig. 22	第14次調査出土土器 (縮尺 1/3, 1/4) .....	32
Fig. 23	第15次調査地点位置図 (縮尺 1/600) .....	34
Fig. 24	第15次調査試掘土層断面図 (縮尺 1/50, 1/200) .....	36
Fig. 25	第15次調査土層断面図 (縮尺 1/60, 1/400) .....	38
Fig. 26	第15次調査杭列と流木検出平面図 (縮尺 1/80) .....	39
Fig. 27	第15次調査杭列検出平面図 (縮尺 1/80) .....	40
Fig. 28	第15次調査拡張部平面図と出土土器 (縮尺 1/3, 1/80) .....	41
Fig. 29	出土土器-1 (縮尺 1/4) .....	42
Fig. 30	出土土器-2 (縮尺 1/4, 1/8, 1/12) .....	44
Fig. 31	出土土器-3 (縮尺 1/4) .....	45
Fig. 32	出土土器-4 (縮尺 1/4, 1/8) .....	46
Fig. 33	出土土器-5 (縮尺 1/4, 1/8) .....	47
Fig. 34	出土土器-6 (縮尺 1/4, 1/8) .....	48
Fig. 35	出土石器-1 (縮尺 1/1) .....	50
Fig. 36	出土石器-2 (縮尺 1/2) .....	52
Fig. 37	出土石器-3 (縮尺 1/2) .....	53
Fig. 38	四箇周辺遺跡の縄文時代遺構配置図 (縮尺 1/2,000) .....	56
Fig. 39	四箇周辺遺跡の弥生時代遺構配置図 (縮尺 1/2,000) .....	58
Fig. 40	四箇周辺遺跡の古墳時代遺構配置図 (縮尺 1/2,000) .....	60

## 図版目次

- PL. 1 L-11a・L-11d・K-11c地点試掘調査写真  
PL. 2 各試掘調査地点写真  
PL. 3 K-12d・第14次地点試掘調査写真  
PL. 4 第11次調査地点写真  
PL. 5 第11次調査地点遺物出土状態-1  
PL. 6 第11次調査地点遺物出土状態-2  
PL. 7 第11・14次調査地点写真  
PL. 8 第14次調査地点写真-1  
PL. 9 第14次調査地点写真-2  
PL. 10 第15次調査地点写真-1  
PL. 11 第15次調査地点写真-2  
PL. 12 出土遺物(土器)-1(縮尺1/2)  
PL. 13 出土遺物(土器)-2(縮尺1/2)  
PL. 14 出土遺物(土器・石器)-3(縮尺1/2)  
PL. 15 出土遺物(土器・石器)-4(縮尺1/2, 1/4)  
PL. 16 出土遺物(木器)-5(縮尺1/3)  
PL. 17 出土遺物(木器)-6(縮尺1/3)  
PL. 18 出土遺物(木器)-7(縮尺1/3)  
PL. 19 出土遺物(木器)-8(縮尺1/6, 1/8・縮尺不統一)  
PL. 20 出土遺物(木器)-9(縮尺1/2)

## 表目次

Tab. 1 試掘調査一覧	1・3
Tab. 2 四箇遺跡群調査一覧	3
Tab. 3 第14次地点杭・木器出土一覧-1	62
Tab. 4 第15次地点杭・木器出土一覧-1	63
Tab. 5 第15次地点杭・木器出土一覧-2	64
Tab. 6 第15次地点杭・木器出土一覧-3	65
Tab. 7 第15次地点杭・木器出土一覧-4	66
Tab. 8 第15次地点杭・木器出土一覧-5	67
Tab. 9 第15次地点杭・木器出土一覧-6	68

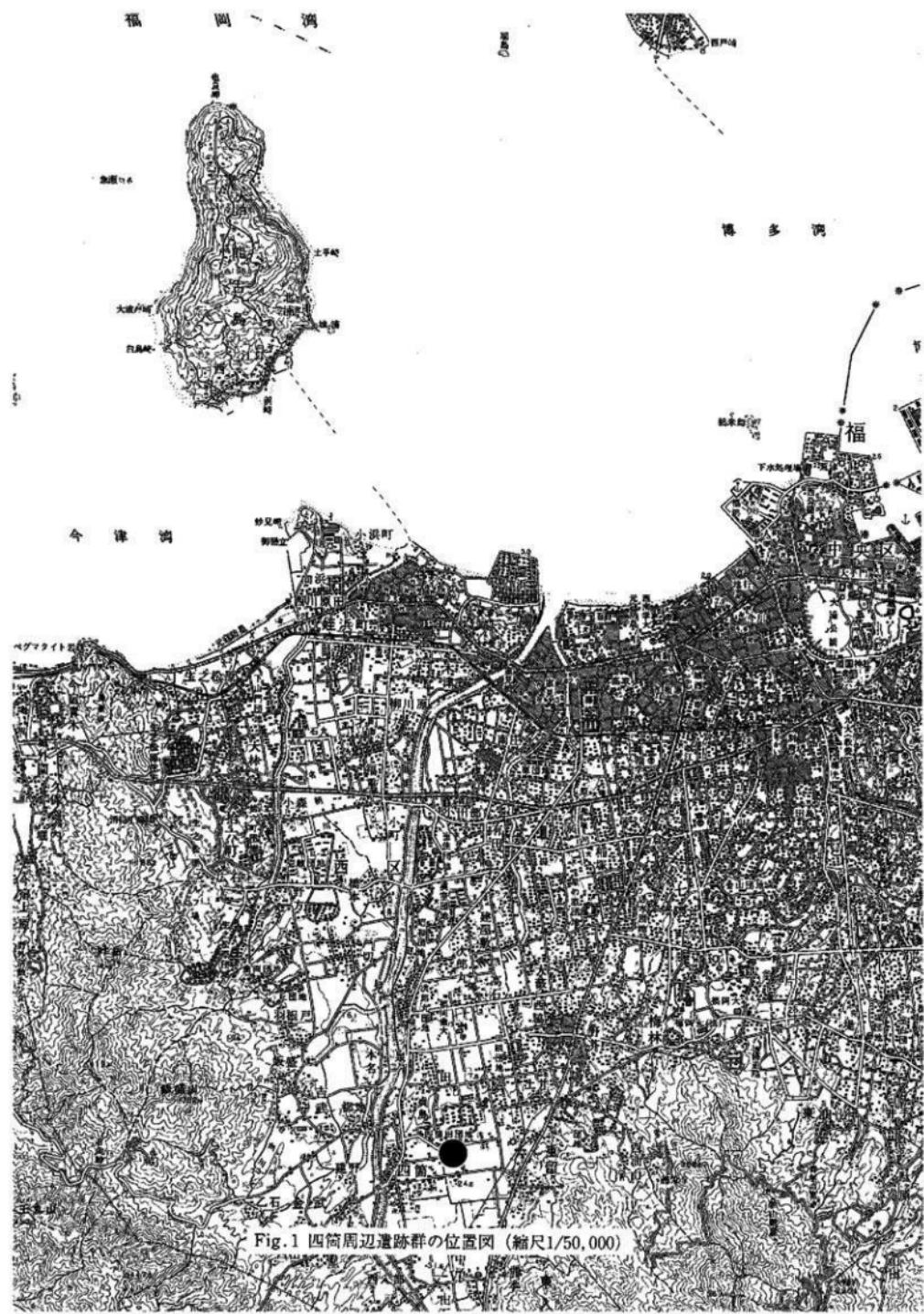


Fig. 1 四箇周辺遺跡群の位置図（縮尺1/50,000）

# 第一章 はじめに

## 1. 発掘調査に至る経過

昭和50年度に開始した四箇田団地の建設に伴い、四箇周辺地区は急速に宅地化されてきた。これに伴い四箇周辺地区も昭和51年度より国庫補助を受けて、緊急調査を開始した。以来7年間に行った調査は、十四ヶ所と試掘調査十八ヶ所を行い、それぞれの調査に関する報告は、四箇周辺遺跡調査報告書として1~6まで刊行(註1)してきたが、昭和58年度以降緊急調査がなくなり報告する時期を失なった。

今回機会を得たため、今年度で四箇周辺遺跡の緊急調査の報告を終了することとした。

今回報告する地点は、第11・14・15次調査地点の三ヶ所である。この三ヶ所の内、第11次調査地点は第47集(四箇周辺遺跡群(2))第8次調査の北側、四箇遺跡(172集)A地点の南側に位置する地点である。四箇遺跡(四箇田団地建設に伴う発掘調査、福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集)と四箇周辺遺跡の遺構・遺物とは密接な関連を持ち、今回報告の弥生時代遺構は、四箇遺跡のA・B地点(第6次調査)の遺構とつながるもので、又、弥生から古墳時代の遺構である杭列遺構は、四箇遺跡C・E地点に流れ込む遺構で、これらの意味からも広い範囲で考察する必要性がある。これら遺跡群の中に、3つの低窪高地と、その間に流れる水路が認められる。微高地上には、縄文時代前期(曾畠・森式土器を中心とする遺構)、縄文時代後期後半(西平・三万田式土器を中心とする遺構)、弥生時代前期末から中期にかけての遺構・遺物、古墳時代初期には、水田遺構が広範囲に広がっている。

凹地には、弥生時代中期から古墳時代初期にかけての杭列・埴状遺構が、微高地の基線に沿って検出される。微高地は、北から第一微高地(第11次調査・四箇遺跡A地点を含む範囲)、中央部の第二微高地、南に第三微高地がある。この第三微高地は四箇東遺跡群を中心とする範囲であり、その南側はまだ範囲を確認できていない。

このような状況下で、第11次地点が昭和51年度に住宅建設の申請が提出された。昭和52年度に発掘調査を行うこととなり、昭和52年5月29日より同年7月5日までの約1ヶ月間、四箇遺跡の調査と併行しながら調査面積80m<sup>2</sup>を実施した。

第14次調査は、昭和52年度に専用住宅建設の申請が提出され、53年5月29日から6月17日までの約20日間、調査面積168m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。

第15次調査は、昭和52年度に専用住宅建設の申請が提出され、昭和53年6月18日から8月8日までの約1ヶ月半、調査面積107m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。

このほか試掘調査を行い、遺構が確認されなかった箇所は、下記の表に記した。

Tab.1 試掘調査一覧

(単位:m<sup>2</sup>)

地 点	試 面 積	対 面 積	地 点	試 面 積	対 面 積	地 点	試 面 積	対 面 積
J-9 a	60	1,125	J-11 a	36	165	J-11 f	20	600
J-9 b	80	743	J-11 b	45	150	L-17-18	53.7	1,343
J-10 j	17	198	J-11 c	96	816	L-11 a	18	200
L-11 b	20	400	K-11 c	13	192	K-11 d	10	40

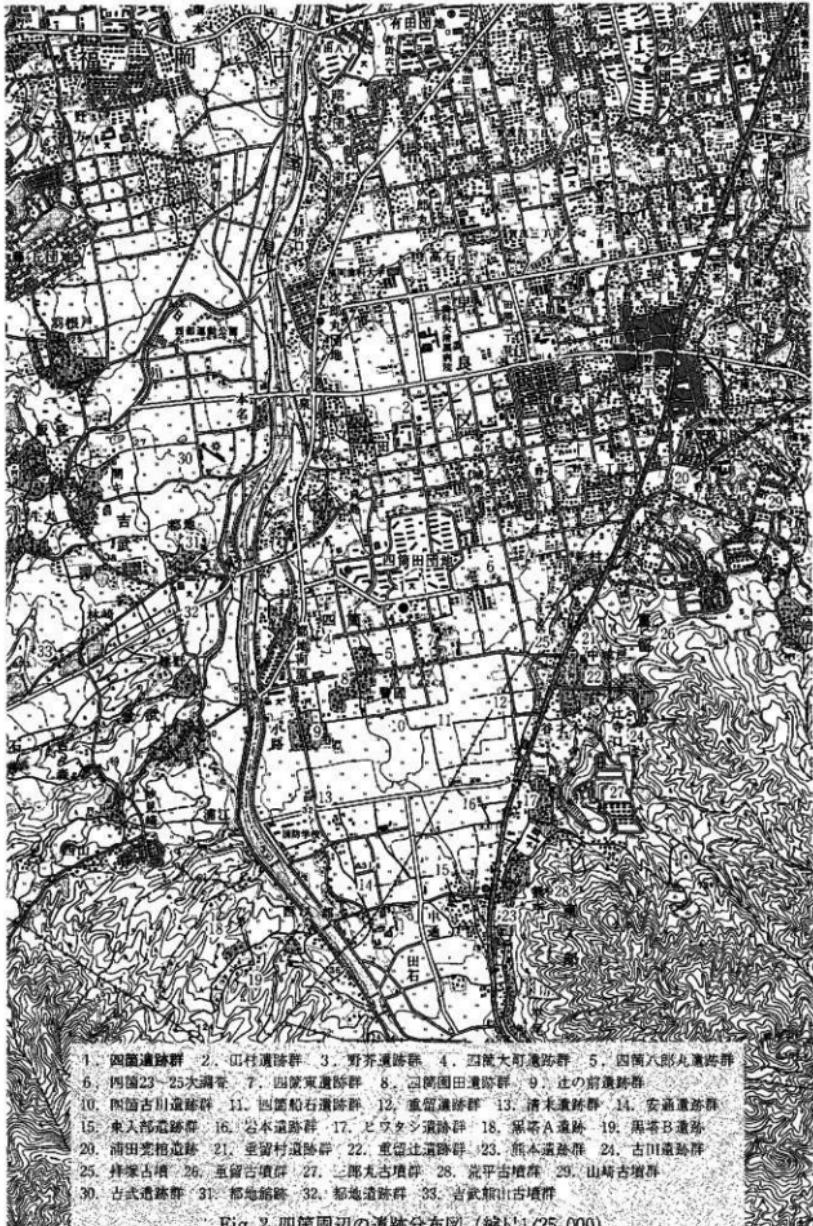


Fig. 2 四箇周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000）

Tab. 1 試掘調査一覧

(単位: m<sup>2</sup>)

地 点	試 面 積	対 象 積	地 点	試 面 積	対 象 積	地 点	試 面 積	対 象 積
K-12d	24	645	J-12a	45	255	J-14	78	1,950
J-13a	70	1,780	J-12b	16	200	G-10	139	3,492

Tab. 2 四箇遺跡群調査一覧

(単位: m<sup>2</sup>)

調査 番号	遺跡名	次数	地点	所在地	調査 面積	調査 原因	報告書
7411	四箇遺跡群	1	D地点	早良区大字四箇	1,155	公共	172
7516	四箇遺跡群	2	A地点	早良区大字四箇	1,270	公共	172
7517	四箇遺跡群	3	E地点	早良区大字四箇	2,250	公共	172
7518	四箇遺跡群	4	B地点	早良区大字四箇	4,765	公共	172
7614	四箇遺跡群	5	J-10a~g	早良区大字四箇	1,148	補助	42
7615	四箇遺跡群	6	C地点	早良区大字四箇	8,175	公共	172
7706	四箇遺跡群	7	J-12a	早良区大字四箇	45	補助	47
7707	四箇遺跡群	8	J-11a	早良区大字四箇	36	補助	47
7708	四箇遺跡群	9	J-10h	早良区大字四箇	50	補助	47
7709	四箇遺跡群	10	J-10i	早良区大字四箇	450	補助	47
7727	四箇遺跡群	11	J-11a-2	早良区大字四箇	80	補助	482
7813	四箇遺跡群	12	K-10a	早良区大字四箇	252	補助	428
7814	四箇遺跡群	13	J-10j	早良区大字四箇	15	試掘	482
7815	四箇遺跡群	14	K-11a	早良区大字四箇	168	補助	482
7816	四箇遺跡群	15	K-11b	早良区大字四箇	107	補助	482
7817	四箇遺跡群	16	J-10k	早良区大字四箇	145	補助	63
7849	四箇遺跡群	17	J-11d	早良区大字四箇	100	補助	428
7911	四箇遺跡群	18	J-10l	早良区大字四箇	540	補助	63
8015	四箇遺跡群	19	J-11e	早良区大字四箇	800	補助	428
8219	四箇遺跡群	20	L-11c	早良区四箇427	450	補助	100
8723	四箇遺跡群	22		早良区重留	3,300	公共	199
8744	四箇遺跡群	23		早良区重留	1,900	公共	196
8952	四箇遺跡群	24		早良区重留	1,712	民受	261
9409	四箇遺跡群	25		早良区重留	462	民受	418
9456	四箇遺跡群	26		早良区四箇	39	公共	

四箇周辺遺跡群で、今までの調査は26ヶ所である。昭和57年を最後に宅地開発の波も一段落の様相を示し、今日では公共事業が主体をしめている。

- 註1 四箇周辺遺跡(1)福岡市埋蔵文化財調査報告書42集 1978
- 四箇周辺遺跡(2)福岡市埋蔵文化財調査報告書47集 1979
- 四箇周辺遺跡(3)福岡市埋蔵文化財調査報告書51集 1980
- 四箇周辺遺跡(4)福岡市埋蔵文化財調査報告書63集 1981
- 四箇周辺遺跡(5)福岡市埋蔵文化財調査報告書100集 1983
- 四箇周辺遺跡(6)福岡市埋蔵文化財調査報告書428集 1995
- 四箇遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書172集 1987

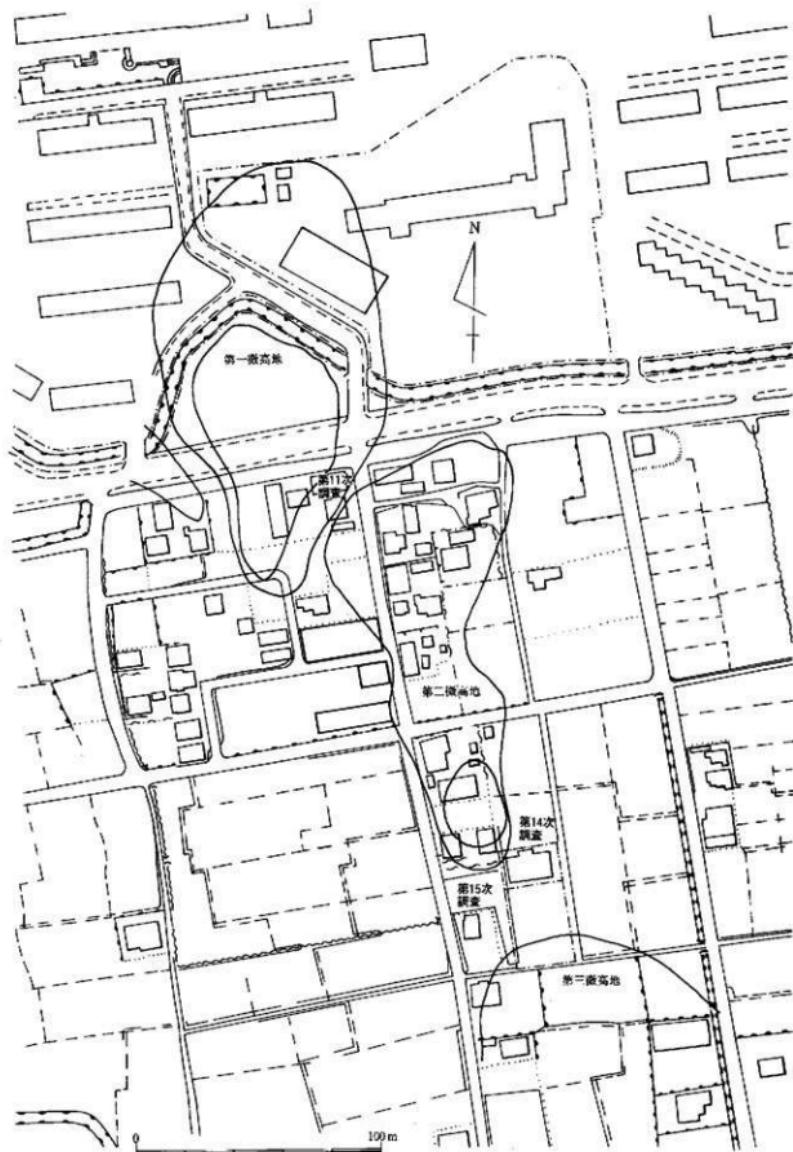


Fig. 3 調査地点と微高地推定図(縮尺1/2,000)

## 2. 発掘調査の組織と構成

発掘調査から資料整理・報告書刊行に至るまで、多くの人々の御協力を受けた。特に発掘調査から資料整理まで17年間の永きに渡り報告できなかったことは、担当者の怠慢にはかならず、ここにようやく多くの人々の御協力を受け、刊行するに至った。記して感謝申し上げます。

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 文化部文化課埋蔵文化財係(昭和52・53年度)

文化財部埋蔵文化財課(平成7年度)

(昭和52・53年度)

事務担当 文化部長 志鶴 幸弘  
文化課長 井上 剛紀  
第一係長 三宅 安吉  
第二係長 柳田 純孝  
事務担当 国武 勝利  
古籠 国生  
岡嶋 洋一

(平成7年度)

文化財部長 後藤 直  
埋蔵文化財課長 荒巻 雄勝  
第一係長 横山 邦継  
第二係長 山口 譲治  
事務担当 内野 保基  
入江 幸男  
西田 由香

調査担当 柳田 純孝 塩屋 勝利 二宮 忠司 渡辺 和子

資料担当 二宮 忠司 大庭 友子

資料整理 牛尾 美保子 海内 美也子 太田 昌子 平山 圓  
皆元 幸子 尾崎 文枝 高橋 知代子 石津 満寿美  
桑野 正子 木村 紗子 安部 宣子 山崎 恵美子  
石松 悅子

調査協力者 池 閑次郎 石松 現秀 尾崎 達也 牛尾 準一  
榎 光雄 増田 重美 尾崎 八重 金子 ヨシ子  
菊池 栄子 菊池 キミ 菊池 ミツヨ 増田 オリエ  
菰田 洋子 植 ツイ 下郡 フミ子 谷 ヒサヨ  
谷 フミエ 野田部 コト 又野 栄子 松隈 ゆきの  
真名子 ゆきえ 真名子 千恵子 結城 キミエ

立地と環境については、刊行されている四箇周辺遺跡・田村遺跡群・東入部遺跡群・吉武遺跡群等と  
数多くの報告書が記載しているため、今回の報告書では割愛する。

## 第二章 発掘調査の概要

今回報告する調査地点は、第11(J-11a-2)・14(K-11a)・15(K-11b)次地点の三ヶ所と、試掘調査で報告していない六ヶ所である。今回で、四箇周辺の国庫補助対象事業として調査した遺跡の報告を完了することになる。昭和49(1974)年の四箇田団地造成工事に伴う発掘調査以来、四箇周辺の調査も昭和51(1976)年から開始され、昭和57(1982)年の調査第20次をもって終了した。その間、Tab.1・2で表したごとく、二十ヶ所の発掘調査と十八ヶ所の試掘調査を実施した。

四箇周辺の旧地表面を復元すると、Fig.2のごとく微高地と低湿地に区分される。微高地上には、縄文時代後期から弥生時代までの遺構が確認され、低湿地には、縄文時代前期の遺構と弥生～古墳時代にかけての水路跡・水路・杭列・堤状遺構等がある。特に微高地の周縁部には、水路・杭列・堤状遺構等の施設が確認されている。微高地上には、縄文時代後期の三日月溝・住居跡・埋壺等や弥生時代の住居跡・溝等がみられる。しかしながら、古墳時代の遺構は、微高地上には発見できず、低湿地に杭列・堤状遺構等の水田施設が認められる。古墳時代の住居跡群の位置は、東入部遺跡群・重留遺跡群等に確認されており、四箇周辺遺跡群では確認できなかった。

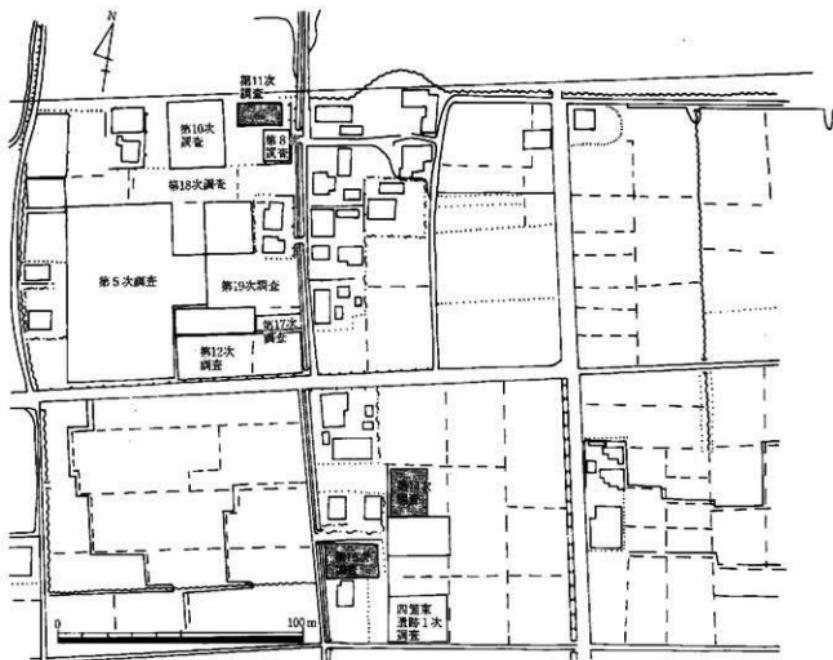


Fig.4 四箇周辺緊急調査地点位置図(縮尺1/2,000)



Fig. 5 四筒周辺遺跡遺構全体図(縮尺1/2,000)

第一节 各地点の試掘調査

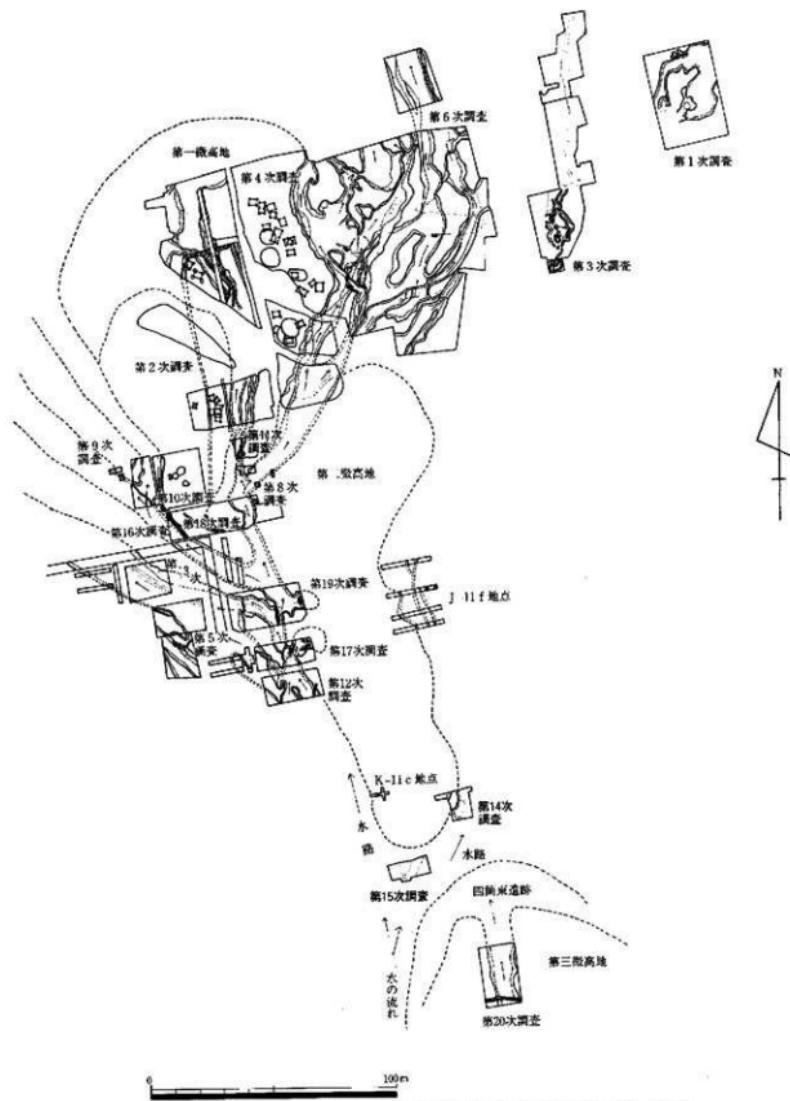


Fig. 6 四箇周辺遺跡検出遺構と微高地(縮尺1/2,000)

## 第三章 調査の記録

### 第一節 各地点の試掘調査

今回が四箇周辺遺跡の最終報告であることから、試掘調査の地点と土層図を図示し、今後の調査の参考として記録しておく。

試掘調査地点は、J-10j・J-12d・J-11f・K-11c・L-11a・K-12dと14・15次の試掘調査の8地点(Fig.5)である。それぞれトレンチ略図と土層断面図を図示した。

J-10j地点(Fig.7)は、四箇周辺遺跡1・4(福岡市埋蔵文化財調査報告書第42・63集)で、報告した各調査地点にはさまれた区間で、対象面積198m<sup>2</sup>の内17m<sup>2</sup>を試掘した。トレンチは長方形の敷地に最大長の斜め(北東～南西)に入れた。遺構は南側に段落ちが認められ、中央部に浅い溝状造構を検出したが、出土遺物は無く、遺構も浅いため調査対象からはずした。しかしながら、その後の調査(第18・19次調査地点:四箇周辺遺跡(4)(6)福岡市埋蔵文化財調査報告書第63・428集)の第18次調査の南側、第19次調査の北側に位置し、これらの遺構を結ぶ地点であったことから、調査を行う必要性があったものと思われる。

J-11f地点(Fig.8)は、第12・17・19次調査地点(四箇周辺遺跡(6)福岡市埋蔵文化財調査報告書第428集)の東側、第二微高地中央部に位置し、試掘対象面積816m<sup>2</sup>の内96m<sup>2</sup>を調査した。第二微高地中央部であるため造構の検出を期待したが、遺構をのせる黄褐色土がなく著しく削平を受けており、溝状の造構らしきもの、一条を検出したのみであった。この部分を拡張して調査を行った結果、溝ではなく窓みで、出土遺物は全くなかった。

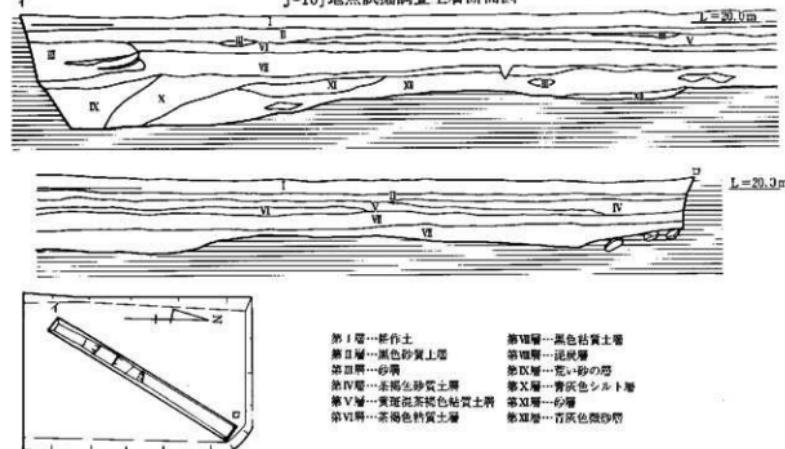
L-11a地点(Fig.9)は、K-11b地点(第15次調査地点)の南側隣接地・四箇東遺跡(1975年調査、公園建設に伴う緊急調査で未報告)の西側に隣接する対象面積200m<sup>2</sup>に南北のトレンチを設定し、18m<sup>2</sup>を調査した。北側では、第15次調査地点に向かって段落ちし、第15次調査の水路部分の南側台地部分に相当する。この台地の幅は、第14次調査地点まで続くものである。南側では、疊層が立ち上がり微高地に続く様相を示す。しかしながら、東西の土層では西に急激に落ちる様相を示し、西に大きな水路の存在を防溝させる。この段落ち部分に数多くの縄文時代後期三万田式上器片が出土するが、遺構とは避離したものであった。これは、四箇東遺跡・四箇周辺遺跡第20次調査(福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集)に見られる三万田式土器期の生活造構から搬出されたものと考えられる。

J-12d地点(Fig.7)は、四箇田園地南東側、第14次調査地点の北東約100mに位置する。四箇田公民館建設に伴う事前の試掘調査で、対象面積645m<sup>2</sup>の内24m<sup>2</sup>を試掘調査した。試掘面積の少いのは、当該年度に水田耕作を行うため、坪掘調査となつた結果である。調査対象面積内に2×3mのトレンチ(坪掘)を設定し、北から第1トレンチ、第2トレンチとした。調査の結果、砂と疊majiriの層序が大部分であり、遺構の確認はできなかった。

K-11C地点(第15次調査の北側・第二微高地南側部分)の試掘調査を行つた。対象面積192m<sup>2</sup>、試掘調査面積13m<sup>2</sup>(PL.2-1)で、削平が著しく疊層が上面に露出したため、遺構の遺存は考えられなかつた。

J-11c地点(四箇遺跡C地点南側)にも試掘トレンチを入れた(対象面積600m<sup>2</sup>、試掘調査面積20m<sup>2</sup>)。第二微高地であることから、遺構検出の期待がもたれたが、削平が著しく遺構の検出は出来なかつた。このほかに水路改修工事・小規模な区画整備事業が行われ、それぞれに試掘調査を実施して、遺構の有無を確認したが、遺構の検出はなかつた。

J-10j地点試掘調査土層断面図



J-12d地点試掘調査上層断面図

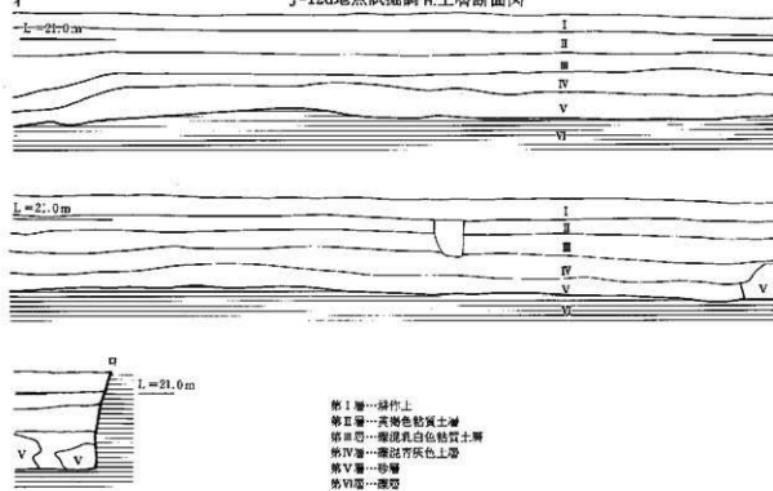


Fig. 7 J-10j・J-12d地点試掘調査上層断面図(縮尺1/60)

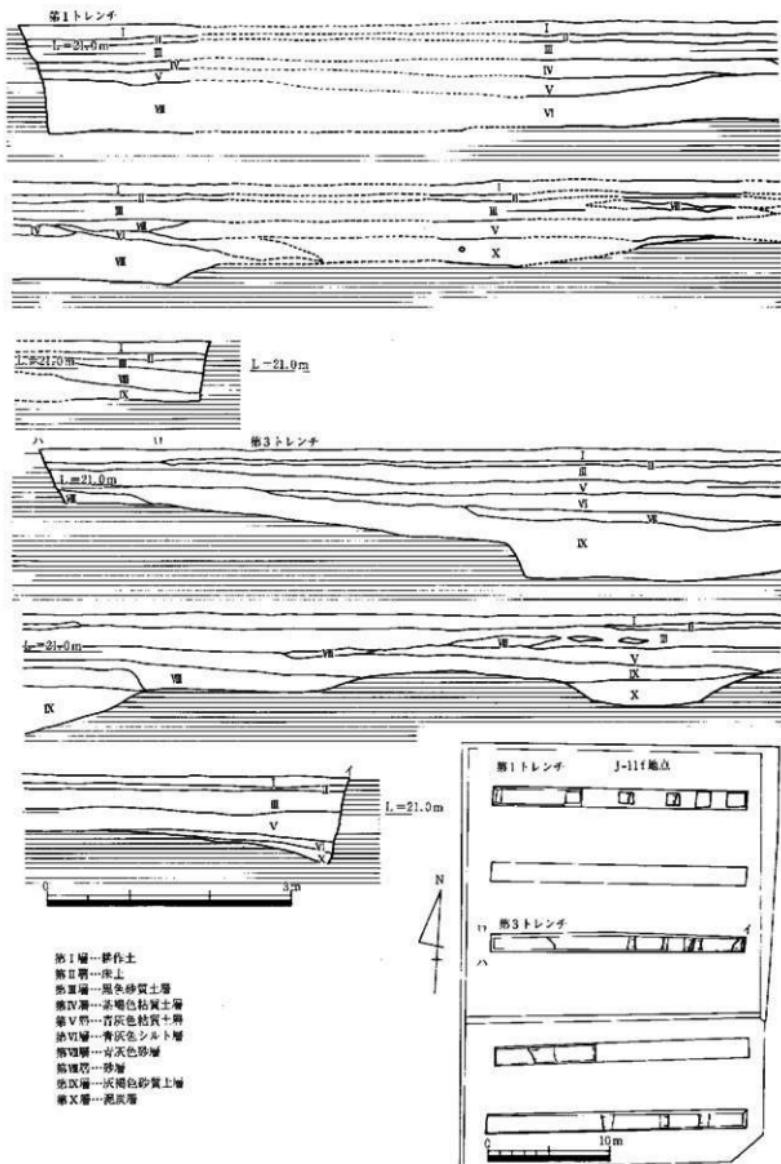


Fig. 8 J-11f地点試掘調査上層断面図(縮尺1/60, 1/400)

## 第一節 各地点の試掘調査

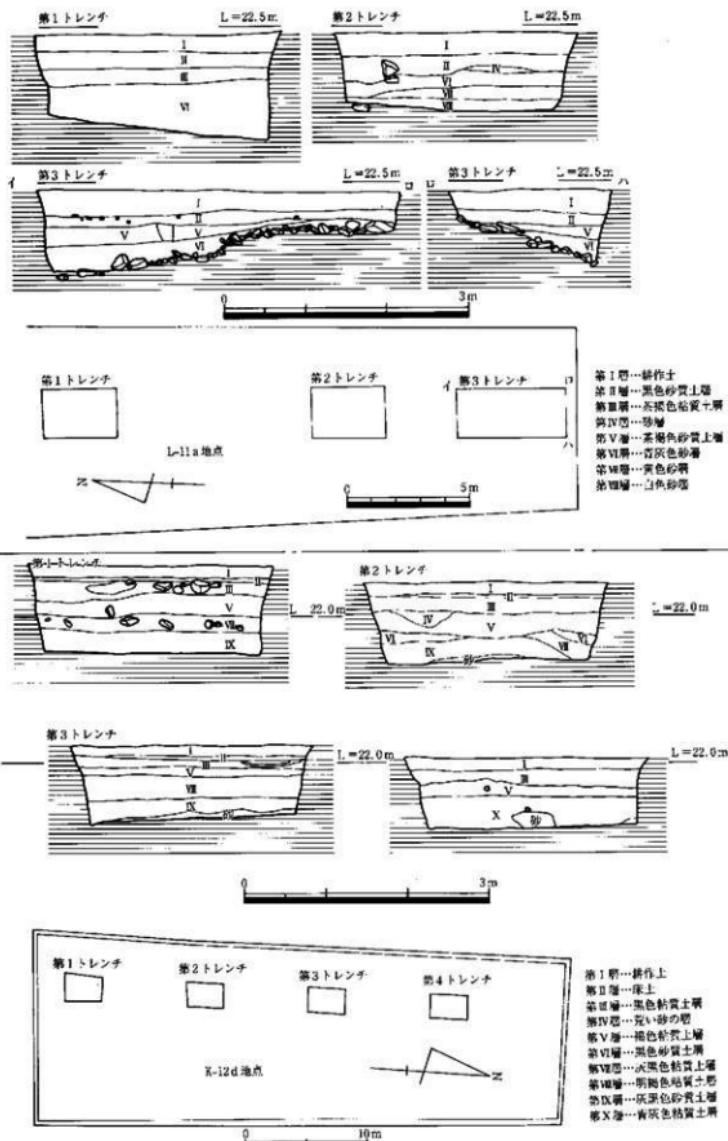


Fig. 9 L-11a・K-12d地点試掘調査土層断面図(縮尺1/60, 1/200, 1/400)

## 第二節 第11次調査の記録

### 1. 調査概要

第11次調査（J-11a-2）地点は、昭和51（1976）年度に個人住宅建設の申請が提出され、昭和52年度に発掘調査を行った。担当はその当時、四箇田団地造成工事に伴う発掘調査に従事していた柳田純孝が実施した。調査面積は80m<sup>2</sup>であるが、四箇周辺遺跡第8次調査（四箇周辺遺跡（2）福岡市教育委員会発行・福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集に収録）地点の北側に位置することから、全面調査を実施した。

調査区は、第8次調査地点と四箇田団地造成工事に伴う発掘調査のA・B地点・道路新設工事部分とに抜まれた地点で、調査前から弥生時代中期の溝二条が検出されることが判明していた（（四箇周辺遺跡B地点（第4次調査）からA地点（第2次調査）にかけて、弥生時代中期の溝二条が併行して南北に延びる事が判明していることと、第8次調査地点（Fig.11 中央部の坪掘による調査区部分）のCトレンチで、弥生時代中期の溝が確認されていることから、この延長上に溝が続くものとして考え、今回の調査区がその延長上に位置することから、溝が検出されることが推測できた）。

#### 周辺の遺跡

周辺の遺跡は、四箇周辺遺跡A地点（第2次調査）・B地点（第4次調査）が北に位置し、遺構は、A地点から縄文時代後期西平・三万田式土器を包藏する特殊泥炭層を持つ三日月湖・住居跡・埠堀・窯址状遺構、弥生時代中期の溝四条・掘立柱建物6棟、B地点からは、縄文時代前期（森・曾畠式土器）の包含層、弥生時代中期の円形住居跡・掘立柱建物・土坑墓等が検出され、また、古墳時代初期の水田耕作に伴う水路・畦畔・杭列・壠状遺構等が検出されている。

南には、すぐ隣接地に第8次調査（J-11a）地点がある。AトレンチからGトレンチまでを設定し、坪掘調査を行ったが、CトレンチからSD-01が確認され、Bトレンチからはもう一つの大きな溝状遺構の肩部が確認された。その対岸は、Eトレンチ・Gトレンチで確認され、流れの方向として、南西から北東への傾斜があり、四箇周辺遺跡B地点の水路部分へと続く様相を示している。溝幅は6.6m、深さ0.6~1.0m程度である。

さらに南には、第18次調査（J-101）地点（四箇周辺遺跡（4）福岡市教育委員会発行・福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集に収録）がある。この調査区からは、縄文時代前期包含層（森・曾畠式土器を共伴する包含層と不整形土坑を検出）と、弥生時代中期の甕棺墓8基・土坑墓2基・石蓋土坑3基・溝6条を検出した。第8次調査（J-11a）地点の南側には、幅7.2m、深さ0.4mのSD-01と、それに流れ込む幅1.2m、深さ0.11mのSD-06がある。SD-01の縁辺部・溝内には杭列が認められ、中間部から直角に延びる杭列も認められる。これらのことから、四箇周辺遺跡A地点で検出されたSD-01・02は、第18次調査地点では検出出来ないため、第8次調査地点で同一化しているものと考えられる。

また、第19次調査（J-11e）地点北側に検出されたF流路（第7堰状遺構を伴う施設）は、この第18次調査地点のSD-01に流れ込むものと考え、これから発した水路が、第18次調査のSD-01へ、第8次調査の水路へと続く。北流してきた水路は、第8次調査地点で北東へ方向を変え、四箇周辺遺跡B地点の水路へと流れ、C地点の大きな水路・水田へと導かれていると思われる。このことから第8次調査地点で見られるSD-01は、この流路から水を引き、微高地へ流す溝であり、第8次調査地点の未調査部分にその施設（堰状遺構）があった可能性が高い。

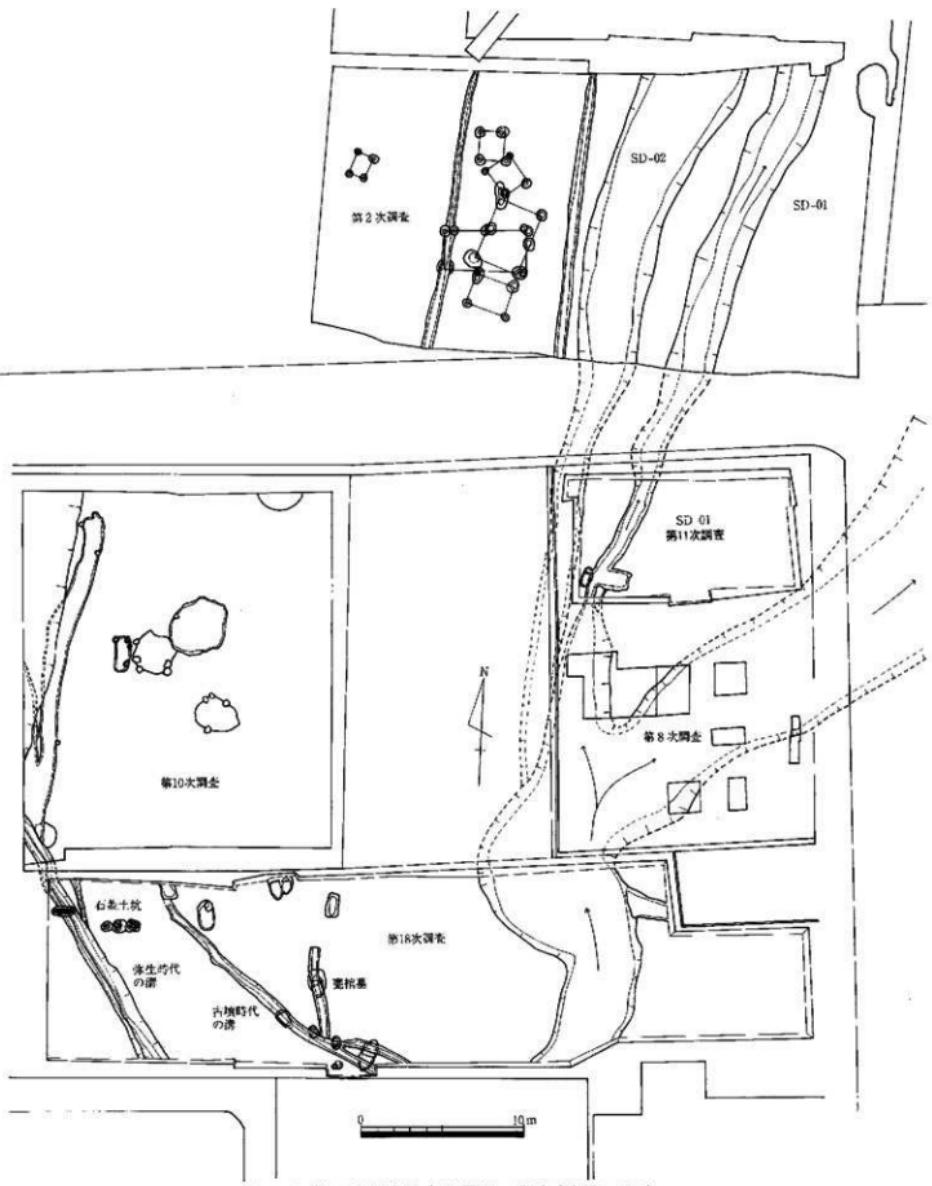


Fig. 10 第11次調査地点と周辺の調査(縮尺1/300)

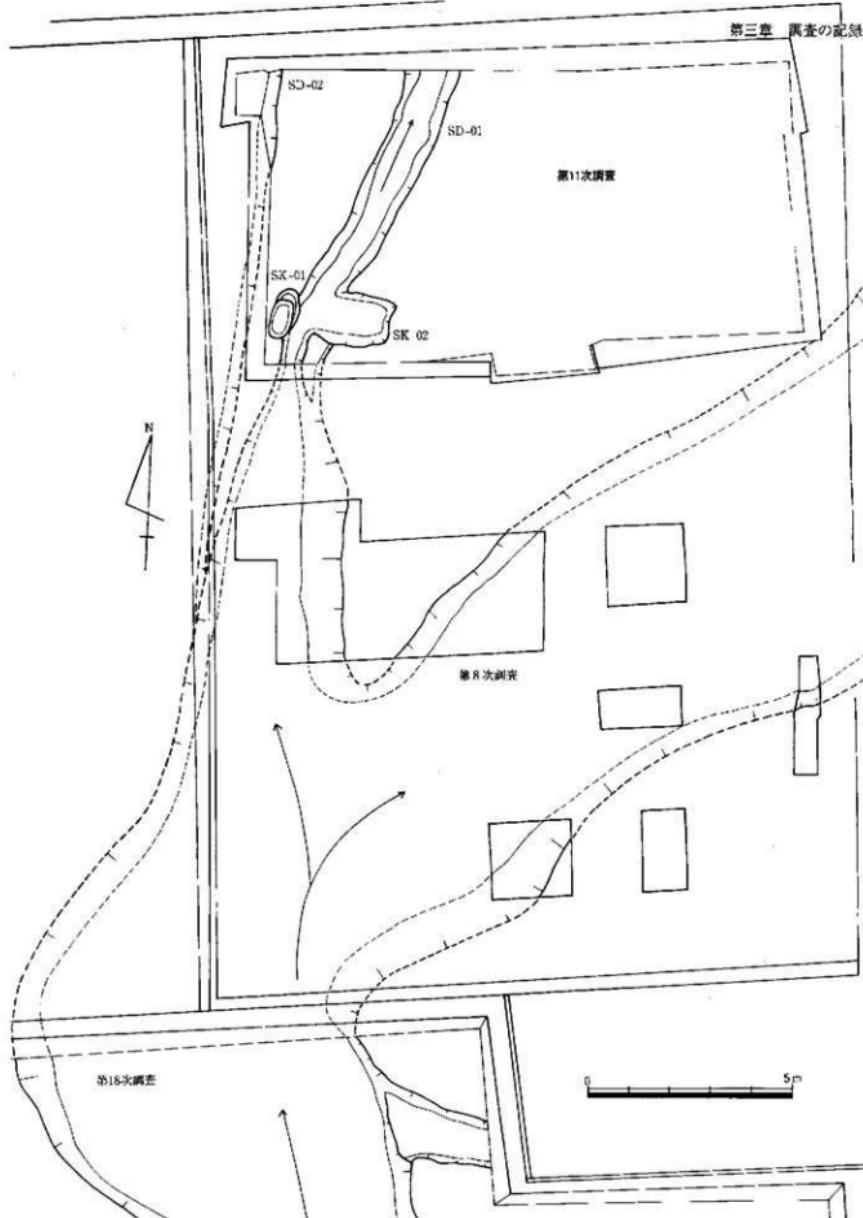


Fig. 11 第11次調査地点と周辺の遺構配置図(縮尺1/120)

第二節 第11次調査の記録

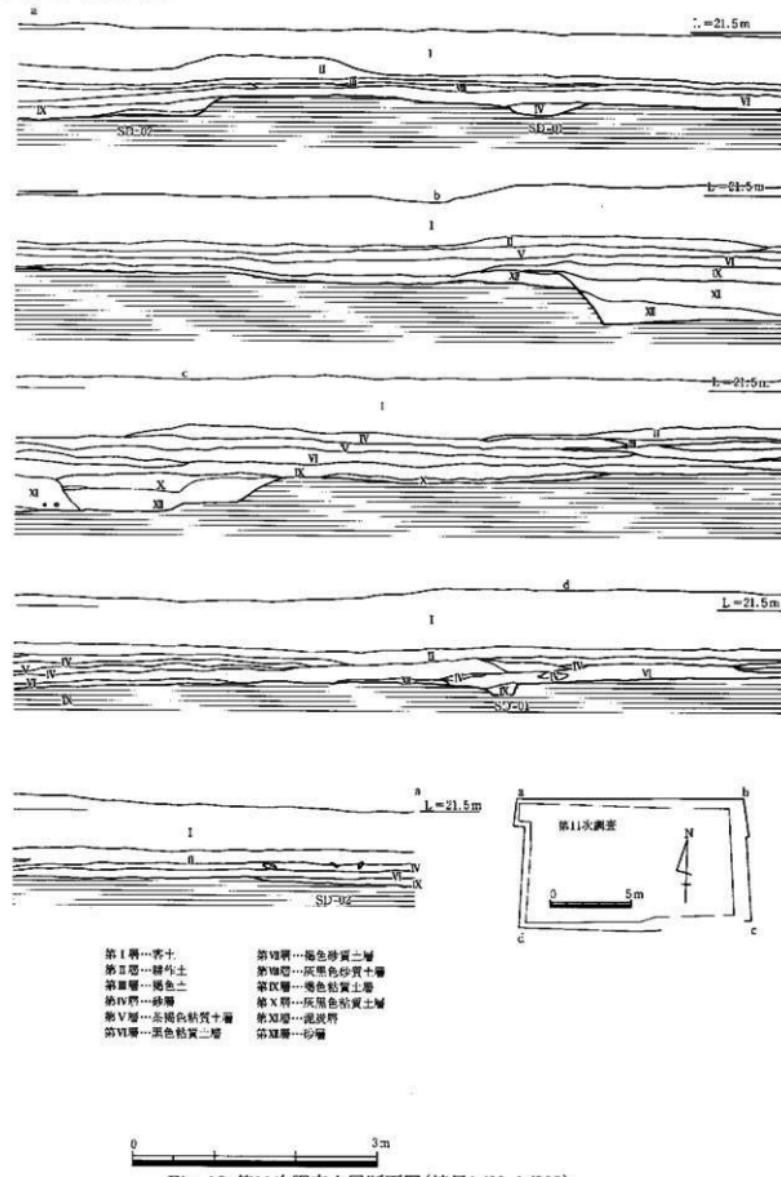


Fig. 12 第11次調査土層断面図(縮尺1/60, 1/300)

調査区西側には、第10・16次調査（J-10i・J-10k）地点（四箇周辺遺跡（2）・（4）福岡市教育委員会発行福岡市埋蔵文化財調査報告書第47・63集）がある。第10次調査地点からは、縄文時代後期の住居跡・土坑、弥生時代中期の時期に比定出来る円形住居跡・土坑が検出されている。

第16次調査地点からは水路が検出され、南北に流れる水路と北西に流れる水路を確認した。

#### 四箇周辺遺跡の弥生時代の様相

今回の調査を含めて、この周辺一帯の縄文時代から古墳時代の様相が、少しずつ明らかになりつつある。ここでは弥生時代の遺構について考察し、縄文時代・古墳時代に関しては別の章で考察する。

四箇遺跡A・B地点（第2・4次調査）から、弥生時代の住居跡・溝・掘立柱建物・水路・杭列等の検出があり、弥生時代における四箇遺跡の集落を考察してきたが、四箇周辺遺跡を含めた広い範囲での弥生時代の集落を考える必要性が生じている。

四箇遺跡第4次調査（B）地点の弥生時代の遺構は、微高地に認められる住居跡群・掘立柱建物群・溝と、微高地段落ち部分に見られる水路・杭列・堰状遺構に分けられる。第2・4次調査で全面を調査していないため、（北側の範囲・中央部分（遺跡保存のため未調査）・西側部分を調査出来ていない）明確には断言出来ないが、あえて推測するならば、第一微高地全体（約13,063m<sup>2</sup>）に弥生時代の遺構は、広がりを示すものと考えられる。微高地東側を北上するSD-01・02は、中央部よりやや北側でSD-02が西に方向を変えるのに対して、SD-01はさらに北上する。これらの溝に二分された微高地の東側縁辺部に住居跡・掘立柱建物が主流をしめる。円形住居跡4軒・方形住居跡1軒・長方形住居跡1軒・計6軒の住居跡と14棟の掘立柱建物がある。溝西側は未調査部分が多いため定かではないが、調査した部分では、掘立柱建物以外の検出は無い。

一方、四箇周辺遺跡の弥生時代の遺構は、第19次調査地点から発した水路が北上し、第8次調査地点で北東に向かって向きを変え、四箇遺跡B地点へと続く。第8次調査地点で四箇遺跡A・B地点に見られるSD-01・02が確認され、これらが北上して行く様相を示す。第一微高地の南東は、この水路によって第二微高地と切断されている。第一微高地の南限は、四箇周辺遺跡第5次調査（J-10a～g）地点（四箇周辺遺跡（1）福岡市教育委員会発行福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集）のJ-10f地点の塗地が立ち上がる部分である。この地点の北側に第18次調査地点があり、ここに臺棺墓の一群（8基）と土坑墓がある。この一帯が墓地として形成されていたことが窺える。

このように南に墓地群・東側縁辺部に住居跡群・溝を挟んで掘立柱建物群があり、溝によって区分されていたことが明かとなった。一方、水路は微高地の縁辺部に沿って形成され、杭列・堰状遺構等を有し、水田耕作を営んでいたことが窺える。その所有する面積は約80,000m<sup>2</sup>程度と考えられる。

### 第11次調査

#### 2. 土層（Fig.12 PL.4）

四面すべてを図示した。基本的にはⅠ層…客土、Ⅱ層…耕作土、Ⅲ層…褐色土、Ⅳ層…砂層、Ⅴ層…茶褐色粘質土、Ⅵ層…黒色粘質土、Ⅶ層…褐色砂質土、Ⅷ層以下灰黑色砂質土、褐色粘質土、灰黑色粘質土、泥炭層、砂層である。この下からもう一枚砂疊層の間層を挟んで、縄文時代後期の凹地状遺構に達することになる。弥生時代の遺構をなせる土層は、SD-01を境にする。SD-01より東側は、Ⅴ層の茶褐色粘質土であるが、西側ではⅦ層の褐色砂質土が遺構面となる。

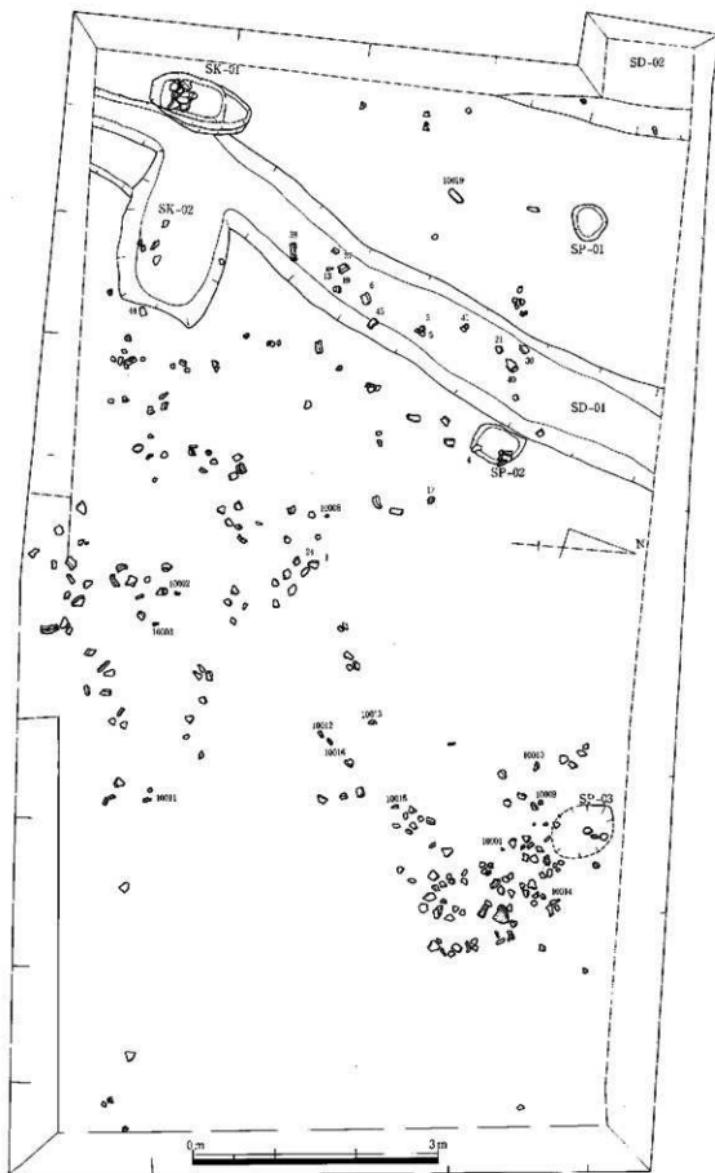


Fig. 13 第11次調査遺構全体図(縮尺1/60)

この遺構をのせるV・VII層上に弥生時代中期の土器が出上するが、集中する場所と散発的に出土する場所に分けられる。集中する場所は、北東部と中央部の南側である。この広がりの持つ意味について検討したが、中央部南側はあまりにも広がりが大きいためその意味を計ることが出来なかった。しかしながら北東部の一群は、まとまりがあることと、Pitが有ること、土層からも僅かに凹みが認められることから住居跡の可能性も考えられる。

### 3. 検出遺構 (Fig. 13・14 PL. 4~7)

第11次調査地点で検出した遺構は、溝2条・石蓋土坑2基・柱穴3である。遺構の検出面はSD-01を境とし、SD-01より東側は、第V層の茶褐色粘質土であるが、西側ではVII層の褐色砂質土が基盤となる。遺構基盤の高さは、SD-01の肩部が標高20.70mに対して、北東隅では20.4mと0.3mの比較がある。南西隅の標高は20.60m、南東隅の標高は20.40mである。微高地は北・西に向かって高くなるため、このような結果が生じたと思われる。VII層の礫を含む褐色砂質土は凹凸があり、凹んだ部分に褐色土・粘質土・砂等が堆積し、ここに弥生時代の遺構が形成されている。ただこのVII層は基盤の層ではなく、この下層に黄褐色粘質土・砂・青灰色シルト・青灰色粘質土の間層を挟んで基盤となる疊層に達する。他の地点では、この間層の青灰色粘質土・青灰色シルト層に縄文時代前期の包含層（轟・曾畠式土器）が確認出来ている。

#### 溝 (SD) (Fig. 13・14 PL. 4)

溝は2条検出した。SD-01・02である。SD-02は調査区域外であったため、その全容は知り得ないが、四箇遺跡A地点から検出されているSD-02が南下した溝であることが明かである。四箇遺跡A地点では、溝幅4m、深さ1mを計る。溝底面の標高は19.30mであり、SD-01より0.1m程高い。

SD-01は調査区の西側に位置し、南西から北東の方向へやや傾いている。調査区内の全長は4m、幅1mで、深さ0.16m、標高は北側で20.49m、南側で20.50mとほぼ水平である。

四箇遺跡A地点から検出されたSD-01は、溝幅2.80m、深さ0.80mであるのに対して、第11次調査では、溝幅が1mと狭く深さも0.60mと浅い。溝底面の標高でみると、四箇遺跡A地点のSD-01が19.20mに対して、第11次調査のSD-01は20.50mであることから、1.30m程A地点の溝の方が深くなり、水の流れが第11次調査地点からA・B地点に流れることが明かとなった。

第19次調査地点から発した第7流路（堰状遺構を伴う施設）が北上し、第一微高地と第二微高地を切断する形で形成されているが、この部分から今回調査したSD-01・02が発生していることが推測できる。推測の域を出ないが、堰状遺構等の施設により、水をSD-01・02まで上げて流し込んだものと考えられる。微高地の形からSD-01・02の水は、北から南に流れる可能性が高いと考えていたが、第11次調査と四箇遺跡A・Bの溝の標高を比較してみると、第11次調査地点の方が高く、A・B地点の方が低い結果が得られ、水の流れは、南から北に流れているという結論がえられた。

第一微高地と第二微高地は、本来同一台地であったものを、水利施設のため一番低い部分に水路を作り、四箇遺跡B地点への水の供給を行っていたものと考えられる。したがって、第8次調査 (J-11a) 地点の幅6.60m、深さ0.6~1.0mの溝は、人工的に造られた可能性が高い。

SD-01は南側でSK-02によって切断されている。Fig. 13では新旧が明かではないが、SD-01の方が古くSK-02が新しい。

第二節 第11次調査の記録

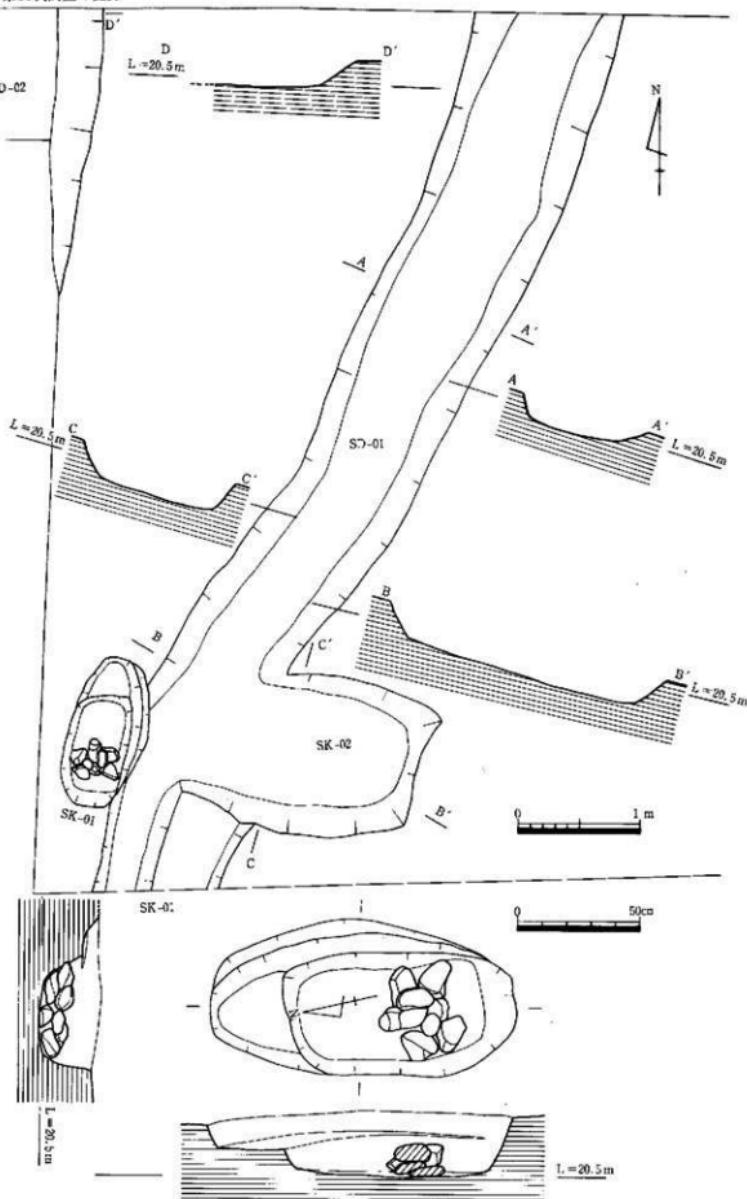


Fig. 14 遺構配置図とSK-01・02平面・断面図(縮尺1/20, 1/40)

遺構内には数多くの土器を包含していた。ほとんどが弥生時代中期前半に納まる土器ばかりで、時期的にも四箇遺跡A・B地点検出のSD-01・02と同時期である。また、四箇遺跡A地点も第11次調査地点も破棄された土器が多量で、ほぼ同時期に比定できるため、同一構として捉えてさしつかえない。また多量の土器の具合からも、急速に埋まったものと考えられる。

SD-01から出土した土器(Fig. 15・16 PL. 12・15)は壺形土器が5・6・9・13・27・30で、底部は19・21、器台が38・40・41・43・45・46、壺2の15点を図示した。この他にも数多くの壺形土器片・器台片があるが、壺形土器片は2の口縁部のみで、他は胴部が僅かに見られる程度であった。

#### 土坑 (SK) (Fig. 14 PL. 4)

土坑は2基検出した。

##### SK-01 (石蓋土坑)

SK-01はSD-01の埋没後に造られたもので、主軸をN-12°-Eにとり、長軸1.25m、短軸0.64m、深さ0.25mの隅丸長方形を呈する。構造は一段の掘方となり内面の長軸0.95m、短軸0.5mで、床は平坦である。南側中央部に8箇の人頭大の円窪が認められる。この土坑と同一の遺構が、第18次調査にも4基(第18次調査では1基を石蓋土坑、3基を柱穴として記載しているが、柱穴とした遺構とSK-01の大きさは1m内外のものではほぼ変わらない)検出されている。石の数の差異はあるが、同一構構と考えても差し支えないと思われる所以、石蓋土坑としてとらえておく。

出土遺物はないが第18次調査地点では、古墳時代の溝を切った状態で検出されているため、それよりも新しい時期を設定している。このSK-01も同じ形態を持つことから、第18次調査の時期と同時期の古墳時代以降としておく。

##### SK-02

SK-02はSK-01の東側、SD-01を切る形で検出された。SD-01より深いため、その前後関係を明確に図示出来なかった。長方形の形状を呈し、主軸をN-86°-Wにとり長軸2.40m、短軸1.30m、深さ0.30mを計り、床面は平坦である。出土遺物は5点程出土しており、この土器の形式から弥生時代後期に位置付けられる。

##### その他の遺構

柱穴を3個検出している。すべてまとまるものではない。ただSP-03の周辺部に多量の弥生時代中期の土器が認められ、土層断面からもこの部分が僅かではあるがやや深んでいる様相が認められ、住居跡の可能性も考えられる。この他にも南側中央部に弥生時代中期の時期の遺物が多量に出土しているが、遺構としては検出出来なかった。ここでは一応包含層の遺物として取り上げた。

## 4. 出土土器

出土遺物の内、遺構の関連で土器だけを記載し、石器は後でまとめて記載する。

##### SD-01出土の土器 (Fig. 15・16 PL. 12・15)

SD-01から出土した土器は壺形土器が5・6・9・13・27・30で、底部は19・21、器台が38・40・41・43・45・46、壺2の15点を図示した。この他にも数多くの壺形土器片・器台片があるが、壺形土器片は2の口縁部だけで、他は胴部が僅かに見られる程度であった。

##### 壺形土器

2は口縁部のみであるが、胴部からやや外反しながら立ち上がり、さらに大きく外反してその部分で折曲げ、内面と接合させるタイプの広口壺形土器である。

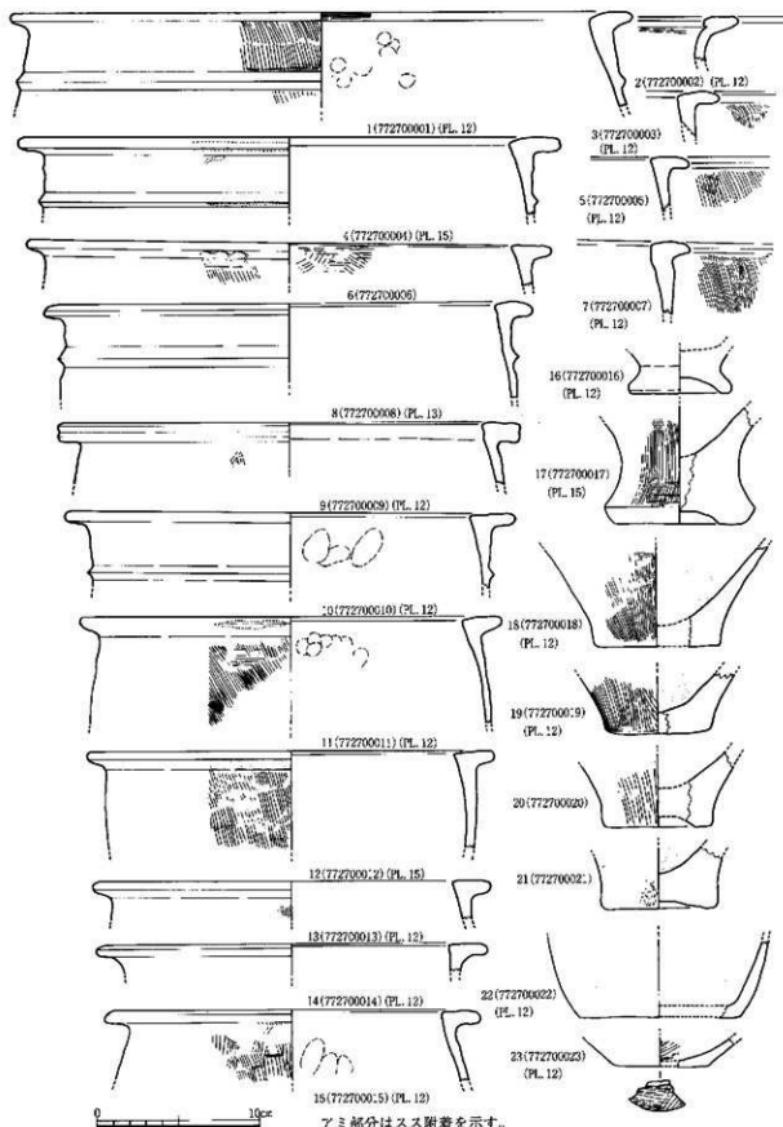


Fig. 15 第11次調査出土土器-1(縮尺1/3)

### 壺形土器

5は口縁部が平坦で、L字状口縁を呈する。胸部は内湾しながら立ち上がる形状を示す。外面は刷毛目を口縁下よりやや斜め方向と垂直方向に施す。13も5と同じくL字状口縁を呈し、口縁が平坦面を呈する。胸部はやや張り気味で最大幅は胸部上位に位置するタイプであろう。調整は外面に刷毛目を施している。口径24.2cmを測る。27は胸部からやや内湾しながら立ち上がり、口縁部でやや上に立ち上がり、口縁部端に上につまみ上げL字状口縁を造り出している。調整は内面ナデ仕上げ、外面は縦方向の細かな刷毛目調整を施している。口径29.6cmの壺形土器である。30は胸部からやや内湾しながら立ち上がり、頸部ではさらに内に入り、口縁部でやや丸みを持って斜め上に横引きし丸く納めるタイプで、まだL字状口縁と考えて良い。調整は外面が縦方向の刷毛目を施し、内面はナデ仕上げであるが、指圧痕が残っている。口径21.6cmである。

底部は2点図示した。19・21は壺形土器の底部で19は底径7cm、外面に縦刷毛目を施す。

### 器台

SD-01から出土した器台は38・40・41・43・45・46の6点を図示した。40を除いてすべて同タイプのもので、外面に縦刷毛目、内面は上下に横刷毛目・縦の指押えで仕上げている。

40は下部端部が丸く納まるタイプで、上記の器台より中央部が絞まらないタイプである。

## 包含層の土器

### 壺形土器

第V・VI層の遺構面から出土した土器群がある。SP-03（柱穴）を中心としてまとまりのある土器群や同一層に多量の土器が出土した。これらの土器群は、遺構検出が出来なかったため、包含層の上器として取り扱かった。この包含層でも壺形土器は少なく壺形土器・器台が主流を占めている。

壺形土器を口縁形態・突帶等で区分するとVI類に区分できる。

I類 1でみられる最大径が胴部にあり、内向しながらやや外反し、胸部上位に三角突帯を有し、L字状口縁を呈するタイプで、外面は縦刷毛目、内面はナデ仕上げを施すが、指圧痕が残っている。口径38cm前後を測る。

II類 3・7・8のタイプで、最大径が口縁部にあり、胸部から内湾しながら胴部上位で三角突帯を有し、ほぼ垂直に口縁部まで立ち上がり、口縁部はL字状口縁を呈し平坦面を有する。調整は、内外面とも刷毛目を施すものや、内面ナデ仕上げ・指圧痕のあるものもある。

III類 III類はII類と殆ど変化はないが胴部に三角突帯を持つものと、持たないタイプに区別できる。

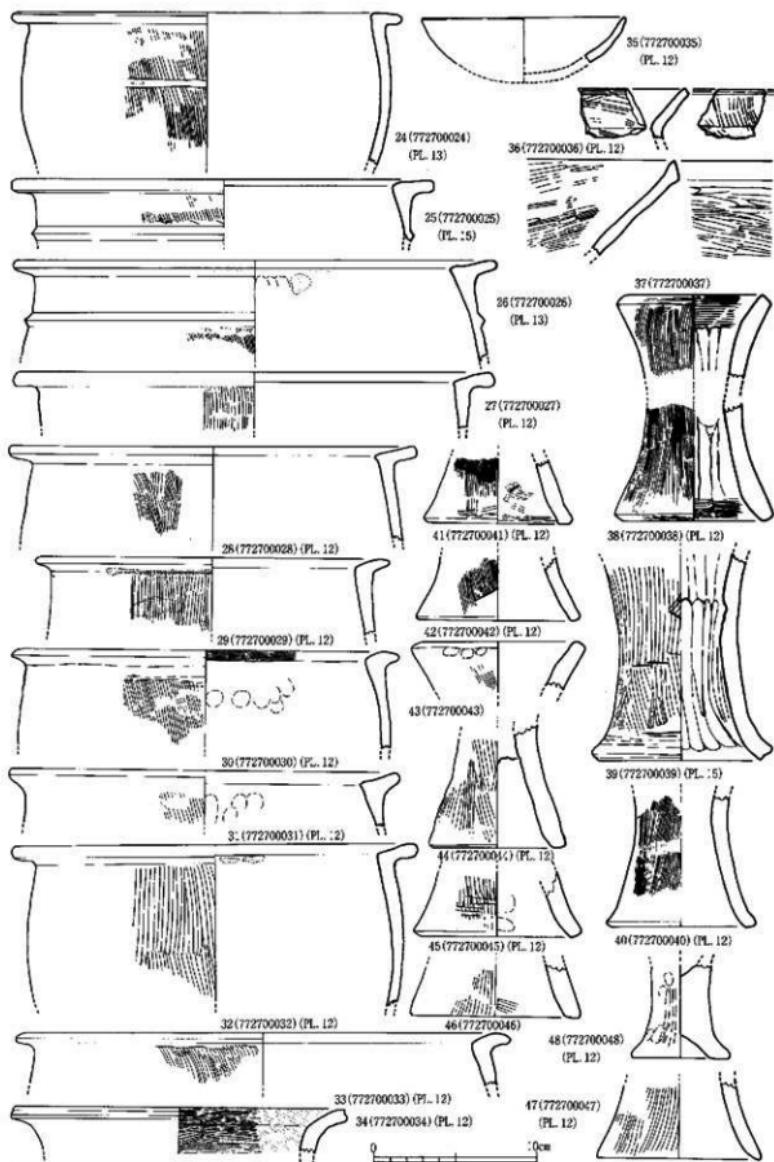
IV類 IV類は口縁部が平坦でL字状口縁部であることはII類と同じであるが、端部が丸みを持たず深みを持つタイプである。

V類 V類は口縁端部内面がやや下にさがるタイプ27~33がある。

VI類 VI類は口縁が如意形に開くタイプで34がある。

### 底部

底部は、16を除いて17~21までが壺形土器底部で、23が壺形土器の底部である。



アミ部分はスス附着を示す。

Fig. 16 第11次調査出土土器-2(縮尺1/3)

## 第三節 第14次調査の記録

### 1. 調査概要

第14次調査（K-11a）地点は、昭和52年度に専用住宅建設の申請が提出され、同時に試掘調査を行い、杭列造構等が検出されたため昭和53年5月29日から同年6月17日までの20日間、調査面積168m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。

#### 周辺の遺跡

周辺の遺跡には、第15次調査地点が南西側に位置し、同一杭列造構が検出され、南隣接地には四箇東遺跡1・2次調査（調査報告書は未刊、1次調査は公園建設に伴う緊急調査で昭和51年3月に調査を実施したもので、縄文時代後期後半の三万田式土器群を中心とした遺物が出土し、凹地状造構が検出された。2次調査は集会所建設に伴う発掘調査で昭和51年7月に調査を行った遺跡で、1次調査の北側、第14次調査の南側に位置する。遺構は四箇東遺跡1次調査からの凹地状造構と凸地部分が検出された。）さらに南側には、第20次調査（L-11C）地点が昭和57年度に行われた（四箇周辺遺跡(5)福岡市教育委員会刊 福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集1983）。この遺跡は四箇東遺跡第1次調査の南側に位置し、遺構も四箇東遺跡第1次調査と同様に凹地状造構の続きで、凹地状造構内に縄文時代後期後半の三万田式上器・黒耀石製削片石器・打製石斧・磨製石斧や十偶・円盤状土器等の特殊遺物が多量に出土し、福岡市における縄文時代後期の標石となる遺跡である。また遺構では、中央部に東西10mの幅で凹地造構が南北に延びており、その両岸には柱穴等を確認している。

第14次調査西側には、K-11a地点の試掘調査で明かとなった第二微高地がある。南側には四箇東遺跡1・2次調査・第20次調査で明かとなった第三微高地がある。第二微高地は、四箇遺跡C地点南側より第14次調査地点までヒヨウタンの形をした微高地であることが判明した。

この第二微高地・第三微高地のあり方はまだ不明確である。四箇東遺跡第1・2次調査・第20次調査地点、試掘調査を実施したL-11a地点は微高地に造構が遺存するが、第14・15次調査地点は、明らかに凹地で微高地間に流れる水路である。ここに第二微高地と第三微高地の切れ目が認められる。さらに第15次調査西側隅では段落ちが認められ、大きな水路が南北に流れていることが判明している。第14次調査の西側には第一微高地があり、この微高地は、四箇遺跡C地点の水路部分までつながり広大な面積を占める。

試掘調査K-11C地点・J-11f地点の結果から、耕作上下に疊層が見られかなりの削平を受けていることが判明し、第二微高地の遺構は、削平された可能性が強い。

第三微高地は四箇東遺跡1次調査地点からはじまり、試掘調査L-11a地点の調査で第三微高地西側の段落ちが確認されており、第三微高地が四箇東遺跡1次調査地点より南側であることが判明した。また15次調査地点の西側水路（水路改修工事、昭和50年頃行われたもので、この改修工事の際西側に深い段落ち部分があり、数多くの流木が検出されている）でさらに段落ちし、北側の第二微高地に沿って水路が確認されている。これが第12・17・19次調査地点の水路に続き、この西側部分が水田耕作地となっていた可能性が大きく、調査の開始を心待ちにしたが残念ながらこの周辺は調整区域であり、調査は今もって行われていない。

第二微高地と第三微高地の間隔は20mで第二微高地は四箇遺跡C地点（第6次）南側から第15次調査地点北側までの範囲で、南北に長いヒヨウタン形を呈する。横幅最大長は第8次調査地点の東側で約80m、最小長は第17次調査地点のくびれ部分で35mである。その面積はおよそ7,795m<sup>2</sup>であるが、中心部に現在家屋敷が建ち並んでいるため調査をする事が困難で、その内容は不明である。第三微高地は南側

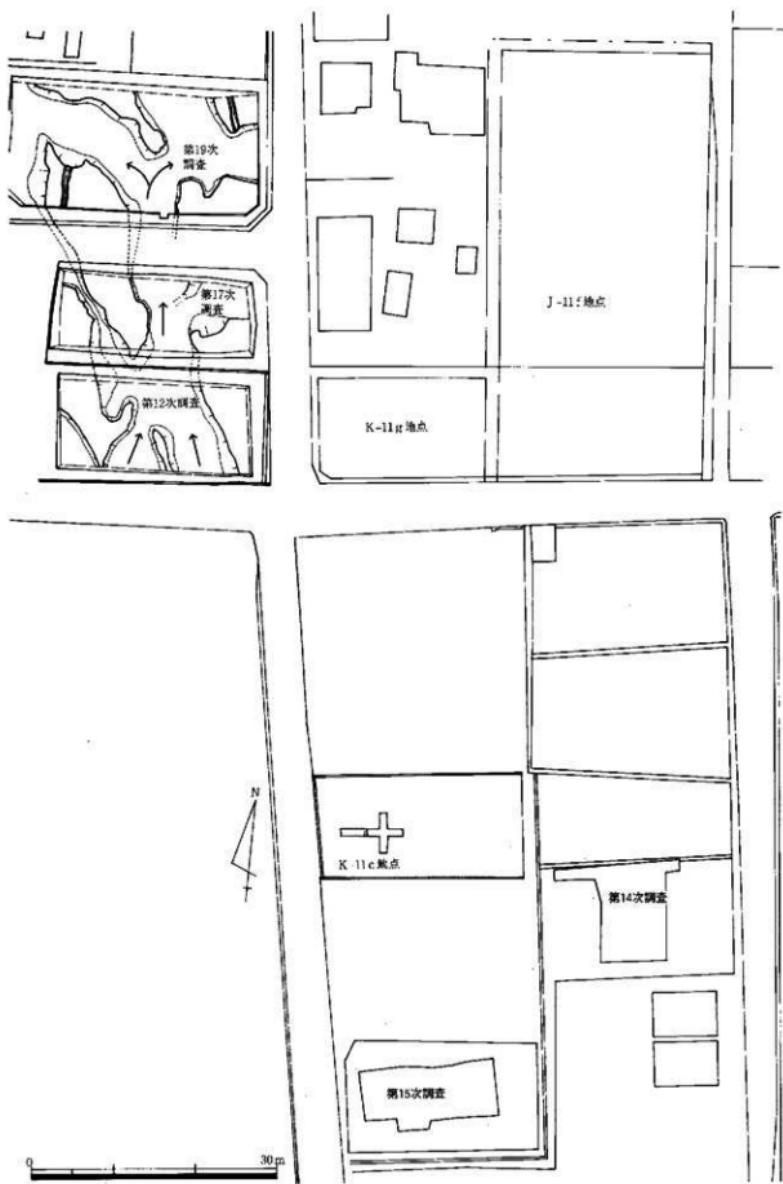


Fig. 17 第14・15次調査地点と試掘調査地点位置図(縮尺1/600)

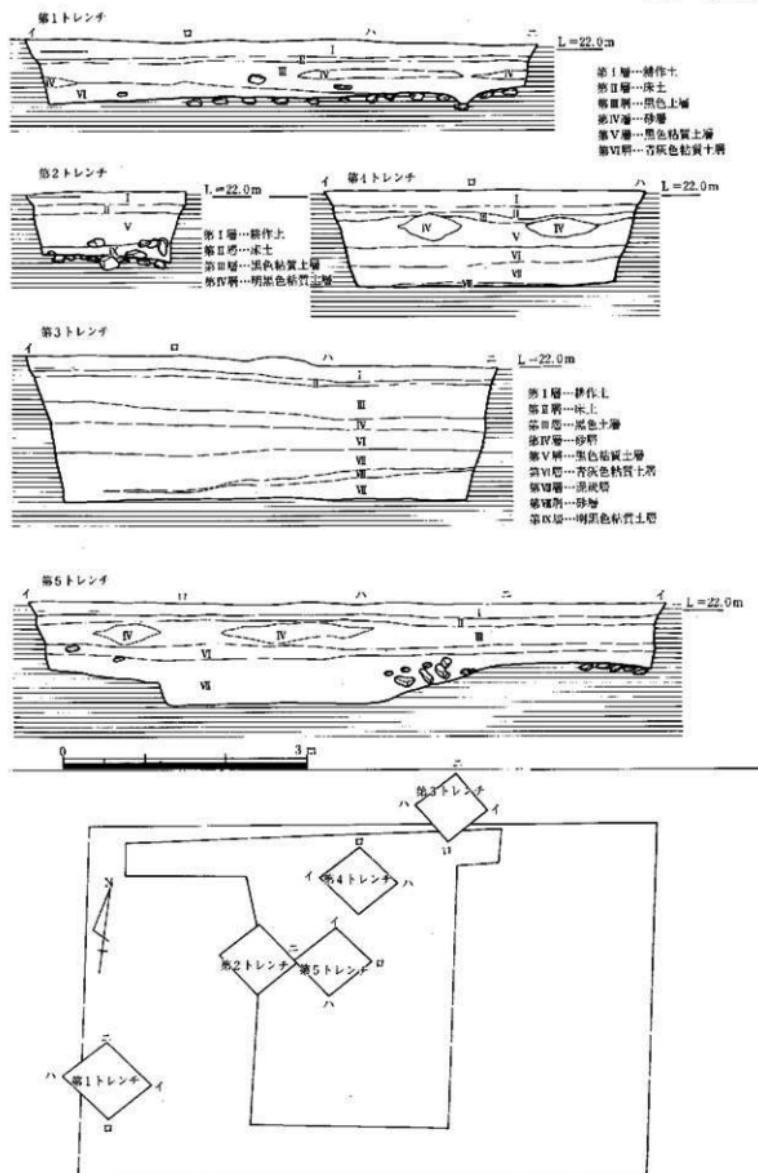


Fig. 18 第14次調査地点の試掘調査土層断面図(縮尺1/60)

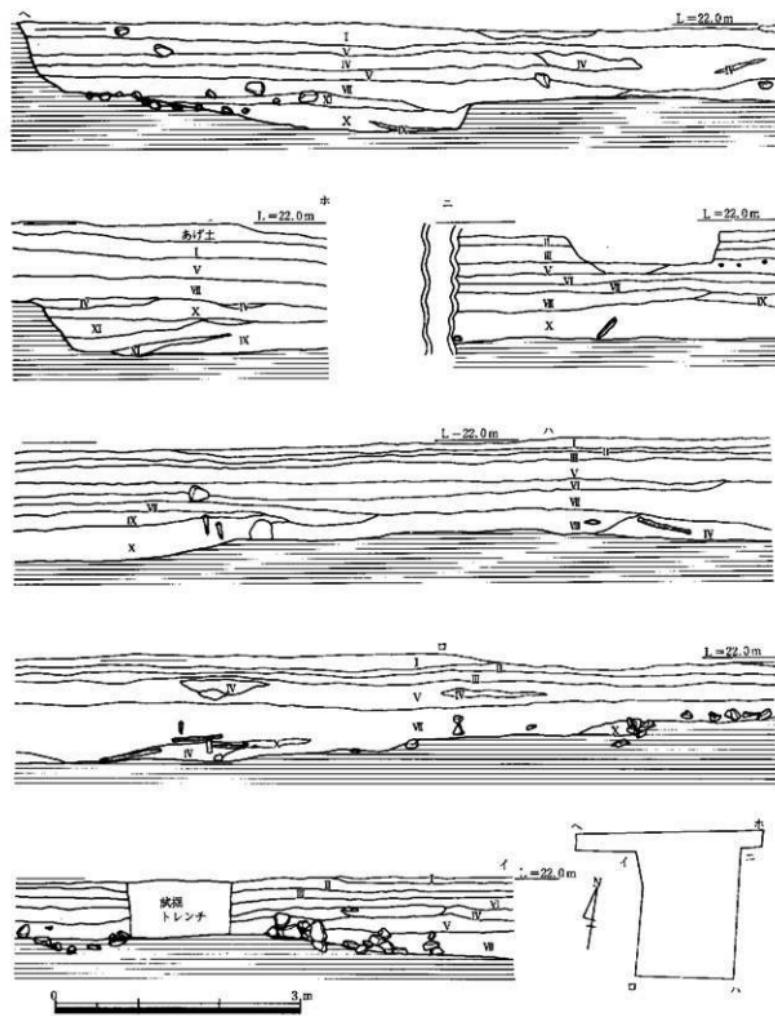


Fig. 19 第14次調査土層断面図(縮尺1/60)

部分が調査されていないためその範囲・内容等は明かではない。しかしながら標高的には南に行くほど高くなり、南450m地点には支石墓で知られる四箇船石遺跡があり、弥生時代前期の集落・墓地群が確認されている。また南東0.5Kmには前方後円墳である抒塚古墳があり、古墳時代の集落・墓地群が確認されている。

四箇遺跡D地点（第1次調査地点）東側300mには、四箇周辺遺跡群第23～25次調査地点がある。この周辺の調査では、弥生時代前期の溝状造構から漆塗り腕輪木製品等が出土しており、四箇周辺遺跡・四箇遺跡の弥生時代中期の造構と密接な関係が考えられる。

また、近年入部地区において圃場整備事業が実施された。範囲は四箇田団地南側から入部地区全域である。四箇東遺跡1次・第20次調査地点から東に約250mで、入部遺跡1次調査が行われた。縄文時代後期後半～晚期の貯蔵穴・堅穴住居跡・溝等が検出された。住居跡は3mの円形住居跡で、中央に深鉢を使用した炉を造り出している。四箇東遺跡1次・第20次調査地点および四箇遺跡と同様に集落が狭い範囲であったことが窺える。この調査は、四箇周辺の縄文時代後期から晚期にかけての生活造構を考える上で非常に重要である。

北側には田村遺跡群がある。田村遺跡からは、縄文時代前期・中期・晚期の土器群が出土しており、特に前期・中期の土器群は、瀬戸内系土器の系統を引く遺物である。また弥生時代にもこの地を利用した痕跡が残っており、中期の円形住居跡・溝状造構等が検出されている。このほか条里制造構である里界溝や掘建柱建物等が確認され、奈良時代から平安時代にかけての人集落であったことが窺える。

## 2. 土層 (Fig.18・19 PL.3・8)

試掘調査は南西から北東にかけて坪掘りを実施し、南西側より第1～3トレンチを設定した。第2・3の間に第4トレンチを、2の南東側に第5トレンチを設定した。試掘調査の土層図 (Fig.18PL.3) と本調査の土層図 (Fig.19PL.8) とに差異はない。ただ本調査では1トレンチの部分は対象外としたため、この部分の層序を記載する。

第I層	耕作土	8～20cm
第II層	床土（黄褐色土）	10cm
第III層	黒色土	20cm
第IV層	砂のブロックが混じる黒色粘質土	22cm
第V層	疊混じりの明褐色粘質土	12～30cm

第VI層 疊層（基盤層であるがこの下にもう一枚疊層があり、これが本米の基盤層である）

造構のある部分には第VとVI層との間に上層 青灰色シルト層、下層 砂混じりの泥炭層がある。基本的には各トレンチとも同様な層序である。本調査の層序も基本的には同じであるが、第V層とVI層との間の層位が細分化される。第I～III層まではほぼ同じであるが、第IV層の黒色粘質土が上下二枚に分かれ、第V層の褐色粘質土も粘質の強い部分とシルト質に分けられる。第V層とVI層との間の層位は、青灰色粘質土と青灰色シルト層及び茶褐色粘質土、下層を泥炭層と砂の瓦層部分、泥炭層と青灰色シルト層部分がある。杭・流木は第V層の泥炭層、もしくは茶褐色粘質土から打ちこまれている。土層から観察すると、西側から東側に台地が落ち、この部分に杭列等が検出される。西側には低い凸地が認められ、ここにも杭列が検出されている。

### 3. 検出遺構

調査区は、試掘調査の結果をふまえ2・4・5トレンチ部分を主に広げ東西に長いトレンチを入れ遺構の確認をした後、南北に10×14m全体で168m<sup>2</sup>を調査した。試掘調査では凸地に当り、凹地の遺構には第5トレンチだけであったが、東西に広げたトレンチで遺構面に凹凸があることが判明し、西側に一条の溝が確認されたが杭列・遺物の出土はなかった。トレンチ中央部で凸地があり、杭列を確認した。東中央部で段落ちし、この部分から凹地がはじまると思われる。西側に第二微高地がつづくため、この凸地は第二微高地の段落ち部分と考えられる。杭列とともに流木・横木等の検出がある。Fig. 20に図示したものは、遺構検出状態であるが、凹

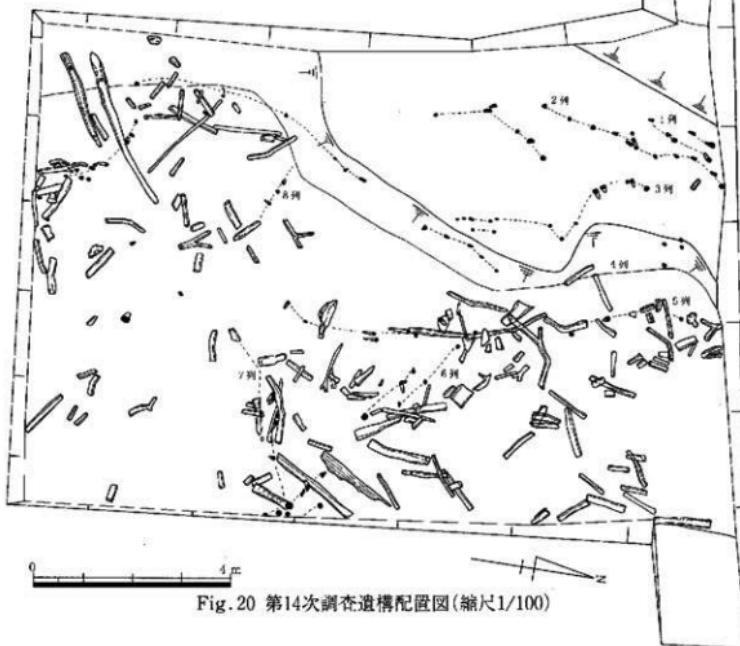


Fig. 20 第14次調査遺構配置図(縮尺1/100)

地の上層から激しく流れる時期（砂の堆積）とゆるやかな流れ（泥炭層）があり、流木は激しく流れた時期に運ばれたものであろう。杭列にからむ横木は本來この部分に設置されたもので、5列目に見られる横に長い木はその殆どが横木である。杭列は8列検出した。1~4列は凸地上と東段落ち部分に認められる。1・2列は南北方向に二列併行に並ぶ。3列目は蛇行しながら4列目の杭列付近まで伸びる。4列目は段落ち肩部に打ち込まれ、途中切れ切れで、肩部を通りながら調査区南側まで伸びている。5列目は段落ち凹地中に打ち込まれた杭列で、杭列がかなりの破壊を受けているにもかかわらず、杭列に横木が

認めらる。

また杭列上部に小枝等によって杭列を組合せている。6列目は5列目より分かれ北西から南東方向へ向かうが、途中で2.5mの間隔があき、さらに二列になり南東へつづく。7列目は6列日の杭列が途絶える南東側から始まり、北東から南西へ向けて進むが、途中には杭はなく散発的に並ぶ。これは水の流れによって崩壊したものと考えられる。8列目の杭列は、段落ち部分に直角に7列目に向かって伸びている。方向的に流れに逆らう形をとる。

水の流れは南側及び第15次調査地点（南西～北東）から北側に向かって流れる。流れは、7列日の杭列によって堰留められ、6・7列目の水路を

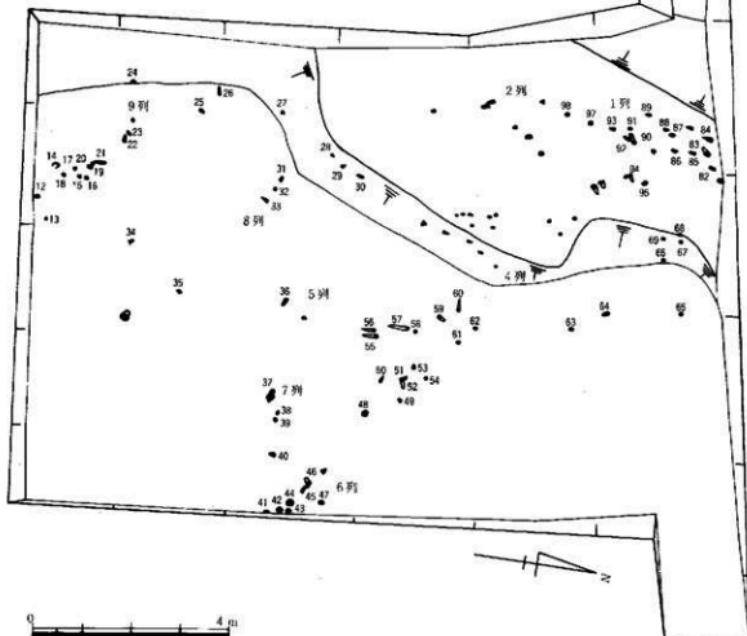


Fig. 21 第14次調査杭列検出平面図(縮尺1/100)

通り5・6列日の東側へ流れるものと7列日途中から向きを西に変え6列目の2.5m開いた部分へ流れ東側に流れ込こむ。杭列の4列日は護岸の為に設けられた感が強く、5~8列の杭列が水の調整役としての役日を持つものであろう。ただ1~3列の杭列に関して、特に3列日の杭列は、意味不明の感がある。水田区割りの杭列とも考えたが、かなり蛇行をすることや、すぐ近くに杭列があることから、水田区割りの可能性も殆どない。また1・2列の杭列も同様で、西側溝状造構の護岸杭としか考えられず、これら杭列の持つ意味が不明確である。

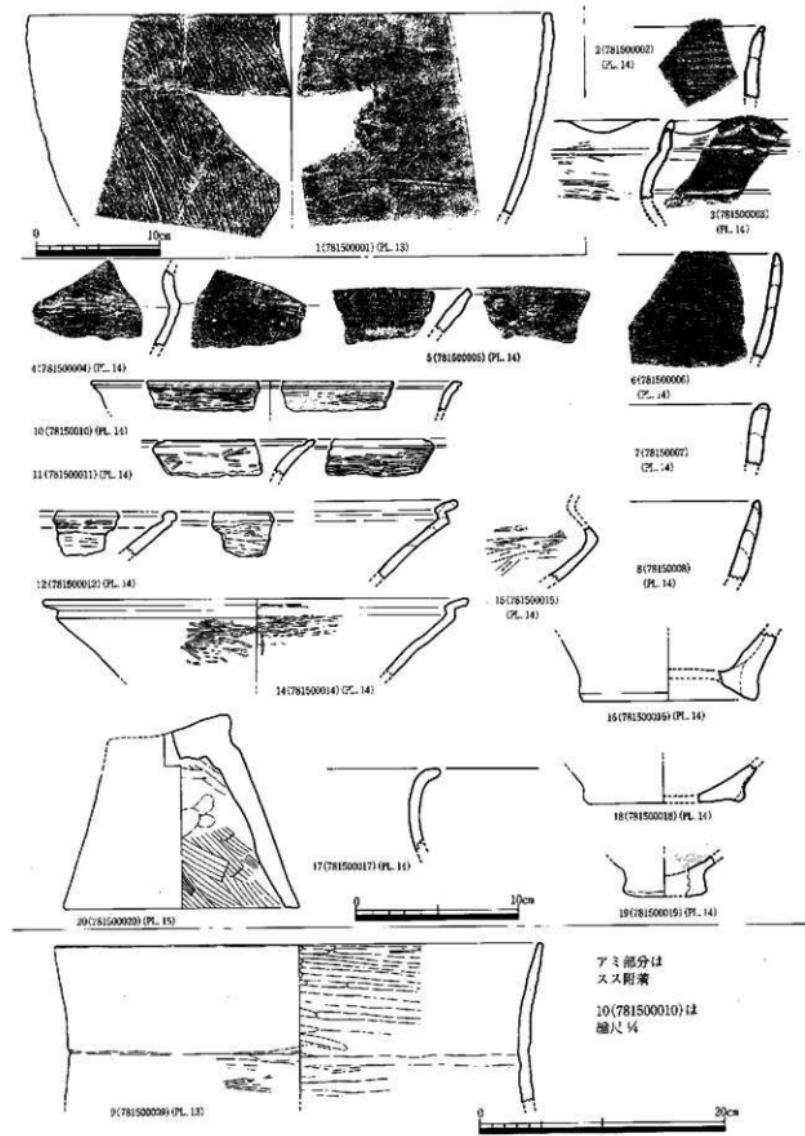


Fig. 22 第14次調査出土土器(縮尺1/3, 1/4)

## 4. 出土土器

出土土器はその殆どが凹地から出土したもので四箇東遺跡及び西側第二微高地からの流出遺物と考えられ、杭列遺構に伴うものは出土していない。ただ一番近い時期と考えられる遺物は20の杏形器台で弥生時代後期後半に位置付けられ、他は縄文時代中期から弥生時代前期の遺物である。

### 粗製・半精製土器 (Fig. 22-1~8 PL. 13·14)

1は縄文時代後期粗製深鉢形土器である。胸部からやや外反しながら口縁部付近で内湾ぎみに立ち上がり、口縁部端は平坦面に仕上げている。外面は下からやや斜め上に条痕を施し口縁部まで達している。内面は横方向のナデ仕上げであるが、まだ粘土繋ぎが確認できる。器面は薄く仕上げられている。口径は43cmで大型の深鉢形土器である。2は赤褐色を呈する半精製鉢形土器口縁部である。外面は横方向から幅広い条痕文を施している。内面も条痕を施した後、ナデで丁寧に仕上げている。口径は不明。3は山形口縁部の形態を有する鉢形土器である。口縁の山形に沿って沈線を入れ、口縁部下に一条の沈線を巡らす。山形口縁下に烈点文を配する。胸部中位にも一条の沈線を巡らす半精製土器である。内面にも一条の沈線を巡らし、横方向にナデ仕上げを施している。4は鉢形土器の胸部で半精製土器の範疇に入る土器である。内外面とも横方向の条痕を施した後ナデ仕上げを施している。5は粗製深鉢形土器の口縁部で、口縁部がひらく形態を呈する。内面はナデと条痕により成形し、外面は荒い条痕を施している。6は半精製深鉢形土器で内外面とも黒褐色を呈する。外面は条痕のあとナデ仕上げを施し、内面は口縁部下1.5cm部分に条痕を施し、その下は範ナデを施している。7·8は半精製深鉢形土器口縁部である。内外面ともナデと条痕を施している。

### 精製土器 (Fig. 22-10~15 · 18 · 19 PL. 14)

10·11~14は精製の浅鉢形土器である。10は口径30.4cm、内外面とも範磨きを施し、外面口縁部に一条の条痕を巡らす。11も10と同様の形状・調整方法を持つが、内外面に一条の沈線を巡らす。12も同様な形状を呈するが、口縁端部が厚くなる。13·14は同形態を持つ土器で、胸部から外反しながら頸部で急激に内に入り、さらに外反し口唇部に達する。14の口径は26cmで内外面とも丁寧な範磨きを施す。15は精製鉢形土器の胸部である。内外面とも範磨きを施すが、外面に条痕は認められない。

### 縄文時代後期底部 (Fig. 22-16 · 18 · 19 PL. 14)

16は大型深鉢形粗製土器の底部で、上げ底である。底径10.5cmを測る。18は精製浅鉢形土器の底部でやや上げ底タイプである。内外面とも丁寧な範磨きを施している。底径9.4cmを測る。19は鉢形土器の底部で、底径5.2cmを測る。内外面とも範磨きを施す。

### 弥生式土器 (Fig. 20-9 · 17 · 20 PL. 14 · 15)

17は弥生時代前期の壺形土器口縁部である。色調は赤褐色を呈し、口縁の張りから板付式の時期に比定できる。9は口縁部の立ち上がり・内面範磨きから縄文時代晚期~弥生時代前期に比定できる大型の壺形土器である。口径40cmを測る。20は弥生時代後期後半によく出土する杏形器台で、台座が斜めになり端部が嘴状を呈する。中央部に穿孔を施している。内面は6mm単位の刷毛目を施す部分と指オサエ・ねじり痕が認められる。外面は刷毛目と思われるが、その痕跡は不明。この20が第14次調査の杭列遺構の時期に最も近い時期を示すもので、このほか少量の弥生時代後期の壺・壺形土器胴部破片が認められるだけで占墳時代の遺物は出土していない。

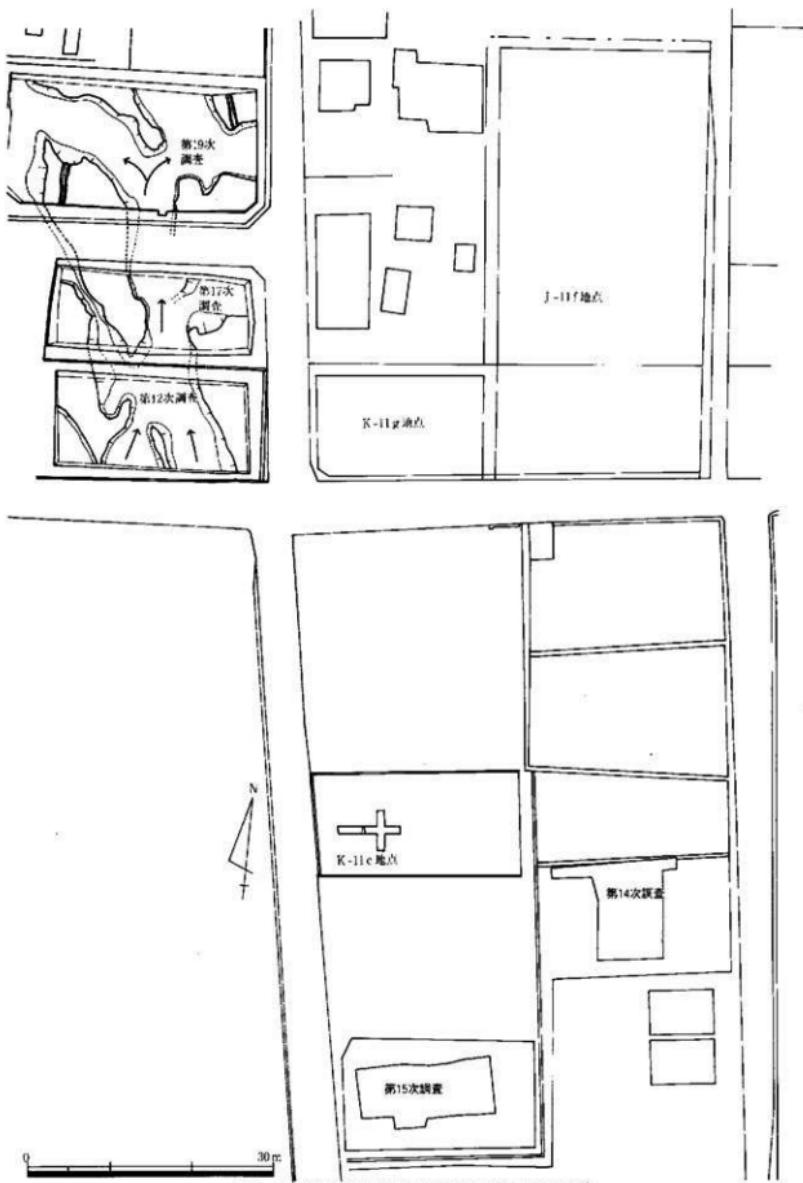


Fig. 23 第15次調査地点位置図(縮尺1/600)

## 第四節 第15次調査の記録

### 1. 調査概要

第15次調査(J-11b)地点は、昭和57(1977)年度に個人住宅建設の申請が提出され、昭和53(1978)年度に発掘調査を実施した。担当は塩屋勝利(現文化財部整備担当課長)と二宮忠司が実施し、調査補助員として渡辺和子(現筑紫野市職員)が加わった。調査は、昭和53年6月18日から同年8月8日までの約20日間、調査面積107m<sup>2</sup>を実施した。この年は福岡第1次渴水時期で、水不足に悩みながらの調査であったが、遺跡からは多量の地下水が湧水し、これを水田に流しながらの調査で、農家にご迷惑をかけた調査であった。

#### 周辺の遺跡

第15次調査地点は、第14次調査地点でも述べたごとく、遺跡の立地としては低湿地に当たるもので、第14次調査の西側に第二微高地の南東隅が確認されていること、第15次調査地点では、微高地が確認されていないこと、試掘調査K-11c地点で、微高地段落ち部分が確認されていること、第12次・17・19次調査地点(四箇周辺遺跡(6)福岡市教育委員会刊 福岡市埋蔵文化財調査報告書第428集に収録 1995)に第二微高地と水路を確認していること、J-111地点の試掘調査で、第二微高地東側段落ち部が確認されていることなどから、第二微高地の範囲を確定出来るものであった。

また第三微高地は、四箇東遺跡第1・2次調査(調査報告書は未刊、昭和50・51年に調査された遺跡で第1次調査は公園建設工事の際に発見され、緊急調査を行い、縄文時代後期後半の三万田式土器群・黒耀石製の剥片石器・特殊磨製石器・石皿・多量の石器等を出土し、四箇遺跡第2次調査地点から出土した縄文時代後期後半の西平式土器との前後関係、石器組成の変化等を考察する上で非常に重要な遺跡であることが判明した。第二次調査は第1次の北側、第14次調査の南側の集会所建設に伴う調査で、第三微高地の段落ち部分と杭列遺構が検出された)によって北側端部が確認され、L-11a地点の試掘調査で、北東隅が検出された。

第20次調査時に於いて((四箇東遺跡第1次調査地点の南側、四箇周辺遺跡(5)福岡市教育委員会刊 福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集に収録 1983)四箇東遺跡第1次調査地点の出土遺物と同時期・同一遺構が検出された。縄文時代後期後半の三万田式土器群を中心とする遺構で、中央部に東西10mの凹地が南北方向に延びており、その両岸には、柱穴等を確認している。遺物は、三万田式土器の精製土器・半精製土器・粗製土器・注口土器・上偶・円盤状土製品や、黒耀石製の剥片石器・特殊磨製石器・石皿・多量の石器等を出土し、福岡市に於ける縄文時代後期後半の遺跡として、四箇遺跡第2次調査地点(A地点)の遺構・遺物と共に標石となる遺跡である)微高地の遺構が確認され、第三微高地が南に広がり、縄文時代後期の遺構が現存していることが判明した。

また、第15次調査地点の西側水路(昭和50年に行われたもので、この改修工事の際西側に深い段落ち部分があり、数多くの流木が検出された)で、更に段落ちし、北側第二微高地に沿って水路が確認されており、これが第12・17・19次調査地点の水路に続き、この両側部分が、水田耕作地となっていた可能性が大きく広がり、調査の開始を心待ちにしたが、残念ながらこの周辺は市外化調整区域であり、調査は今も行っていない地域である。

第二微高地と第三微高地の間隔は20mで第二微高地は、四箇遺跡C地点南側(第6次調査)から第15次調査地点の北側までの範囲で南北に長いヒヨウタン形を呈し、横幅最大は、第8次調査地点の東側で80m、最小長は第17次調査地点の部分でくびれ部分の35mである。南北は155mでその面積は約7,795m<sup>2</sup>であるが、中心部に現代の家屋敷が建ち並んでいるため、調査することが困難でその範囲・内容等は明

第四節 第15次調査の記録

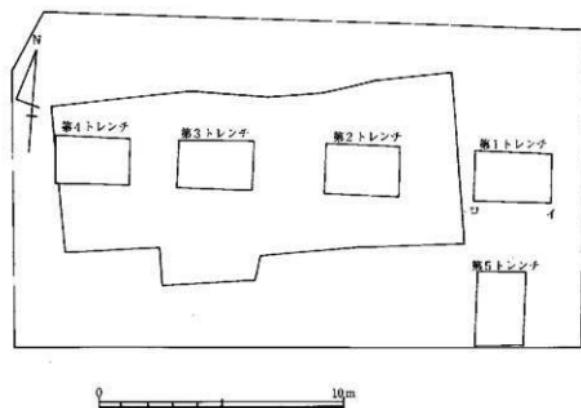
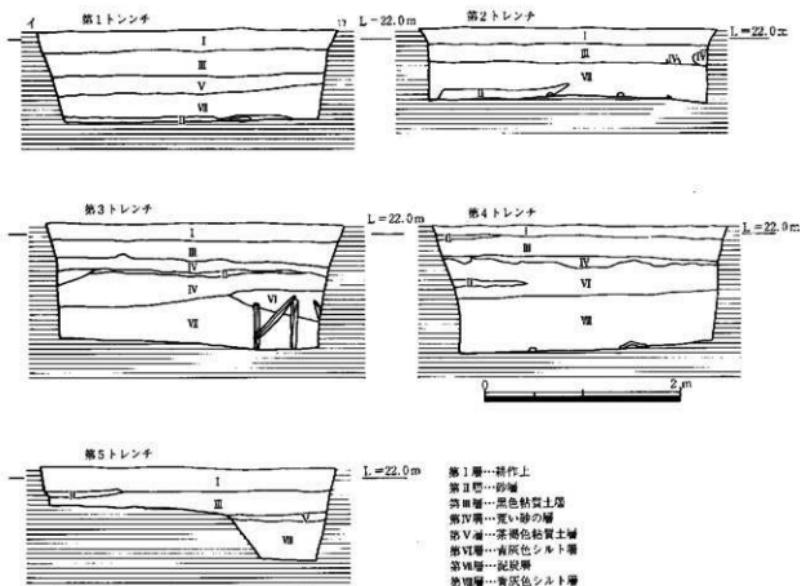


Fig. 24 第15次調査試掘土層断面図(縮尺1/50, 1/200)

かではない。しかしながら、標高的には南に行くほど高くなり南約500mには支石墓で知られる四箇船石遺跡があり、この遺跡群の調査でも弥生時代前期の集落・墓地群が検出されている。また南東0.5kmには、前方後円墳である押塙古墳があり、古墳時代の集落・墓地群が確認されている。

東側には、四箇遺跡第1次調査(D)地点から約300mに四箇遺跡群第23~25次調査地点があり、これらの調査では、弥生時代前期の溝状遺構から塗塗りの腕輪状木製品等が出土しており、四箇遺跡群1~20次の弥生時代前期から中期の遺構と密接な関係が考察できる。

近年、入部地区において西場整備事業が実施された。範囲は、四箇田出地南側から入部地区全域である。

四箇周辺地区に近い所では、四箇東遺跡より東に250mの所で縄文時代晩期初頭の住居跡5軒・貯蔵穴・埋葬等が(入部1重留遺跡第1次調査 福岡市教育委員会刊 福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集 1990)検出されている。この微高地は、四箇遺跡第3(E)調査地点や第1(D)調査地点の南に位置するもので、縄文時代の遺跡が広い範囲に認められる。

この他に四箇船石遺跡群(四箇遺跡群から北東へ1km)にも、縄文時代晩期初頭の遺跡(四箇船石第4次調査 福岡市教育委員会刊 福岡市埋蔵文化財調査報告書第422集収録)から、住居跡・溝状遺構等が検出され次第に周辺部の様相があきらかになりつつある。

## 第15次調査

### 2. 土層 (Fig. 24・25PL. 11)

調査を開始するまえに昭和52(1977)年度に試掘調査を実施した。試掘調査は5つのトレンチを設定し、東西に4つ、第1トレンチ南側に第5トレンチを設定した。トレンチ設定図・土層図はFig. 24に図示したが、第1トレンチからは遺構の検出は認められなかった。

基本土層は

- 第I層 耕作土 20cm
- 第II層 砂層
- 第III層 黒色粘質土層 25cm
- 第IV層 荒い砂
- 第V層 茶褐色粘質土層
- 第VI層 青灰色シルト層(泥炭層と砂がブロックで混入) 20cm
- 第VII層 泥炭層 32cm

第2トレンチの土層は、第1トレンチと3mしか離れていないのに第VI層の青灰色粘質土層がなく、第III層黒色粘質土層からいきなり第VII層の泥炭層となり、第IV層の砂層もブロック的に認められるだけであった。流木・横木等は、第VII層の泥炭層下面から検出され、第VII層の厚さは32cmと厚い。第3トレンチになるとさらに複雑な様相を示していく。第1層は耕作土20cm、第III層が黒色土層で20cmの堆積、第VI層が青灰色シルト層であり、次ぎにIV層の荒砂の薄い層が認められる。その下に細かな砂の堆積があり急激な流れがあったことを物語っている。砂の堆積は35cm程度である。更に青灰色微砂層が第VII層の上部にブロックで堆積するが、この部分から立杭が確認され、この層の持つ意味が重要となってきた。第VII層は泥炭層で厚さ40cmを測る。第4トレンチは層序が逆転しているかのような様相をしめしており、試掘調査時点で戸惑いを覚えた。第VII層と第VI層が逆転していることからである。

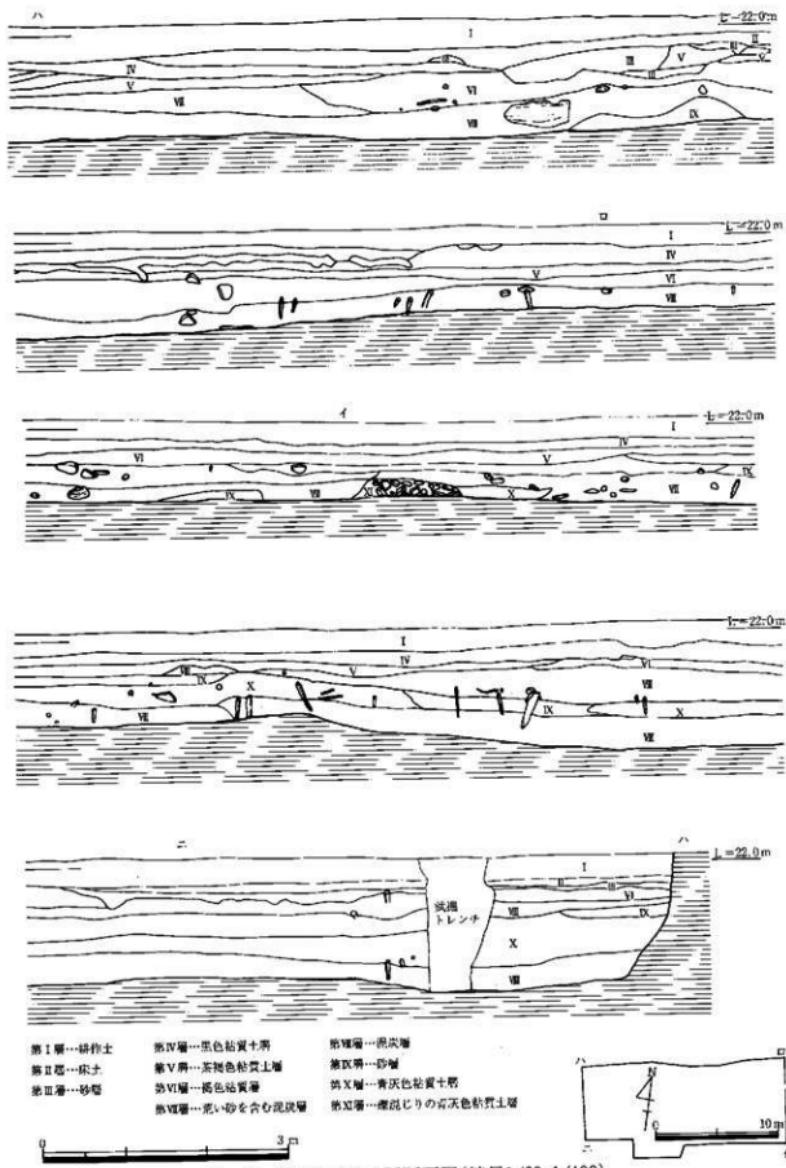


Fig. 25 第15次調査上層断面図(縮尺1/60, 1/400)

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅲ層は黒色土でここまでは從来の土層と差異は無い。しかしながら、次ぎに砂層を間層に挟み第Ⅳ層の泥炭層が上位に位置し、その下層に青灰色粘質土が堆積しておりこの下位から流木が確認された。泥炭層は20cm、青灰色粘質土は35cmの厚さで堆積している。調査で明かとなるがこのVI層とした青灰色粘質土は下層のもので、疊層と同じ状況でこの部分にしか見られず、四箇遺跡A・B地点第18次調査地点で認められた縄文時代前期の包含層と同じ土層であり、上部の青灰色粘質土とは区別出来る土層である。

第5トレンチは、第1トレンチの南側4mの距離をおいてトレンチを設定した。この部分は、南側で第三徹高地の二段目の段落ち部分が確認され、北側1mでは急激に段落ちし、第VI層の青灰色微砂土（シルト層）が認められた。第Ⅰ層と第Ⅲ層との間に砂を挟み、第Ⅲ層と第VI層の間に灰褐色粘質土が堆積している。

発掘調査時の土層は、試掘調査の上層とあまり変化はないが、部分的に砂層や泥炭層がブロック状に堆積したり、基盤疊層とは



Fig. 26 第15次調査杭列と流木検出平面図(縮尺1/80)

異なる礫層・青灰色粘質土上のブロックが認められ、層位基準を定めるに至らなかった。

調査地区的土層を表記すると、第Ⅰ層が耕作土、第Ⅱ層が赤土、第Ⅲ層が砂層、第Ⅳ層が黒色粘質土、第Ⅴ層が茶褐色粘質土、第Ⅵ層が褐色粘質土、第Ⅶ層が荒い砂を含む泥炭層、第Ⅷ層が泥炭層、第Ⅸ層が砂層、第Ⅹ層青灰色粘質土、第Ⅺ層が疊混じりの青灰色粘質土である。第15次調査地点では、第Ⅰ層から第Ⅹ層まですべて砂の堆積が認められる。これは、この周辺が常に冠水していたことを物語るもので、流れの早い時期や、緩やかな流れの時期があったことを彷彿させる。

### 3. 検出遺構

検出された遺構は、杭列遺構だけである。Fig. 26・27に見られるごとく、杭列は南西から北東に向かって打ち込まれている。Fig. 27の杭列だけの配列を見ると、東から7列までは、N-25°-Eの方向を取る。この方向は、第14次調査地点の杭列方向に向かっている。また北・南側壁面の土層を見ると、砂層の流れる方向が杭列の方向と一緒にであり、杭列により水の



Fig. 27 第15次調査杭列検出平面図(縮尺1/80)

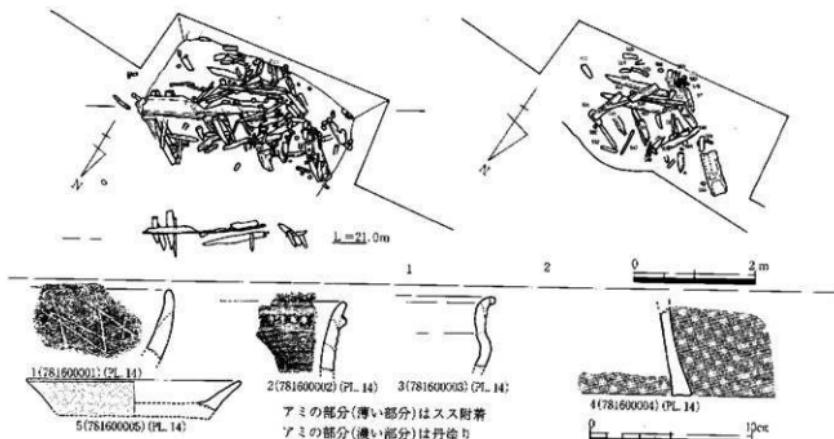


Fig. 28 第15次調査拡張部平面図と出土土器(縮尺1/3, 1/80)

流れを一方向に流す役割を持っていたと考えられる。しかしながら七列もの杭列を打ち込み、強固な堰状造構とした意図はどこにあるのであろうか。北東部には、四箇所遺跡からの段落ちが認められるが、第5試掘トレンチからみると第三階高地二段目の平坦面が認められることから、幅2mの水路が南西から北東の方向へ流れていたものと考えられる。この杭列は、西側の護岸杭とも考えられる。ただ北東中央部に、これら七列の杭列に直行する杭4本が確認されている。この4本だけでは確定することは出来ないが、杭列の上部が砂の堆積で埋まる状態であること、杭列の頭部が北側に倒れていたことなどから、この部分に堰状造構の存在を彷彿させる。また第1列目の杭列がかなり抜けていることから、流路の水が急激であったことを物語っている。

杭列4列目と6列目を見るところの部分の間隔が広く、特に5列目が途中からなくなり広い水路となっている。これにかかるのが、拡張部(Fig. 28)に見られる樋状の木製品である。これは南側に杭列を配し、北側には斜めの杭列によって樋状木製品を固定している。樋状木製品の北側には、横木が配置されている。この樋状木製品から流れ出る水が、第5列と6列目の間に流れ落ちる。7列目は6列目と同様に配列しているが、6列目が切れる部分からさらに細かい間隔で打ち込まれている。

8列目は9列目の途中から、南西から北東の方向に向かって列をなしている。この8列目は、9列目の南側にも列をなして打ち込まれている。9列目は樋状木製品付近から発する杭列が、北西に向かうものと、南から北進する杭列とが接合し北に向かって伸びる。8列目と9列目の間は3mあり、この間は淀み部分となる可能性がある。

10列目は、9列目に沿って打ち込まれており、30cm間隔で同じく北方向に伸びるが、途中で切れている。南側は、9列目と同様に南に伸びる。11列目は、10列目よりかなり離れている。その間隔も散発的で南から弧を描きながら北方向へ向かう。

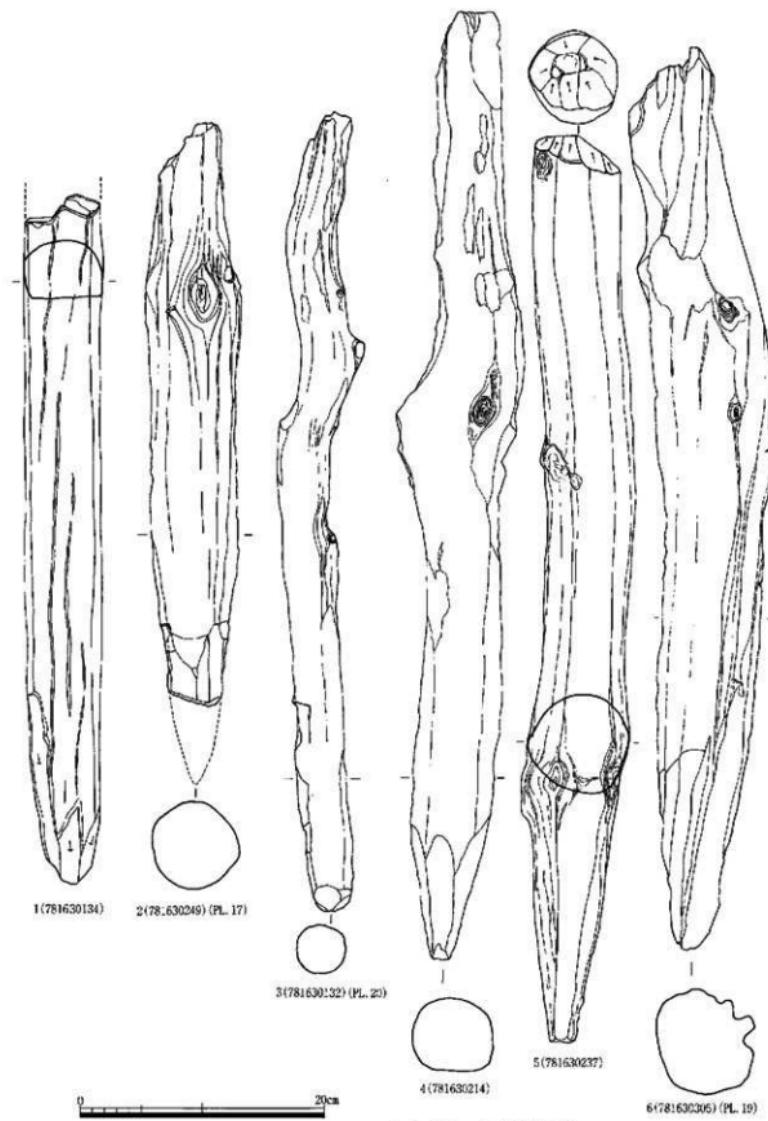


Fig. 29 出土木器—1 (縮尺1/4)

Fig. 28-1・2は、拡張部の杭列・樋状木製品と横木の検出状況である。樋状木製品は、杭列により固定されている。断面から西側が高く東側が低い形状を呈することから、水を西から東へと流すための樋状木製品であり、このため西側には、数多くの杭列・横木が配列されていた。さらにその下層には、Fig. 28-2で見られるごとく、横木を配して固定を行っている状態である。

#### 4. 出土土器 (Fig. 28 PL. 14)

出土した上器は少なく、縄文土器片の胴部がコンテナ1箱出土したにすぎない。Fig. 28に図示した上器は1砂層、2~4が泥炭層からの出土で、5が第IV層の黒色土層から出土した。

1は縄文時代前期に見られる鉢形土器の口縁部である。外面はナデの後、笠による文様を描いている。この上器と同じものが四箇遺跡群第18次調査の縄文時代前期の包含層（四箇周辺遺跡（4）福岡市教育委員会刊福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集 P48第33-89.90に収録）から出土しており、鹿児島県阿多貝塚に類似の出土を見る。調整は内面に条痕を施した後ナデ調整しており、外面は斜格子文様を描く。山鹿貝塚・新延貝塚においても類似性をもつ上器群の出土を見ている。

2は縄文時代晩期の夜臼式土器口縁部である。刻み目突蒂紋が口縁線上に付くのではなく、より下位に貼付けている。3は弥生時代中期の壺形土器口縁部である。4は表面丹塗りの特殊器台の脚部である。内面にもほぼ1cm幅で丹塗りをおこなっている。内外面とも丁寧な横ナデを行っている。5は第IV層の黒色土層から出土した上器皿で、おそらく板目痕のあるものであろう。口径13.2cmを測る。

## 第四章 出土遺物

出土した遺物の中で時期決定のため、上器はそれぞれの出土地点の節で述べてきた。この他の遺物として木製品・石器の出土がある。

### 1. 木 器

木製品として立杭・横木・杵・三叉鍬・樋状木製品等が出土したが、15年以上の年月が経ってしまい保存状態が悪く、乾燥したものが殆どであった。その内、保存状態が良い杭等を図示した。

#### 第14次調査の木製品 (Fig. 32・34 PL. 18-19 Tab. 3)

第14次調査地点出土の木製品は、Tab. 3で示した様に105点の杭・横木等を取り上げた。杭の内、丸木杭・丸太杭は出土数52点で、全体の約50%を占める。矢板は52点で、全体の約50%を占め、丸杭と矢板では、約半々である。図示したのは9点である。38は丸木材の端部に加Tを加え、先端部を尖らせる形状を持つ材である。面取りは、すべての周辺部に施している。他の一端は欠損しているため定かでない。現在長160cm、径9cmの丸木材で横木として利用されていた。39は現在長126cmの四面を面取りした柱材で、幅8cm、厚さ6cmを測り、これも横木として利用されていた。40は流木であるが、現在長118cm、6cmの径を持つ材で、両端とも欠損している。41は現在長33cmの樹皮付きの丸木材で、径4.8cmを測る。上下端が欠損している。先端部は、片面からの削りである。42は上下端部が破損した杵で、現在長50.3cmある。乾燥したため形状が変化してしまった。

1. 木 器

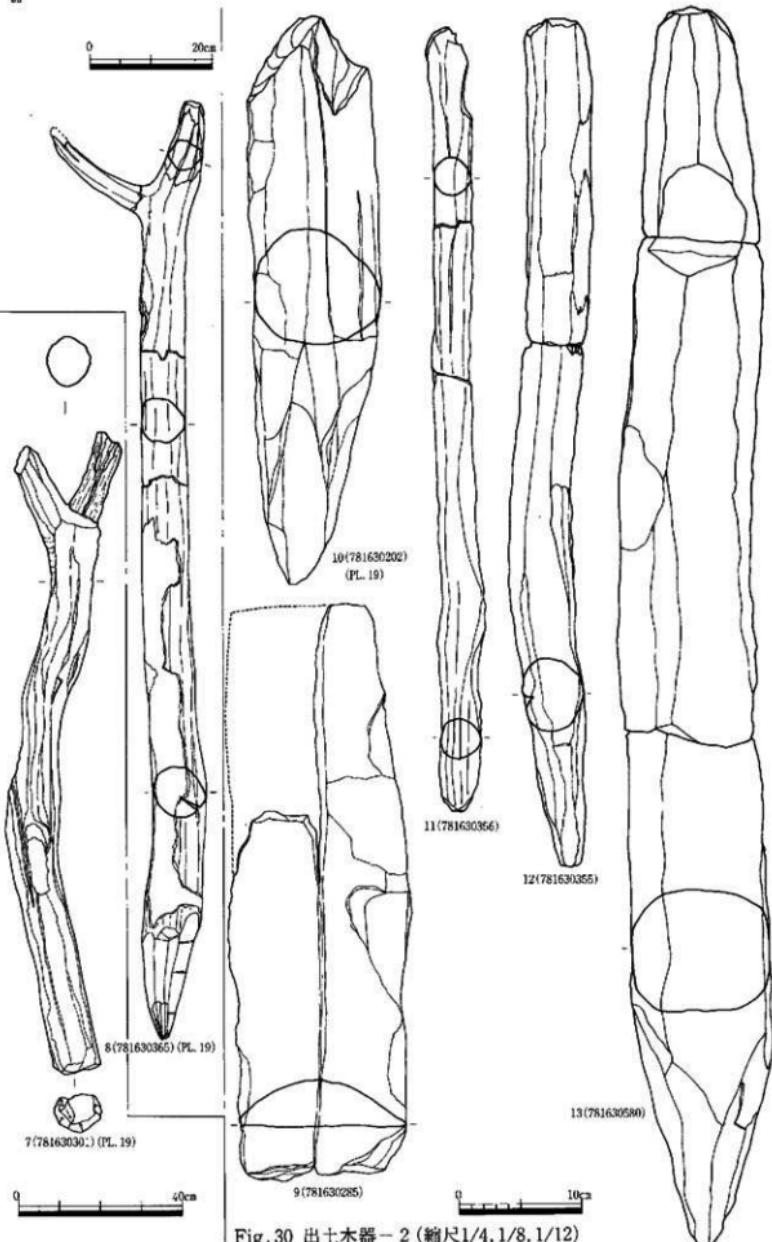


Fig. 30 出土木器 - 2 (縮尺1/4, 1/8, 1/12)

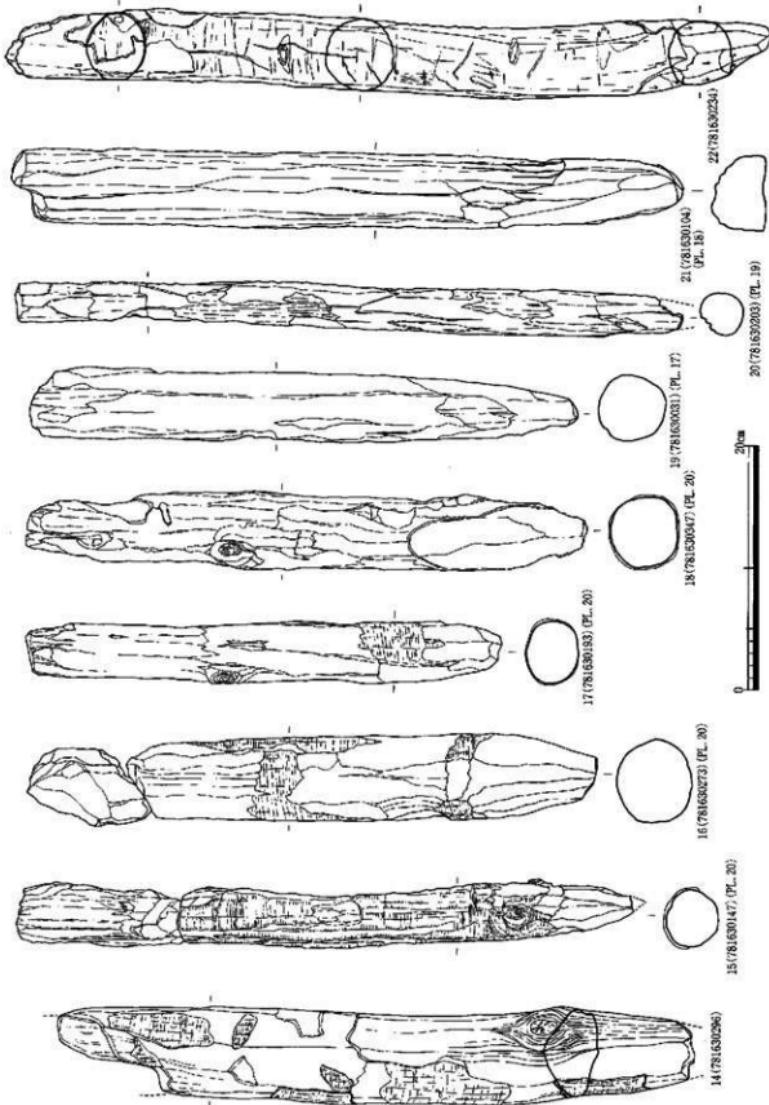


Fig. 31 出土木器-3 (縮尺1/4)

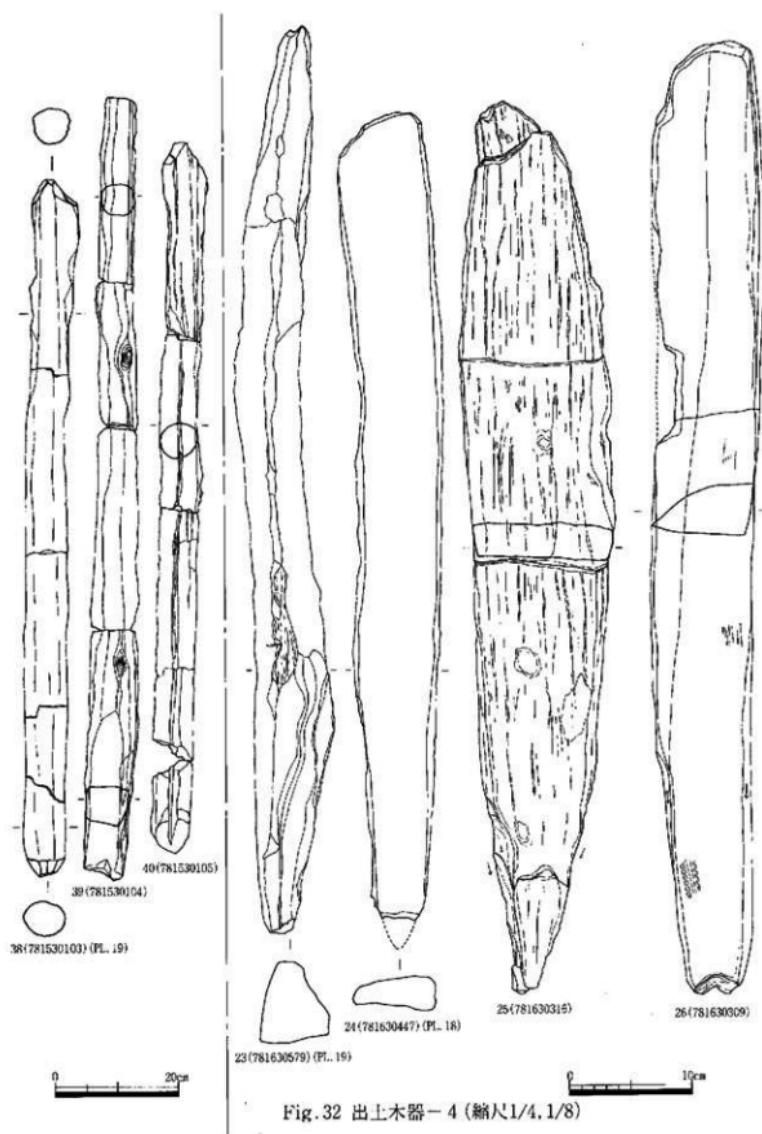


Fig. 32 出土木器 - 4 (縮尺1/4, 1/8)

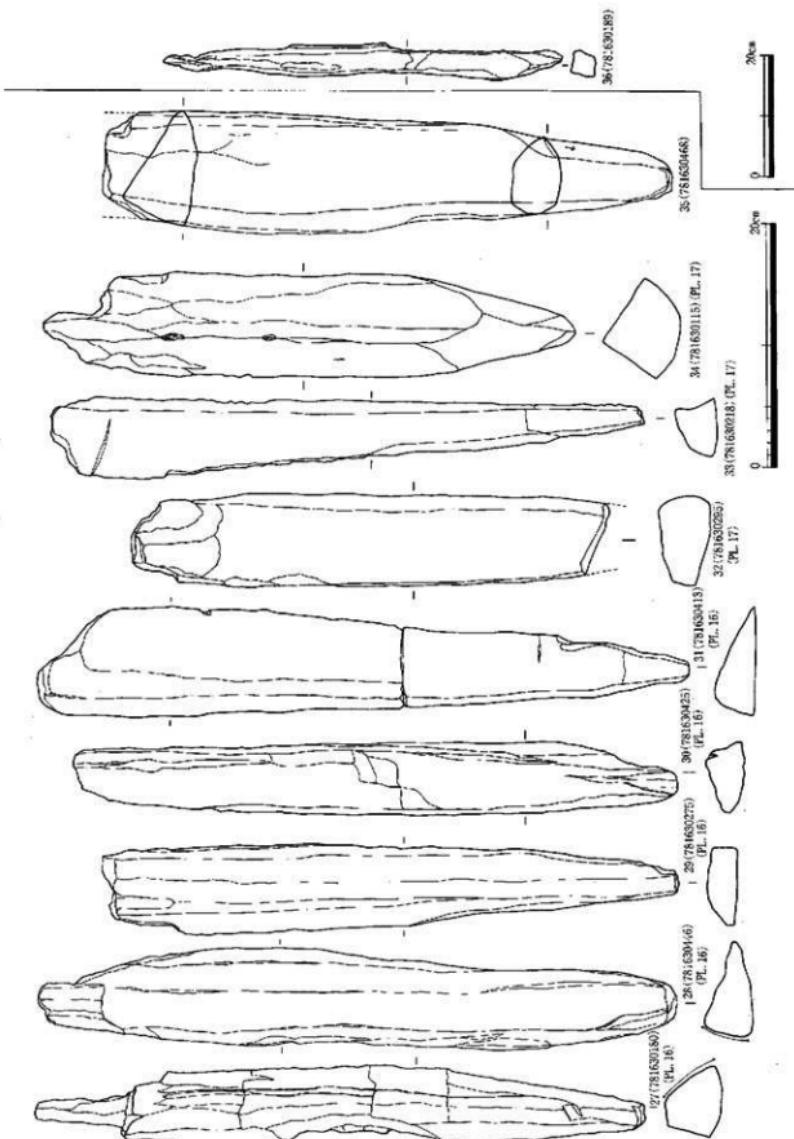


Fig. 33 出土木器 - 5 (縮尺1/4, 1/8)

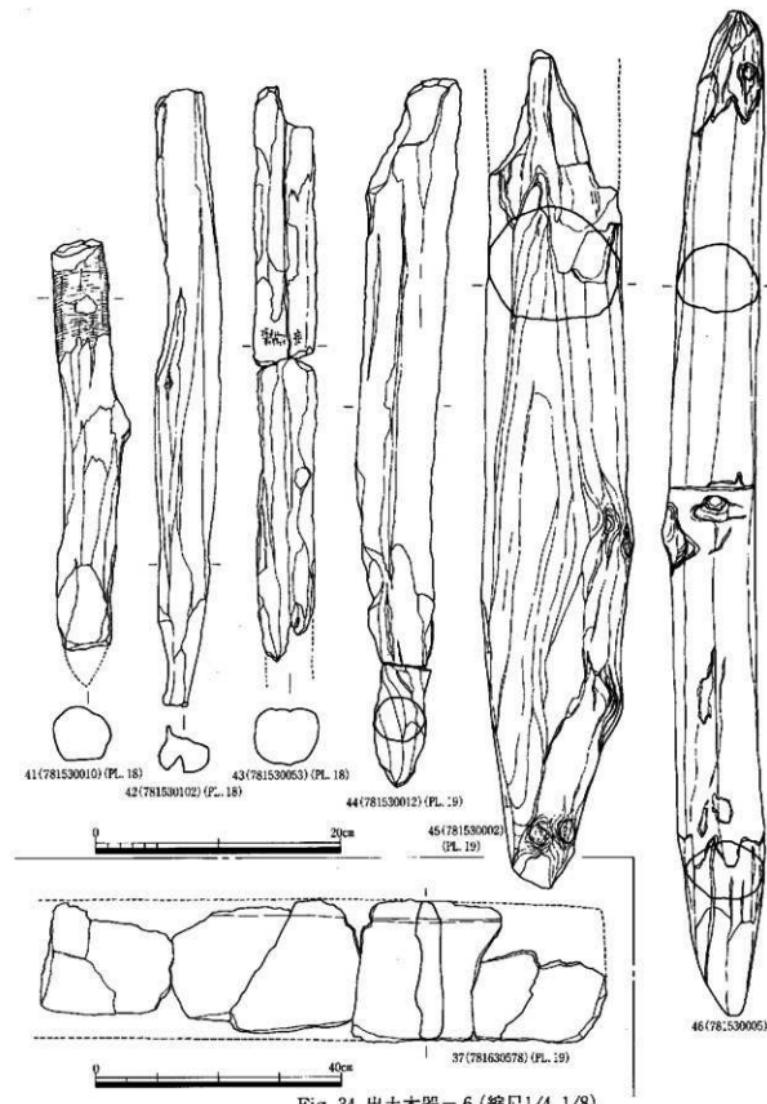


Fig. 34 出土木器 - 6 (縮尺1/4, 1/8)

43も上下端を欠損するもので焼けた痕跡がある。44は上端部が欠損する丸木枕である。45は径が11.4cmの丸太材で、先端部は周辺からの削りにより先端を尖らせ他の周辺部も面取りされている。46は上下端を尖らせた丸木材である。全長82cm、7cmの径で周辺部を僅かに面取りしている。

### 第15次調査出土の木製品 (Fig. 29~34 PL. 16~20 Tab. 4~9)

第15次調査地点出土の木製品は、Tab 4~9で示した様に577点の杭・横木を取り上げたが、この他流木等がある。全体で800点程出土した。この内、丸杭は316点で全体の約55%を占める。これに対して矢板は、260点で全体の45%を占める。これは第14次調査の比率と多少異なり、丸杭の率が高い。

#### 建築材 (Fig. 30~34 PL. 19)

建築材としては5点図示した。7は先端部が二股となる形状で、下端部が平坦に切り取られている。全長160cmで径が12cmである。柱材としては低い感じもあるが、端部を平坦とするところから、直置きの柱材とも考えられる。二股部までの長さは140cmである。8も二股の建築材である。全長154.8cm、径が9cmで股木部分まで140cmある。この長さは7と同じ長さである。この8は下端部が尖っており、20cmの部分からきれいに面取りされ、樹皮が残っている。先端部もきれいに面取りされている。この2点は、四箇周辺遺跡(6)の中で報告(Fig. 29~35, 31~55)したものであるが、出土地点の違いで再度、今回の第15次調査地点の出土品として登録しなおした。11は先端部の一部に抉りを入れるもので、四箇周辺遺跡第5次調査から出土している形状とよく似ている。組み合わせ柱材として使用されたものであろう。現在長64cm、径3cmを測る。

9~37は割板材である。9は全長48cm、幅14.8cm、厚さ4.0cmを測り、片面が丸みを有することから丸木の縁辺部である。この材を復元すると径が16cmあり、丸木の四分割されたものと考えられる。37は全長92.4cm、幅22.6cm、厚さ4.6cmの板材である。板材としては、四箇周辺遺跡第1次調査の建築材と類似する。両端に切削面があることから長さは完形である。表・裏面の仕上げ加工は施されず、厚さが一定しない。これは四箇周辺遺跡の報告書の中で、九州大学工学部の山本輝雄・佐藤浩(佐藤氏は故人)の両氏が報告されている材と同じ形態を持つ(Fig. 103 PL. 47)。

#### 丸木材 (Fig. 29~31 PL. 19~20)

丸木材(直径5cm以下のものを丸木材、5cm以上のものを丸太材として一応の目安として取り扱っている)は立杭の中で約71%を占めるが、その代表的な4本を図示した。3は端部が鋭利ではなく、丸みを持って仕上げられている。先端部は欠損するが、現在長66cmを測る。15~17は樹皮が残り一部焼けている。現在長51cm、径4.8cmを測る。20も一部樹皮が残る。末端部が欠損しているが、先端部は切削面が残る。現在長54.2cm、3.5cmの径を持つ。

#### 丸太材 (Fig. 29~32 PL. 17~20)

丸太材は立杭の29%であるが、他の遺構より数多く使用されているため15点を図示した。その内、径が10cmを超える6~10・11は、第7~9列目に打ち込まれ、流れの激しい1列目には数本しか現存しなかつた。これらの中、完形品である材が数本みられる。4~6・12・13・23である。1は上端部が欠損するが、下端部を丸く仕上げる。現在長56.6cm、6.2cmの径を持つ。2は下端部を欠損する径7cmの杭である。4は全長78cm、6.6cmの径を持つ完形品の立杭である。下端部は、全周からの削りで尖らせている。5は全長75cm、径が8cmで、下端部の削りは22cmと長い。上端部は、周辺部からの削り痕が認められる。6は全長73.2cm、径10cmの立杭で、やや斜めに曲がる杭である。10は径が10.3cmで、削りが17cmの部分から行われている。上端部は欠損している。現在長46.2cmを測る。12は完形品で69cm、径5.2cmである。周辺部を面取りしている。13は径が11cm、全長100.6cmの完形品で、周辺部を面取りしている。14は樹皮を

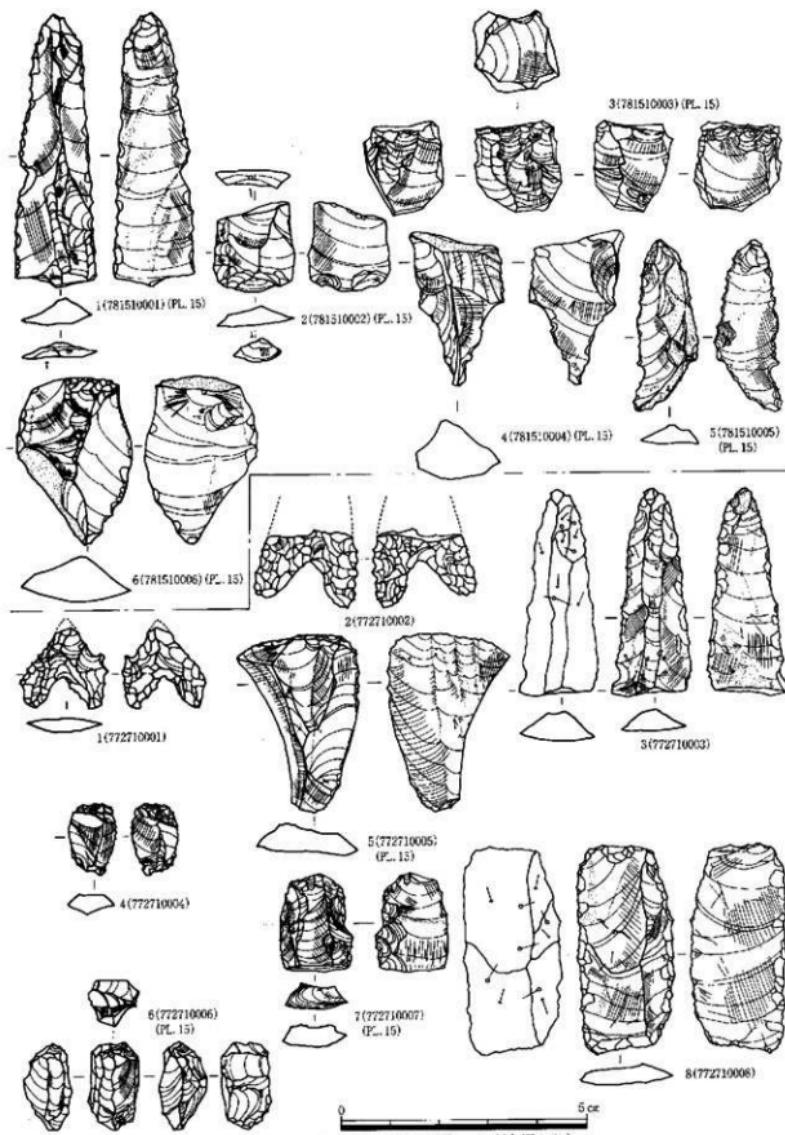


Fig. 35 出土石器 - 1 (縮尺1/1)

持ち径が7.4cm、現在長52cmである。16も14と同様に樹皮付きの杭で、下端部は潰れている。22も同様に樹皮を持ち、下端部が丸く仕上げられている。19・21は樹皮ではなく下端部が潰れている。

21は下端部を丸く仕上げ、上端部は欠損している。23は完形品で、全長73.8cmである。上下端とも尖る形態を持つ。一部に樹皮があり、径6.8cmで面取りを施している。

#### 矢板材 (Fig. 32・33 PL. 16・18)

矢板は立杭の内260点出土し、矢板と杭との比率は45%と55%である。この内12点を図示した。図示した内で矢板には、素材の周辺部を残すものと、板材（周辺部を面取りしている材）を使用するものがある。板材を使用するものは、24・25・29・35の4点で、削材で周辺部を残すものは、26・28・30～34の7点である。

24は現在長66cm、上下端を尖らせ矢板にしたものである。面取りは行われていない。25は完形品で全長73cm、上下端を尖らせる。下端の削りは、16cm上から行われている。板材の表面は、丁寧に仕上げられていることから転用して矢板としている。35は断面三角形を呈し、全面的に面取りを行っている。

割材を利用したものとして7点を図示した。26は全長78cmで、断面三角形を呈する。下端部の削りは、下から30cmの所から行われている。27は全面的に面取りしているが、割材部分は加工していない。28は完形品で全長52.2cmを測り、16分割された材である。30・31も完形品である。この2点も16分割した材で、34は4分割されたものを使用している。

#### 木器 (Fig. 31・33 PL. 18・20)

木器は杵の半削・三叉鋤・砧・樅状木製品等が出土したが、保管状態が悪く残念ながら乾燥してしまった。20は布巻具と考えられるものであるが、実測図では表現出来ていない。上端部下8cm下に抉入部があり、第17次調査出土と同形態を持つ。36は三叉鋤の刃部で、杭に転用したものである。

## 2. 石 器 (Fig. 35～37 PL. 14・15)

### 第11次調査地点出土の石器 (Fig. 35～37 PL. 14・15)

1・2は黒耀石製石鎌である。1は先端部が欠損し、有肩部に尖りを持つ抉入石鎌である。小型に属し側面からの押圧剥離によって仕上げている。2は脚部のみであるが大型に属し、抉入部が大きい。3は縦長剥片の両刃部に加工を加えたもので、先端部・末端部に不純物がある腰岳産の黒耀石である。剥離方向は、上からの一方向である。4は透明度の高い黒耀石の楔形石器である。上端部に打撃痕が数多く認められる。下端部にも剥離痕が認められることから楔形石器とした。5は使用痕のある黒耀石の剥片である。打撃方向は3方向を持ち、両側刃の銳利な部分に刃こぼれが観察される。6は小原の石核もしくは楔形石器である。7は分厚い縦長剥片の末端を取り除いた切断剥片である。8は縦長剥片を素材とした搔器である。1～8は包含層上である。

9・10はサムカイト製の削器である。9は横長剥片の下端・左右側刃に刃部を形成している。10は縦長剥片の下端部の銳利な部分を使用している。11は頁岩製の石剣である。先端部は欠損しているが、基部の部分は研磨され、中子に当たる部分を研ぎだしによって抉入部を創り出している。刃部は両面から研ぎだしによって柳葉形を呈する。現在長7cm、幅3.4cm、厚さ0.5cmである。12は柱状片刃石斧で、これも頁岩製である。刃部と側面は研磨されているが、他は研磨途中である。全長10cm、幅2.9cm、厚さ2.0cmの小型石斧である。13から15は右包丁である。13は三角形の形状を呈する凝灰岩製の石包丁である。中心部の左右に穿孔し、その方向は左からが主である。中心部より左側刃部が短く肩に段を有する。14は輝緑凝灰岩（立岩産石包丁の素材となる石材）で、横長の石包丁である。中央部に二つの穿孔を有し、穿孔は左側刃（裏面）からが主体である。現在長8.2cmであるが、復元すると約14cmとなる。幅

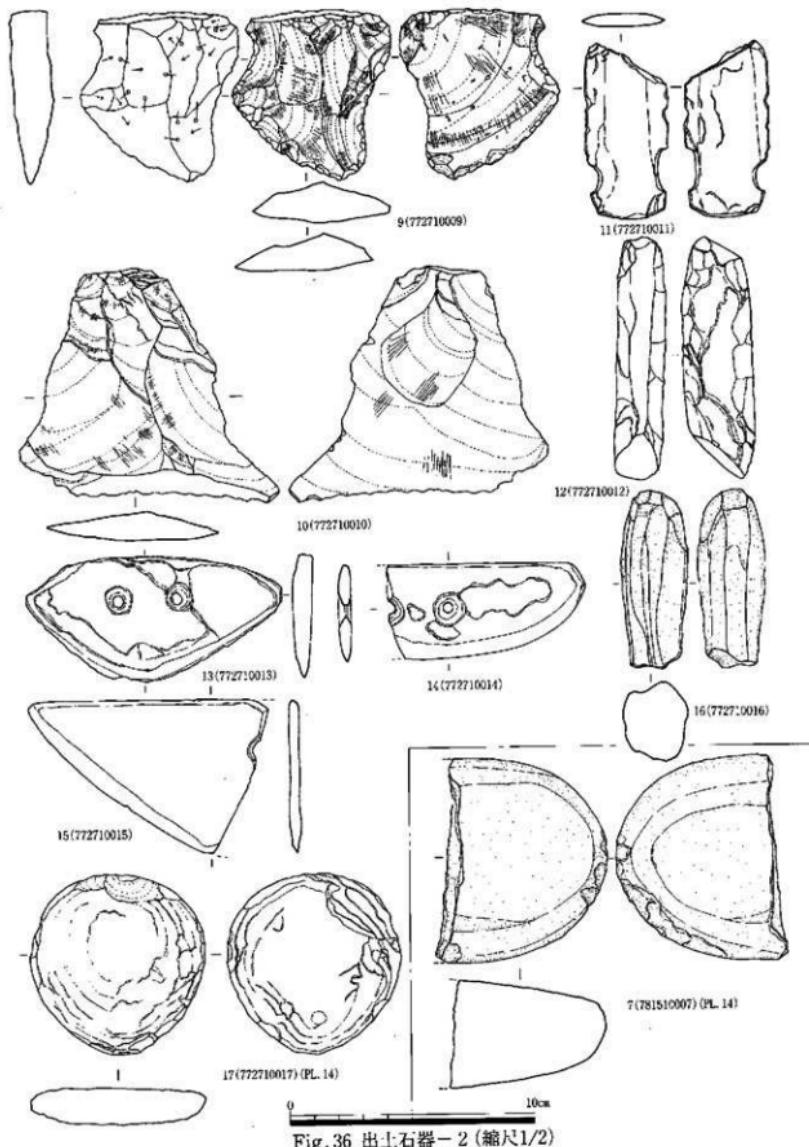


Fig. 36 出土石器-2 (縮尺1/2)

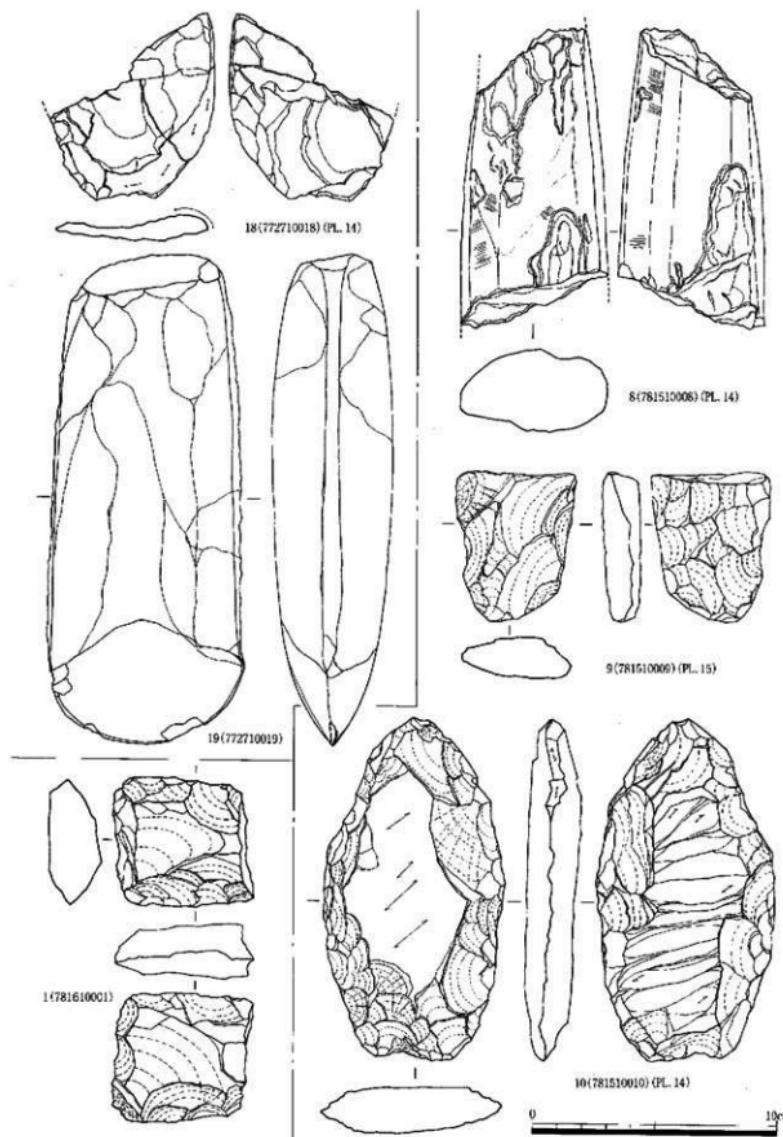


Fig. 37 出土石器-3 (縮尺1/2)

3.9cm、厚さ0.5cmである。15は大型の三角形石包丁で、石材は凝灰岩を素材としている。右側刃を欠損するが、現在の大きさからも大型であることが判る。刃部は下端部で、研磨は右が長く左が鋭い。穿孔は1つしか現存しないが1穴の可能性も考えられる。現在長9.8cm、幅6.4cm、厚さ0.5cmである。16は安山岩製のたたき石である。先端部に打烈痕、周辺部には研磨が認められる。17は花崗岩製の磨石である。18は安山岩製の局部磨製石斧である。3片に剥離されていた。これは縄文時代後期～晩期にかけて見られるもので、弥生時代には出土しない。下層の縄文時代後期の遺物であろう。19は玄武岩製の大型蛤刃石斧である。全面に研磨を施している。全長20cm、幅7.6cm、厚さ5cmである。

#### 第14次調査地点出土の石器 (Fig. 35～37 PL. 14・15)

##### 黒耀石製石器 (Fig. 35-1～6 PL. 15)

1は縦長剥片の末端部を切断し、両側刃に使用痕のある継長剥片で刀器と称せられるものである。全長11.4cm、幅3.4cm、厚さ1.0cm。剥離方向は、上下二方向で構成されている。黒耀石製の剥離技術が非常に高度であることを示している。しかしながら、石核の出土数は極めて希で四箇遺跡・四箇周辺遺跡での出土は無い。四箇遺跡より北に約1km離れた所に田村遺跡群がある(田村遺跡群II・III福岡市教育委員会刊福岡市埋蔵文化財調査報告書第89・104集)。この遺跡に縄文時代後期末から晩期初頭の遣跡が認められる。この構造内から佐賀県伊万里市鈴桶出土の石核に類似するものが、出土している。1に上げた剥片はこれらの石核から剥取された感が強く、残存する石核では、これらの剥片を剥取することは不可能である。この問題はまとめの章で触ることにする。2は上下とも切断されたサイド・ブレイド的要素を持つ剥片である。上下端に剥離が認められる黒耀石切断剥片で、全長3.5cm、幅3.4cm、厚さ0.7cmである。3は黒耀石製の石核である。打面は横からの打撃によって得られた平坦打面で、この打面から4面方向へ打ち下ろし剥片を剥取している。打撃方向は上からの一方向だけで、他からの剥離は認められない。全長3.7cm、幅3.4cm、厚さ3cm。4は側面に自然面を有する剥片である。端部の状況からドリルとも考えたが、断面が三角形であること、摩滅痕が残っていないことから剥片としておく。5は表面に自然面を有する縦長剥片の周辺部を使用した搔器である。ほぼ全面に使用時の刃こぼれが認められる。剥片の剥取方法は、打面が小さく残る縱剥ぎの技術を有しており、表面も上からの剥離が認められる。6は横幅のある縦長剥片で、右側辺部に細かなリタッチが認められることから搔器としておく。剥片剥取技法は、自然面の打面を大きく残し、方向も3方向からの剥取が認められる。

##### 黒耀石以外の石材を素材とした石器 (Fig. 36-37 PL. 14・15)

7は硬質砂石製の磨石である。半割しているが全面が研磨されており、端部の一部に打烈痕が認められる。8は蛇紋岩製の磨製石斧で、縄文時代に多く見られる石材である。上下端は破損しているが全面研磨されており、破壊時に大きく剥離したものと思われる。現在長12cm、幅6cm、厚さ4.3cm。9は安山岩製打製石斧片である。半割されているため完成度は定かではないが、下端部の観察から全く使用されていないことが判明している。製作時に破損したものと思われる。現在長6cm、幅5cm、厚さ1.6cm。10は凝灰岩製の局部磨製石斧である。周辺部に細かな剥離を加えているが、石の性質上剥がれる面が板状となる。中央部の平坦面から研磨を施している。

#### 第15次調査地点出土の石器 (Fig. 37)

第15次調査からは石斧片1点が出土した。安山岩製の打製石斧片で半割している。未製品で製作途中で放棄したものであろう。全長5.5cm、幅5.3cm、厚さ2cm。

## 第五章 まとめ

四箇遺跡・四箇周辺遺跡等で調査した面積は、22,608m<sup>2</sup>、試掘調査対象面積を含めると36,902m<sup>2</sup>である。調査した期間は、昭和49（1974）年から昭和57年で9年間を費やした。年間2,512m<sup>2</sup>を調査したことになる。

四箇遺跡の調査は、福岡市で始めて低湿地の遺跡を調査した記念すべき遺跡である。多量の木製品が出土し、今まで考えつかなかった条件下でも遺構が残り驚きの連続であったことを覚えている。今回で四箇周辺遺跡の報告を終えるに当たって、それぞれの報告書で問題提起してきたことを整理し、検討すると四箇遺跡・四箇周辺遺跡の問題点は、下記の5点に集約できる。

1. 四箇周辺における微高地のあり方について
1. 縄文時代前期・後期における立地と遺構について
1. 弥生時代における立地と遺構について
1. 古墳時代における立地と遺構について
1. 縄文時代後期の石器について

問題点に入る前に四箇周辺遺跡とその周辺遺跡について記載する。

四箇遺跡は、縄文時代から弥生時代にかけて第一微高地上に住居跡・溝・墓地等が遺存し、凹地には弥生時代から古墳時代の水路・水田遺構がある。四箇周辺遺跡でも、同様な遺構が遺存すると考えられるが、未調査の為その実体は定かではない。しかしながら第三微高地において四箇東遺跡・第20次調査で明かとなったように、縄文時代後期後半の三万田式土器を作り遺構が検出され、四箇遺跡出土の西平式土器との関連から非常に興味深いものとなった。一方、四箇遺跡の東側300mに四箇遺跡群第22-25次調査地点がある。検出された遺構は、縄文時代中期の上坑3基と、弥生時代前期の溝状遺構（木器の中に漆塗り腕輪出土）4条、古墳時代の溝、平安時代・室町時代の溝を検出している。遺構をのせる土層は、暗灰黄褐色シルト層及び灰黄褐色粘質土層であり、四箇遺跡の弥生時代遺構をのせる土層と変化はない。ただ標高的には、四箇遺跡が20m前後に対しても22-23mを測り、比高差が2-3mある。

北側には田村遺跡群がある。田村遺跡も遺構をのせる上層は灰黄褐色シルト層であり、この遺跡群からは縄文時代前期・中期・晩期の土器群が出土しており、特に前期・中期の土器群は、瀬戸内系土器の系統を引く遺物である。また弥生時代にもこの地を利用した痕跡が残っており、中期の凸形住居跡・溝状遺構等が検出されている。この他、条里制の里界溝や掘立柱建物等が確認され、奈良時代～平安時代にかけて大集落であったことが窺える。

四箇東遺跡・第20次調査地点から東に約250mの所で、入部地区圃場整備事業に伴う第1次調査（重留遺跡1次調査）が行われた。縄文時代晩期の貯蔵穴・竪穴住居跡・溝などが検出された。住居跡は3mの円形住居跡で、中央に深鉢を使用した炉を作り出している。四箇東遺跡・第20次調査地点および四箇遺跡と同様に集落が狭い範囲であったことが窺える。この調査は、四箇周辺の縄文時代後期から晩期にかけての生活遺構を考える上で、非常に重要である。

四箇東遺跡・第20次調査地点から南に約500mの所に四箇船石遺跡群がある。この遺跡群は、古くから支石墓として知られている。調査は部分的にしか行われていないが、入部地区圃場整備事業で確認された遺構は、弥生時代中期の住居跡・溝等である。

四箇遺跡群の南西側には、四箇八郎丸遺跡群がある。本調査の為その内容は不明である。

以上のように周辺遺跡でも、四箇遺跡群と同様の様相を示しており、立地条件もほぼ同様であること

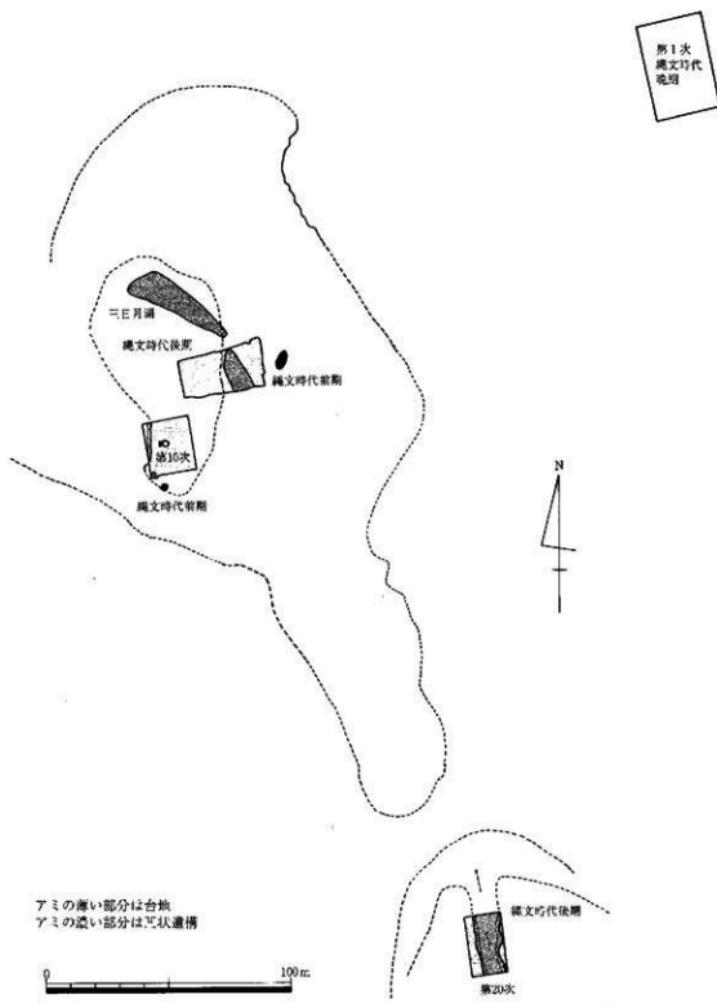


Fig. 38 四箇周辺遺跡の縄文時代造構配置図(縮尺1/2,000)

が判明した。特に縄文時代後期における遺構が次第に明かとなっている。

### 1. 四箇周辺における微高地のあり方について

四箇遺跡・四箇周辺遺跡の調査で、微高地状に台地が続いていることが判明したのは、四箇周辺遺跡第5次調査で弥生時代の杭列遺構を調査した段階であった。杭列遺構を調査していく間に幾つもの凹凸が見られ、台地とは異なる状況が観察できた。また、四箇遺跡C地点（第6次調査）の段階でも同様の凹凸が見られたが、水の流れが南側からであるにも関わらずC地点南側は台地状に高く、これがどこで切れるかが不明のままであった。1977年度調査の第8次調査で、第5次調査地点から四箇遺跡C地点に続く水路が検出され、微高地がここで終了することが確認された。しかしながら、その後の調査でこの水路は、人工的に造られたことが判明した。第3微高地の発見は、1975年・76年度調査の四箇東遺跡1・2次調査である。第1次調査は、微高地上にのる遺構が確認されたが、第2次調査では段落ちしていることが判明した。この後、試掘調査や第14・15次調査等で微高地が切れ、その部分に水路が検出された。第二微高地上に残る遺構は確認できていないが、第三微高地には、縄文時代後期の遺構が確認されている。このようにして、第一～三微高地の確認をしてきたが、それは微高地西側を通る水路部分の発見が発端である。これに比べ東側では、杭列等を検出する事が出来なかった。しかしながら、四箇遺跡E地点（第3次調査）では、弥生時代中期の水田遺構を検出していることから、水の流れからしても第二微高地東側に水路及び水田遺構がある可能性が高く、試掘調査で確認出来なかっただけかもしれない。

第一微高地には、縄文時代前期包含層、後期の集落跡、弥生時代前期末から中期にかけての集落・墓地、また古墳時代の溝・墓地が検出されている。第二微高地には現在住居が建ち並んでいることから、調査は困難であるが、微高地上の試掘の結果（K-11e, K-11d地点）では、耕作土下すぐに上部礫層が検出されているところから、かなりの削平を受けているものと思われる。第三微高地では、四箇東遺跡第1・2次調査、第20次調査により縄文時代後期の遺構が検出されている。微高地の裾部に沿って水路が数多く検出され、それに伴い水田遺構や堰状遺構等の確認がなされ、微高地の区割りが確定できた。

### 1. 縄文時代前期・後期における立地と遺構について

縄文時代前期の包含層検出は、偶然の出来事であった。四箇遺跡の試掘調査によって掘り上げられた土の中に、蛇紋岩製の磨製石斧を発見した。その段階では、流れ込みか縄文後期の石斧であるとの認識しかなかった。四箇遺跡B地点（第4次調査）を開始した段階で、微高地が段落ちする部分に青灰色シルト層が確認された。この層の中に曾畠式土器片が数点出土したため、調査を行った結果、縄文時代前期包含層であることが判明した。ただ遺物を包含する青灰色シルト層は、全面には無く、部分的に残るため遺跡の広がりは確定出来ない。つまり青灰色シルト層は、基盤層である下層礫層の上に堆積し、礫層の凹凸部分の凹地に堆積したと考えられる。これは、第18次調査地点でも同じ事が言える。しかしながら四箇遺跡B地点と第18次調査地点の出土遺物は、多少異なりを示す。第18次調査が轟式土器を主体とするのに対して、第4次調査地点では曾畠式土器が主体を占める。第18次調査では遺構も検出されている。不整形堅穴とPitで、不整形堅穴には炭化物が多量に出土し、包含層中には、轟B式土器を始めとして曾畠式土器、石皿・磨石・磨製石斧が出土している。

# 1. 弥生時代における立地と遺構について

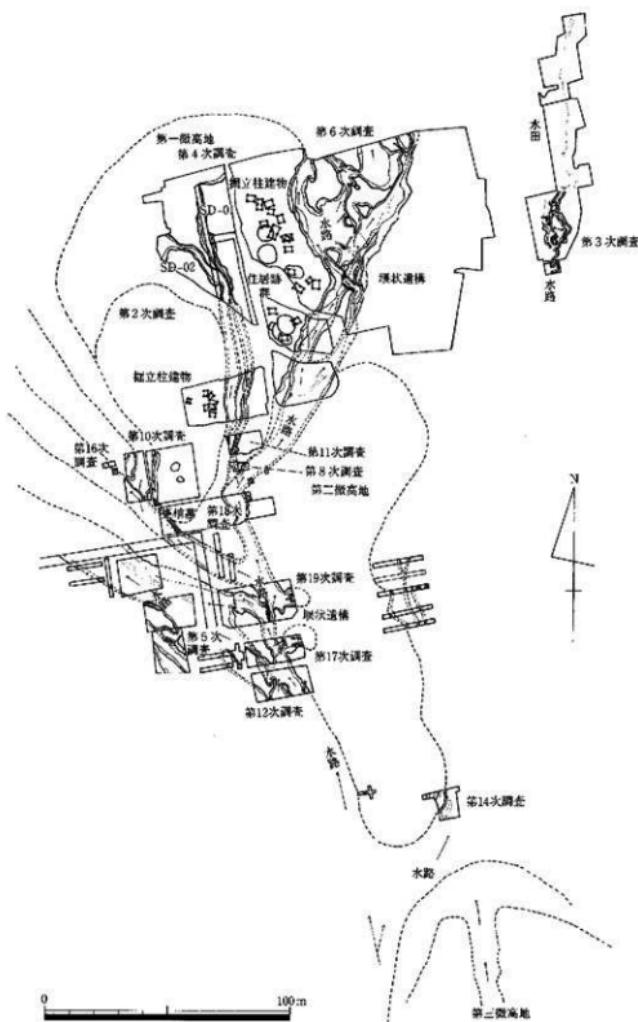


Fig. 39 四箇周辺遺跡の弥生時代遺構配置図(縮尺1/2,000)

### 縄文時代後期

縄文時代後期の微高地はFig. 38に図示した様に、第一微高地と第二微高地がつながっていた可能性が高く、一連の台地として考えられる。第三微高地は縄文時代後期の段階で、遺構が広がっていることから、微高地としては2つと考えられる。この間は、凹地（流路）として存在していたと思われる。第一微高地と第二微高地は、弥生時代前期の段階で人工的に掘削されたもので、幅7mである。これに対して、第二と第三微高地の幅は35mと広く、自然の流路として存在していたものと考えられる。

検出された遺構を見ると住居跡・凹地状遺構・埋甕・土坑・三日月湖である。住居跡は著しく削平を受けており、遺物の出土状態から数軒建っていたものと考えられる。凹地状遺構には、完形土器が押し潰された状態で數十個検出されたり、石皿・剥片石器・獸骨等が出土した。この凹地状遺構の西側には、柱穴が多数検出されると共に埋甕1基がある。この凹地から20m南西側には、住居跡・土坑を検出した第10次調査地点がある。第一微高地の集落としては、A地点三日月湖周辺から第10次調査地点までの範囲、約500m<sup>2</sup>に集落が営まれたと推定出来る。

また三日月湖から出土した種子は、非常に重要な手がかりを残してくれた。三日月湖の特殊泥炭層中からは、縄文時代後期西平式土器と共に栽培植物・人里植物が出土した。特に生食したと見られるものにセンナリビヨウタン・アズキ・オオムギ・ヒエ等がある。種子分析・種類同定をお願いした笠原安夫先生は、上記の種子等から「食利用として僅かながら縄文時代後期に、それらの栽培があったのではないか」と推定された。

一方、第三微高地の出土遺物は、第一微高地の集落より僅かに遅れるが、ここにも集落が営まれた痕跡がある。四箇東遺跡第1次調査と第20次調査で、検出された凹地状遺構に多量の土器・石器・土製品・獸骨等が出土した。これは、第一微高地A地点の凹地状遺構及び三日月湖から出土した遺物と非常によく似ている。遺構はこの他柱穴だけであるが、東側には、集落が営まれていたと推定できる。

### 1. 弥生時代における立地と遺構について (Fig. 39)

弥生時代前期～中期における四箇遺跡群の生活環境は、微高地に集落（住居跡・墓地・溝）を形成し、湿地帯（凹地）には、水田耕作を行なっていたと考察できる。特に水田耕作のために、第一微高地の一番狭い部分を掘削し、第一・二微高地とを幅7mで切断して水を北東側に引き入れ、これによって水田耕作面積が、四箇遺跡C地点（第6次調査部分）まで広がったものと思われる。また、切断した溝から第一微高地にも二条の溝を掘削し、南から北に台地を横切り、溝の周辺部に住居跡・掘立柱建物を配置し、最も南に墓地（甕棺墓・土坑墓）を配置している。

第二微高地における弥生時代の遺構は、現在まで確認されていない。それは、第二微高地がかなりの削平を受けているからにはならないが、第三微高地でも同様と考えられる。

しかしながら、凹地は削平を受けておらず、水田遺構・壠状遺構・杭列等が検出されている。

弥生時代における水路は(Fig. 39)第三微高地西側で、南側からの流れが第二微高地の裾部を通りながら、第12次調査地点で2つに分岐する。1つは北に向かう第19次調査地点の石組壠状遺構で、さらに北に向かう水路と西に向かう水路の2つに分岐する。北に向かう水路は、第一・二微高地とを幅7mで切断した水路へと流れ、ここで、壠状遺構により第一微高地の2条の溝に水を流す。また、切断した微高地を横切り四箇遺跡B・C地点（第3・6次調査）へと流れ、微高地東側を通り北へと続く。

一方、第19次調査地点で西に方向を変えた水路は、第12次調査で西に方向を変えた水路と合流し、第5次調査の水路に流れ込む。これも第一微高地南西側裾部を巡り北西側に向かう。ただ第10・16・18次調査で、弥生時代中期の溝が検出されていることから、西側に流れる大きな水路に壠状遺構を作り、水を引

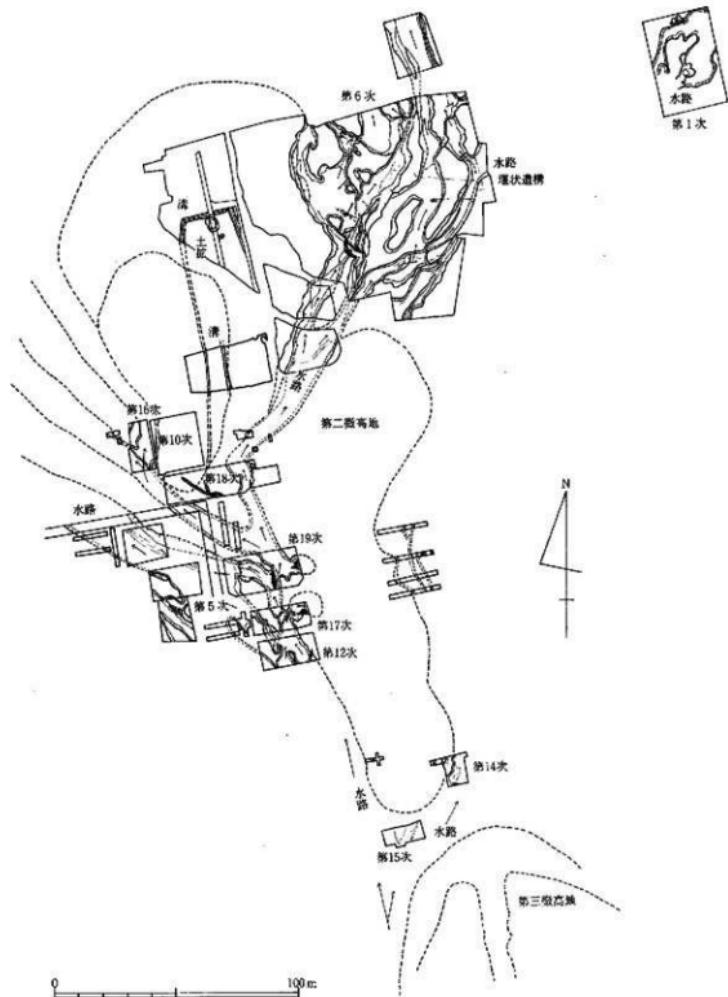


Fig. 40 四箇周辺遺跡の古墳時代造構配置図(縮尺1/2,000)

き入れたものと考えられる。この溝も北に向かって流れている。

東側には、凹面遺跡E地点の水田遺構がある。この水路を遡ると、第三微高地西側の第15次調査地点・第14次調査地点の杭列遺構からの流れと考えられる。第二微高地の東側裾部を通り、四箇遺跡E地点の水田遺構に流れ込むものと考えられるが、調査を行っていないため定かでは無い。

### 1. 古墳時代における立地と遺構について (Fig.40)

古墳時代の遺構としては、第一微高地に溝状遺構・土坑墓・石棺墓がある程度で、住居跡・掘立柱建物の検出は無い。水田施設である水路・堰状遺構は、弥生時代のものを継続し、新たに四箇遺跡C地点東側に水路を設けている。

出土する遺物も殆ど無く、水路部分で占式土師器片が出土する程度で、須恵器の出土は、全く認められなかった。

#### 1. 繩文時代後期の石器について

繩文時代後期に黒曜石製の石器が多量に出土する。また、扁平打製石斧もこの時期から多量に出土していく。ここでは黒曜石製の石器について、特に、剥片剥取技法について触れてみたい。

四箇遺跡・四箇周辺遺跡を調査していく上で、繩文時代後期段階で多量の黒曜石製の石器が出土する。製品として使用されている剥片剥取の方法をみると、縦長剥片には、非常に長い上からの剥離と下からの剥離が認められる。この剥片剥取技法は、佐賀県伊万里市鈴桶遺跡から出土した石核と同じ技法で、鈴桶技法と称しているものである。

ところが、遺跡から出土する石核を見ると、この技法ではなく、打面を替えながら連続的に剥離する石核が出土し、この石核から剥離された剥片は横長の剥片で、打撃方向は、一定していない。

これに対して、鈴桶技法から剥離された剥片は、上下二方向からである。打面は平坦打面で、打撃痕を小さく残す。これを素材として、剥片鎌、刃器、つまみ型石器、サイド・ブレイド等を作り出している。この素材となった剥片自体、数多く出土しているにもかかわらず、石核自体は出土していない。福岡市において繩文時代後期から晩期にかけての遺跡は、数多く発見されているが、鈴桶型石核に類似した石核が出土した遺跡は、田村遺跡だけである。春日市柏田遺跡からも、同様な石核が出土しているが、それにしても、繩文時代後期の黒曜石製石器の数から考えて石核の数が少なすぎる。遺跡から出土する石核では、縦長剥片をとることが出来ないと同時に、剥離する技術が根本的に異なるものである。なぜ、鈴桶型石核が遺跡から出土しないのであろうか。

田村遺跡の報告書の中で、報告者は「剥片剥離技術からいくと、3点とも打面を上下両極に持ち、打面調整を行っており、また打面の一部を研磨する技術をもつていて。一中略一打面を上下両極に最も剥片剥離技法として、從来から鈴桶技法が知られるが、本遺跡出土の石核は剥片剥出工程及び打角が一定していないなど鈴桶技法とは少し異なっている」とし、類鈴桶型石核、剥片剥離技法は、類鈴桶型刃器技法として位置づけている。

横田義章氏は「西北九州における繩文時代の一剥片石器群」(九州歴史資料館研究論集2、1976)のなかで、鈴桶遺跡を一般的な生活遺構ではなく、製作場所として位置付けている。「一例として、周辺遺跡のうちには、多くの刃器を発見できても、それに見合う石核が発見されないものがいくつかある。」

この現象が四箇遺跡にも当てはまり、これらの剥片は四箇遺跡群では剥離されず、交易によってここに運び込まれた可能性が高い。

「まとめ」とはならなかったが、これらの問題は将来にわたって研究していく題材であり、別の機会に考察したいと考えている。

Tab. 3 第14次調査地点杭・木器出土一覧 - 1

調査番号 7815

No.	坑の分類	法 量(cm)				桟皮	備 考
		長さ	幅	厚さ	径		
1	B	37		3			加工 焼けたる
2	A	66			11		Fig. 34-45 PL. 9
3	B	60	5	2			焼ける
4	B	149	6	6			先端尖る
5	A	82			7		Fig. 34-46
6	A	57			4		
7	B	62	4	3			尖る
8	A	109			3		
9	B	30	11	3			
10	A	33			5 ○		Fig. 34-41 PL. 18
11	B	46	8	2			
12	A	59			4 ○		Fig. 34-44 PL. 19
13	B	6	4	2			先端のみ
14	B	36	8	2			
15	A	20			5		
16	B	33	5	2			
17	A	27			4		
18	A	13			2		
19	B	29	29	3			
20	A	11			3		
21	B	31	3	3			
22	B	14	5	5			
23	B	15	3	2			
24	A	20			5		
25	B	13	5	2			
26	A	24			4		
27	B	28	5	4			
28	B	6	2	1			
29	B	9	5	3			
30	B	28	11	2			
31	A	25			4		
32	B	9	2	4			
33	A	9			2		
34	B	24	7	6			
35	A	9	4	1			
36	A	26			3		
37	A	38			4		
38	A	37			2		
39	A	33			3		
40	A	12			5		
41	A	17			3		
42	A	30			3		
43	A	45			2		
44	A	70			9		
45	B	38	7	5			
46	B	66	6	5			
47	B	35	6	4			
48	A	58			5		
49	B	8	5	1			
50	B	11	3	3			
51	A	39			6		
52	B	28	3	4			
53	A	48			5 ○		Fig. 34-43 PL. 18
54	B	16			3		
55	B	31			8		
56	B	30			3		
57	B	33			4		
58	A	13					3
59	A	9					3
60	A	33					3
61	B	24			2		
62	B	13			3		
63	A	22					4
64	A	10					5
65	A	46					6
66	A	26					4
67	A	19					3
68	A	35					3
69	A	30					3
70	A	33					3
71	B	19			2		
72	B	18			3		
73	B	11			2		
74	B	14			2		
75	A	12					2
76	B	3			1		
77	A	15					3
78	A	14					2
79	A	14					5
80	B	13			4		
81	A	11					2
82	B	26			4		
83	A	28					4
84	A	3					8
85	B	24			3		
86	B	14			2		
87	A	22					3
88	B	15			2		
89	B	54			4		
90	B	29			4		
91	A	30					5
92	B	23			2		
93	B	21			3		
94	B	35			4		
95	B	16			4		
96	B	24			3		
97	A	17					4
98	A	10					2
99	A	12					2
100	B	25			5		
101	B	17			2		
102	C	51			4		Fig. 34-42 PL. 18
103	A	60					Fig. 34-43 PL. 19
104	B	126			8		Fig. 32-39
105	A	118					Fig. 32-40

Aは杭(丸木・丸太杭を表す) B矢板 C横木・木器・直木 垂小数点以下は切上げている

調査番号 7816

Tab. 4 第15次調査地点杭・木器出土一覧-1

No.	枝の分類	法 墓(cm)				樹皮	備 考
		長さ	幅	高さ	径		
1	A	21			5		
2	A	13			4		
3	B	37	3	2		PL.18	
4	A	14			3		
5	A	11			3		
6	B	35	5	3			
7	B	35	5	2			
8	B	17	2	1			
9	A	15			2		
10	B	13	7	3			
11	B	29	2	3			
12	B	49	5	3			
13	A	7			2	先端のみ	
14	B	42	4	2			
15	B	52	6	5		PL.16	
16	B	7	6	2			
17	A	14			3		
18	A	17			3		
19	A	38			3		
20	A	12			2	先端のみ	
21	A	28			3		
22	B	3:	6	1			
23	A	18			3		
24	A	19			3		
25	A	15			4		
26	A	16			4		
27	A	32			5		
28	A	11			3		
29	A	16			4		
30	A	19			3	先端のみ	
31	A	45			6	Fig.3-19 PL.17	
32	A	33			3		
33	B	18	5	3		先端のみ	
34	B	13	2	3			
35	A	42			4		
36	B	48	9	7			
37	A	17			3	先端のみ	
38	A	21			6		
39	A	23			5		
40	A	8			4	先端のみ	
41	A	55			5		
42	A	41			7		
43	B	47	9	4			
44	A	18			5		
45	A	43			5		
46	A	68			4		
47	A	32			3		
48	A	31			4		
49	A	44			7		
50	B	52	7	3			

Aは杭(丸木・丸太杭を表す) B矢板 C横木・木器・流木 ※小数点以下は切上げている

調査番号 7816

Tab. 5 第15次調査地点枕・木器出土一覧-2

No.	枕の分類	法量(cm)				歯 皮	備 考
		長 さ	幅	厚さ	径		
101	A	21		4			
102	A	44		3			
103	A	57		6			
104	A	55		6		Fig. 31-21 PL. 18	
105	A	170		8			
106	A	40		6			
107	B	40	9	3			
108	A	47		4			
109	A	22		5			
110	A	19		4			
111	A	29		3			
112	A	30		4			
113	A	22		4			
114	A	17		3			
115	B	44	9	6		Fig. 33-34 PL. 17	
116	A	10		3		先端のみ	
117	A	33		7			
118	B	29	6	3			
119	A	19		5			
120	B	70	7	4		PL. 17	
121	A	38		5			
122	B	34	6	3			
123	A	36		6			
124	B	16	6	7			
125	A	22		3			
126	A	13		4			
127	A	34		3			
128	A	44		3			
129	A	25		6			
130	A	40		4			
131	A	48		4			
132	A	66		4		Fig. 29-3 PL. 20	
133	A	47		3			
134	A	57		7		Fig. 29-1 PL. 18	
135	A	42		5			
136	A	36		3			
137	A	55		6			
138	A	56		4			
139	B	43	5	3			
140	A	32		4			
141	A	55		7			
142	B	16	9	5			
143	B	36	9	2			
144	A	54		4			
145	B	51	6	5			
146	A	25		6			
147	A	51		5	○	Fig. 31-15 PL. 20	
148	A	53		5			
149	A	32		4			
150	A	27		3			

Aは枕(丸木・丸太枕を表す) B矢板 C檜木・木器・淀木 ※小数点以下は切上げている

No.	枕の分類	法量(cm)				歯 皮	備 考
		長 さ	幅	厚さ	径		
151	A	17				3	
152	A	10				4	
153	A	41				3	
154	B	50	8	2			
155	A	24				5	
156	A	38				6	
157	B	25	6	2			
158	A	27				4	
159	A	23				5	
160	A	43				5	
161	A	15				6	
162	A	37				4	
163	A	32				3	
164	B	59	7	5			
165	B	27	6	2			
166	A	48				5	
167	A	39				6	
168	A	16				4	
169	A	51				5	
170	A	24				4	
171	B	39	11	3			
172	B	35	6	3			
173	A	75				7	
174	A	42				7	
175	B	11	5	2			
176	A	31				4	
177	A	104				7	両端に加工有り
178	B	26	3	2			
179	B	41	3	3			
180	B	50	6	5			Fig. 33-32 PL. 16
181	A	42				5	
182	A	20				3	
183	A	22				3	
184	A	23				5	
185	B	16	3	2			
186	A	33				5	
187	A	28				4	
188	A	45				6	
189	C	66	4	4		三又	Fig. 33-36 PL. 19
190	A	39				4	
191	A	69				5	
192	B	20	7	3			
193	A	39				4	○ Fig. 31-17 PL. 20
194	B	29	4	2			
195	B	25	12	3			
196	A	65				4	
197	B	25	3	2			
198	B	33	6	2			PL. 18
199	B	27	4	3			
200	B	30	4	3			

調査番号 7816

Tab. 6 第15次調査地点杭・木器出土一覧-3

No.	杭の分類	法量(cm)				備考
		長さ	幅	厚さ	様	
201	B	32	4	3		
202	A	47		11		Fig. 30-10 PL. 19
203	C	55		4	○	Fig. 31-20 PL. 20
204	A	36		5		
205	A	43		5		
206	A	37		6		
207	R	24	7	3		
208	A	60		4		
209	B	23	4	3		
210	B	36	8	5		
211	B	35	6	6		
212	B	23	5	4		
213	B	67	8	4		
214	A	78		7		Fig. 29-4 PL. 19
215	B	67	5	3		
216	B	52	10	4		
217	A	18		3		
218	B	49	5	4		Fig. 33-33 PL. 17
219	B	28	3	3		
220	B	34	5	3		
221	A	60		6		
222	B	26	5	4		
223	B	14	4	2		
224	B	34	6	2		
225	B	18	9	2		
226	B	2	7	2		
227	B	30	7	2		
228	B	52	9	4		
229	A	33		4		
230	A	29		4		
231	A	41		6		
232	B	20	8	3		
233	A	47		5		
234	A	64		6	○	Fig. 31-22
235	B	65	9	3		
236	A	76		8		
237	A	75		8		Fig. 29-5
238	A	65		8		
239	A	141		6		
240	B	13	4	2		
241	A	64		5		
242	A	45		7		
243	A	14		4		
244	A	54		4		
245	B	7	6	2		
246	B	33	6	3		
247	B	33	11	5		
248	A	61		4		
249	A	48		7		Fig. 29-2 PL. 17
250	A	66		3		

No.	杭の分類	法量(cm)				備考
		長さ	幅	厚さ	様	
251	D	36	6	2		
252	B	95	6	6		
253	B	94	9	3		
254	B	85	8	7		
255	B	46	4	4		
256	B	67	9	5		
257	B	18	4	3		
258	B	36	12	4		
259	B	14	8	3		
260	B	32	6	4		
261	B	53	14	3		
262	A	62		5		
263	A	17		4		
264	A	16		5		
265	B	16	8	2		
266	B	7	3	2		
267	A	15		5		
268	A	33		7		
269	A	21		5		
270	B	40	5	3		
271	B	39	4	2		
272	B	32	7	3		
273	A	42		7	○	Fig. 31-16 PL. 20
274	A	39		5		
275	B	43	7	3		Fig. 33-29 PL. 16
276	A	49		8		
277	A	55		7		
278	B	18	5	3		
279	B	23	4	3		
280	A	15		3		
281	B	54	7	3		
282	A	32		8		
283	A	29		5		
284	A	66		5		
285	B	48	15	4		Fig. 30-9
286	B	65	8	6		
287	B	47	9	3		
288	B	19	5	3		
289	B	11	4	2		
290	B	50	11	6		
291	A	20		3		
292	B	50	14	3		
293	A	40		4		
294	A	69		5		
295	B	40	8	5		Fig. 33-32 PL. 17
296	A	52		8	○	Fig. 31-14
297	B	54	3	2		
298	B	57	6	2		
299	A	37		7		
300	A	75		9		

Aは杭(丸木・丸太板を表す) B矢板 C横木・木器・流木 帯小数点以下は切上げている

調査番号 7816

Tab. 7 第15次調査地点杭・木器出土一覧-4

No.	統の分類	法 直 (cm)				側度	備考
		長さ	幅	厚さ	径		
301	C	160		12			Fig. 30-7 PL. 19
302	A	57		7			
303	B	63	6	4			
304	A	71		6			
305	A	74		10			Fig. 29-6 PL. 19
306	A	45		4			
307	A	46		2			
308	B	33	12	3			
309	B	76	9	4			Fig. 32-26
310	B	44	7	2			
311	B	81	9	5			
312	A	87		10			
313	A	61		9			
314	A	45		4			
315	A	67		5			
316	B	73	12	3			Fig. 32-25
317	A	59		5			
318	B	30	5	2			
319	B	26	5	2			
320	B	38	6	2			
321	B	38	6	5			
322	A	17		9			PL. 20
323	A	45		4			
324	A	46		7			
325	A	66		4			
326	B	47	10	6			
327	B	26	13	3			
328	B	44	10	3			
329	B	42	13	2			
330	B	38	7	4			
331	B	30	9	3			
332	B	22	5	2			
333	A	30		4			
334	A	19		5			
335	A	28		7			
336	A	13		5			
337	A	79		9			
338	A	93		9			
339	A	53		9			
340	A	21		4			
341	A	13		3			
342	B	21	4	2			
343	A	28		11			
344	A	17		7			
345	A	21		4			
346	A	35		7			
347	A	46		6	○ Fig. 31-18 PL. 20		
348	A	9		3			
349	A	17		4			
350	B	51	13	3			

Aは杭 (丸木・丸太杭を表す) B矢板 C横木・木器・流木 \*小数点以下は切上げている

調査番号 7816

Tab. 8 第15次調査地点杭・木器出土一覧-5

No.	材の分類	法 並(cm)			樹皮	備考
		長さ	幅	厚さ		
401	A	129		7		
402	A	36		3		
403	B	42	8	4		
404	R	36	4	4		
405	A	22		5		
406	A	20		5		
407	A	31		5		
408	A	26		3		
409	A	24		5		
410	B	24	5	5		
411	A	25		4		
412	B	22	3	2		
413	B	54	9	4		Fig. 33-31 PL. 16
414	R	22	6	3		
415	A	61		9		
416	B	49	11	2		
417	B	50	9	4		
418	B	14	5	2		
419	B	13	4	2		
420	B	16	8	3		
421	A	28		5		
422	A	30		4		
423	B	37	7	3		
424	B	37	6	5		
425	B	50	6	3		Fig. 33-30 PL. 16
426	B	75	8	5		
427	A	145		15		
428	B	32	4	2		
429	B	29	5	4		
430	A	90		12		
431	A	23		7		
432	B	35	5	2		
433	B	23	4	2		
434	B	67	6	4		
435	B	54	9	6		
436	A	25		4		
437	B	23	4	2		
438	A	6		2		
439	B	48	6	5		
440	C	218	33	4		構造木製品
441	B	42	10	3		
442	B	40	7	3		
443	R	65	12	5		
444	A	68		4		
445	A	56		4		
446	B	53	8	4		Fig. 33-28 PL. 16
447	B	66	7	3		Fig. 32-24 PL. 16
448	B	62	8	3		
449	A	80		6		
450	A	48		5		

Aは杭(丸木・丸太板を表す) B矢板 C横木・木器・流水 \*小数点以下は切上げている

No.	材の分類	法 並(cm)			樹皮	備考
		長さ	幅	厚さ		
451	B	25	4	3		
452	A	33				10
453	B	19	4	2		
454	A	31				5
455	A	16				4
456	B	38	6	5		
457	B	44	15	6		
458	B	11	5	2		
459	A	24				3
460	A	43				5
461	B	50	6	4		
462	B	50	8	5		
463	B	27	6	2		
464	B	71	8	5		
465	B	75	5	5		
466	B	76	4	4		
467	A	84				4
468	B	48	10	6		Fig. 33-35
469	A	32				5
470	A	19				4
471	A	50				4
472	A	37				4
473	A	28				5
474	B	36	5	3		
475	B	36	4	4		
476	B	54	8	4		
477	B	45	6	4		
478	B	21	3	2		
479	B	28	6	5		
480	B	33	5	3		
481	B	39	9	3		
482	B	42	5	4		
483	B	41	5	2		
484	B	44	4	2		
485	A	13				2
486	B	53	12	4		
487	B	18	2	2		
488	B	35	5	3		
489	B	52	7	3		
490	A	56				5
491	B	19	3	2		
492	B	26	4	2		
493	B	10	3	4		
494	A	23				2
495	A	25				3
496	B	28	4	4		
497	A	41				4
498	A	49				3
499	B	34	5	3		
500	B	13	2	2		

調査番号 7816

Tab. 9 第15次調査地点杭・木器出土一覧 - 6

No.	杭の分類	法量(cm)				備考
		長さ	幅	厚さ	径	
501	A	14		5		
502	A	29		3		
503	A	54		6		
504	A	29		3		
505	A	30		2		
506	A	46		4		
507	B	45	10	3		
508	A	33		3		
509	B	32	5	2		
510	A	36		4		
511	B	3	4	2		
512	A	36		4		
513	A	5		2		
514	A	31		4		
515	A	74		5		
516	B	62	6	2		
517	A	52		5		
518	B	57	5	5		
519	A	14		3		
520	A	52		7		
521	A	29		3		
522	B	46	6	1		
523	A	29		3		
524	B	17	5	1		
525	A	26		4		
526	B	29	8	1		
527	B	58	12	9		
528	B	35	6	4		
529	A	62		4		
530	B	69	14	4		
531	B	69	7	3		
532	A	55		3		
533	A	76		2		
534	B	110	8	5		
535	B	43	6	4		
536	A	49		3		
537	A	12		3		
538	A	45		4		
539	B	48	5	3		
540	B	37	8	2		
541	B	34	9	3		
542	B	9	7	5		
543	A	19		2		
544	A	32		3		
545	A	21		4		
546	B	50	11	8		
547	A	52		8		
548	A	54		3		
549	B	50	10	3		
550	B	37	5	4		

Aは杭(丸木・丸太杭を表す) Bは矢板 Cは棒木・木器・流木 ※小数点以下は切上げている

# 写 真 図 版





1. L-IIa 地点試掘調査（南） 写真番号115



2. L-IIa 地点トレンチ設定（南） 写真番号90



3. L-IIb 地点トレンチ設定（北） 写真番号155



4. K-IIc トレンチ中央部（南） 写真番号114



5. 北側トレンチ（東） 写真番号99



6. 南側トレンチ（北） 写真番号114



7. 遺物出土状態 写真番号106



8. 遺物出土状態 写真番号102



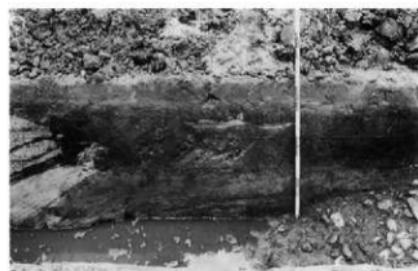
1. K-11c 地点試掘調査（西）

写真番号143



2. トレンチ近景（東）

写真番号119



4. J-10j 地点段落部土層断面（東）

写真番号124



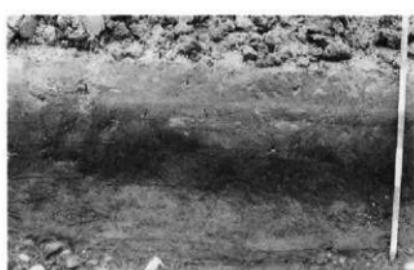
5. J-10j 地点南側土層断面（北）

写真番号123



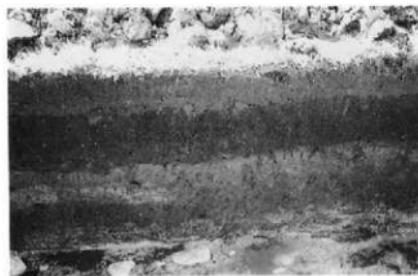
6. J-10j 地点北側土層断面

写真番号121



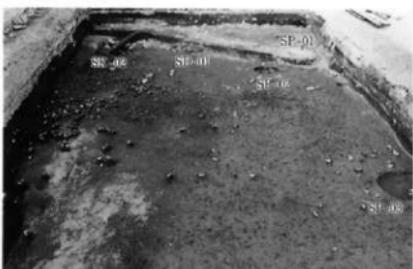
7. J-10j 地点中央部土層断面（東）

写真番号122

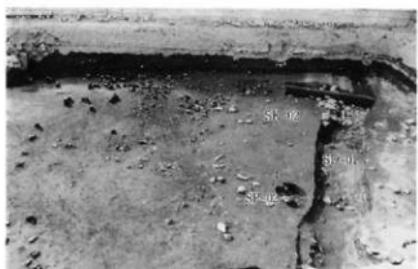
1. K-12d 地点試掘土層断面  
写真番号802. K-12d 地点試掘土層断面  
写真番号873. K-12d 地点試掘土層断面  
写真番号914. K-12d 地点試掘土層断面  
写真番号885. K-12d 地点試掘土層断面  
写真番号836. J-11f 地点試掘調査風景（南東）  
写真番号707. 第14次試掘調査作業風景（北東）  
写真番号458. 第14次試掘トレンチ遺構検出状況  
写真番号78



1. 第11次調査・調査前全景（北東） 写真番号1



2. 調査区全景（東） 写真番号4



3. SD-01, SK-02全景（北） 写真番号17



4. SD-01, SK-02と遺物出土状態（東） 写真番号33



5. SD-01, SK-02近景（北） 写真番号19



6. SD-01近景（西） 写真番号221



7. SK-02近景（西） 写真番号21

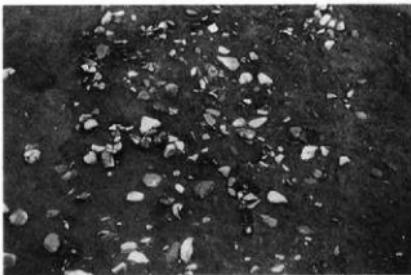


8. SD-01と土層断面（北） 写真番号70



1. 遺物出土状態

写真番号37



2. 遺物出土状態

写真番号6



3. 土層と遺物出土状態

写真番号36



4. 遺物出土状態

写真番号47



5. 遺物出土状態

写真番号50



6. 遺物出土状態

写真番号46



7. 遺物出土状態

写真番号40



8. 遺物出土状態

写真番号45



1. 遺物出土状態

写真番号9



2. 石包丁と變形土器出土状態

写真番号16



3. 器台出土状態

写真番号11



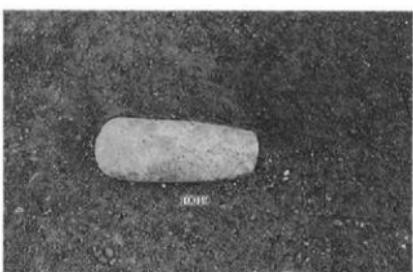
4. 變形土器出土状態

写真番号13



5. 器台出土状態

写真番号5



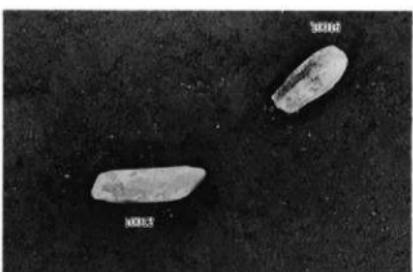
6. 石斧出土状態

写真番号14



7. 石劍出土状態

写真番号15



8. 柱状片刃石斧出土状態

写真番号52



1. 石包丁出土状態

写真番号55



2. 挖器・變形土器出土状態

写真番号53



3. 第14次調査地点・調査前全景（北）

写真番号7



4. 調査前風景（北西）

写真番号48



5. 調査前風景（南）

写真番号44



6. 流木・杭出土状態（北）

写真番号33



7. 調査区全景（東）

写真番号25



8. 調査区全景（南）

写真番号24



1. 流木と杭列出土状態（西）

写真番号26



2. 流木と杭列出土状態（西）

写真番号26



3. 14次調査地点土層断面

写真番号40



4. 杭列と土層断面（西）

写真番号10



5. 流木と杭列（西）

写真番号30



6. 杭列と凸地（南西）

写真番号28



7. 杭列と土層（西）

写真番号5



8. 土層断面（西）

写真番号6



1. 流木検出状態

写真番号29



2. 杭列検出状態

写真番号16



3. 杭列と砂層

写真番号36



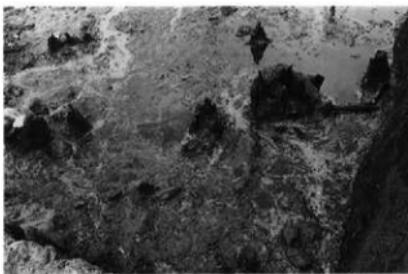
4. 杭列と砂層

写真番号14



5. 杭列検出状態

写真番号16



6. 杭列検出状態

写真番号21



7. 杭列としがらみ検出状態

写真番号17



8. 杭列と横木検出状態

写真番号20



1. 第15次調査拡張部枕列検出状態（南） 写真番号15



2. 枕列と流木検出状態（北西） 写真番号54



3. 枕列検出状態（南西） 写真番号14



4. 枕列と流木検出状態（北西） 写真番号55



5. 枕列と流木検出状態（東） 写真番号10



6. 調査区近景（西） 写真番号5



7. 調査区近景（東） 写真番号8



8. 調査区近景（東） 写真番号12



1. 南側土層断面（北）

写真番号38



2. 西側土層断面（東）

写真番号65



3. 北側土層断面（南）

写真番号70



4. 東側土層断面（西）

写真番号66



5. 東・北側土層断面（南西）

写真番号36



6. 桧列と流木検出近景（北西）

写真番号59



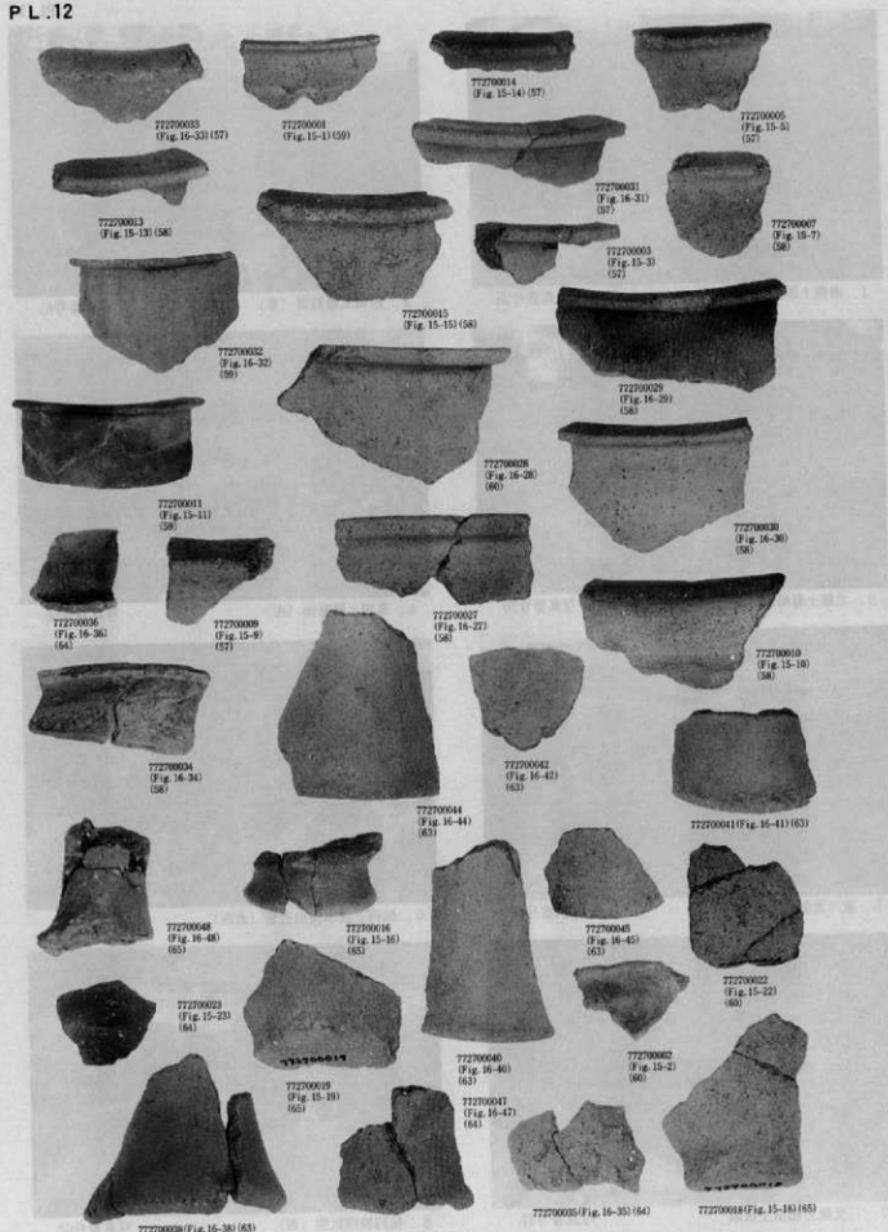
7. 三叉櫂刃部出土状態

写真番号47



8. 桧列検出状態（西）

写真番号62



出土遺物（土器）-1（縮尺1/2）



78150001 遺物登録番号  
(Fig. 22-1) 措因番号  
(53) 写真番号



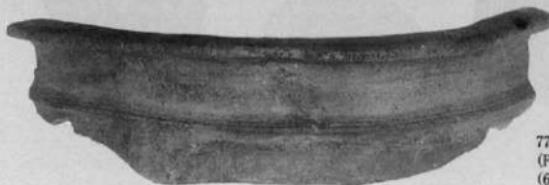
772700024  
(Fig. 16-24)  
(61)



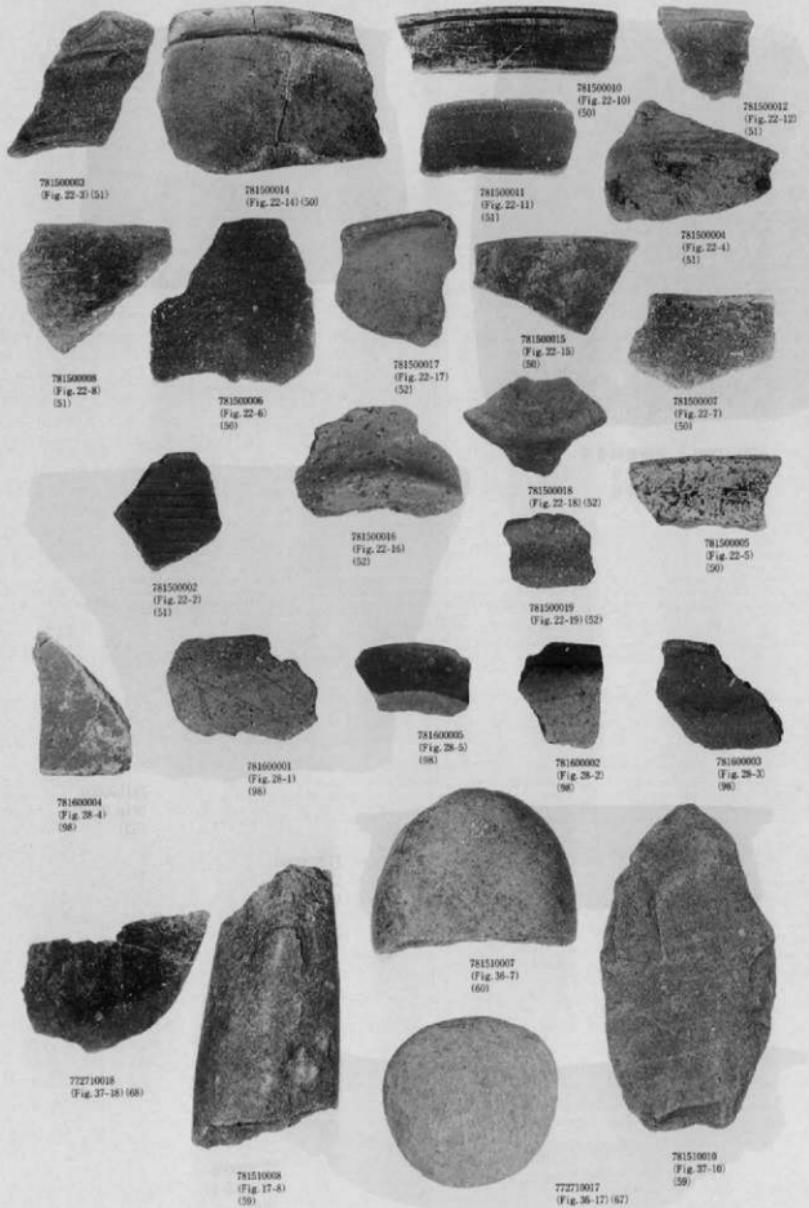
78150009  
(Fig. 22-9)  
(53)

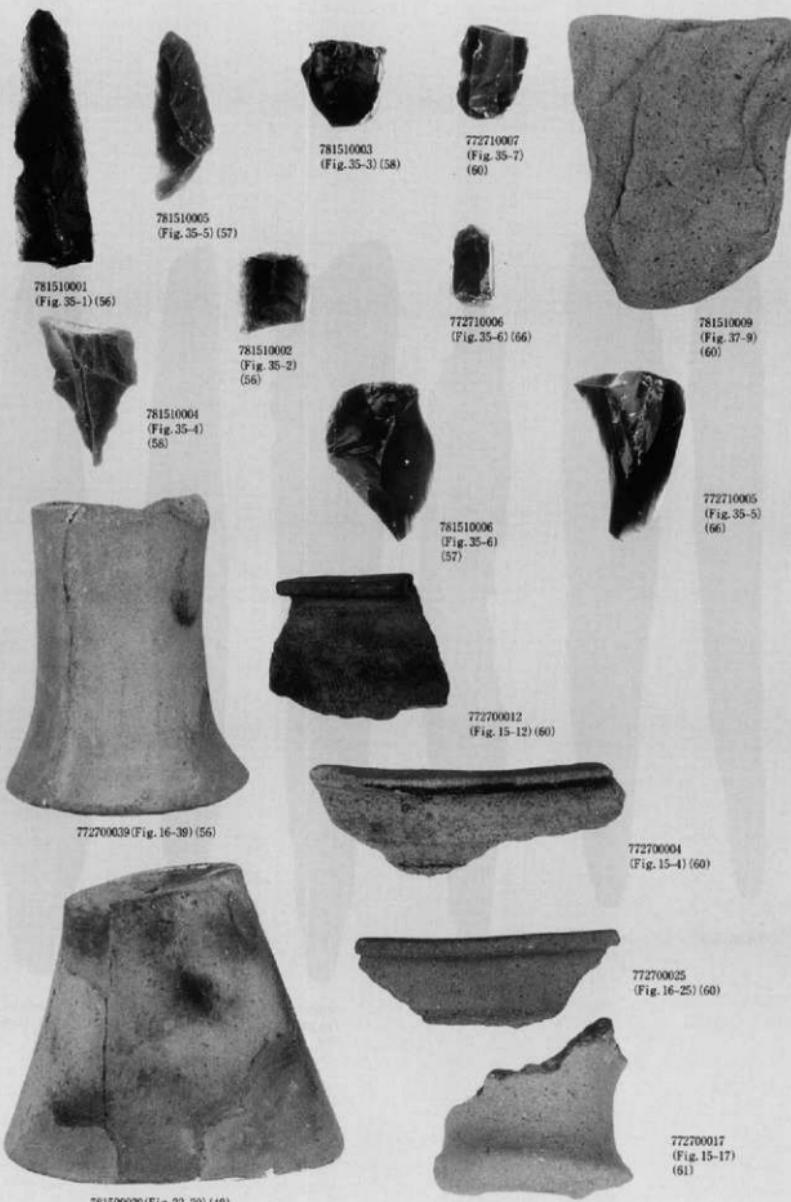


772700026  
(Fig. 16-26)  
(61)



772700008  
(Fig. 15-8)  
(62)







781630015(78)



781630275  
Fig. 33-29  
(77)



781630180  
Fig. 33-27  
(78)



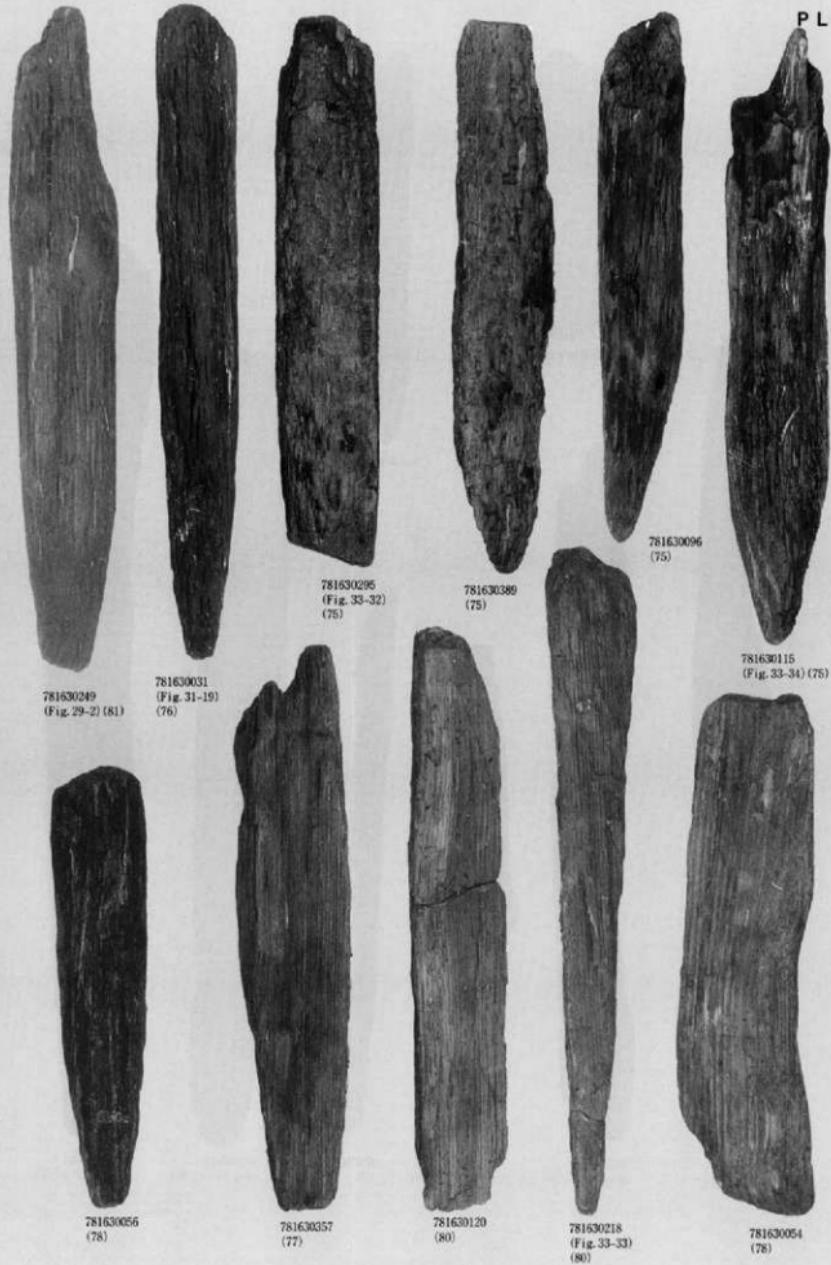
781630413  
Fig. 33-31  
(80)



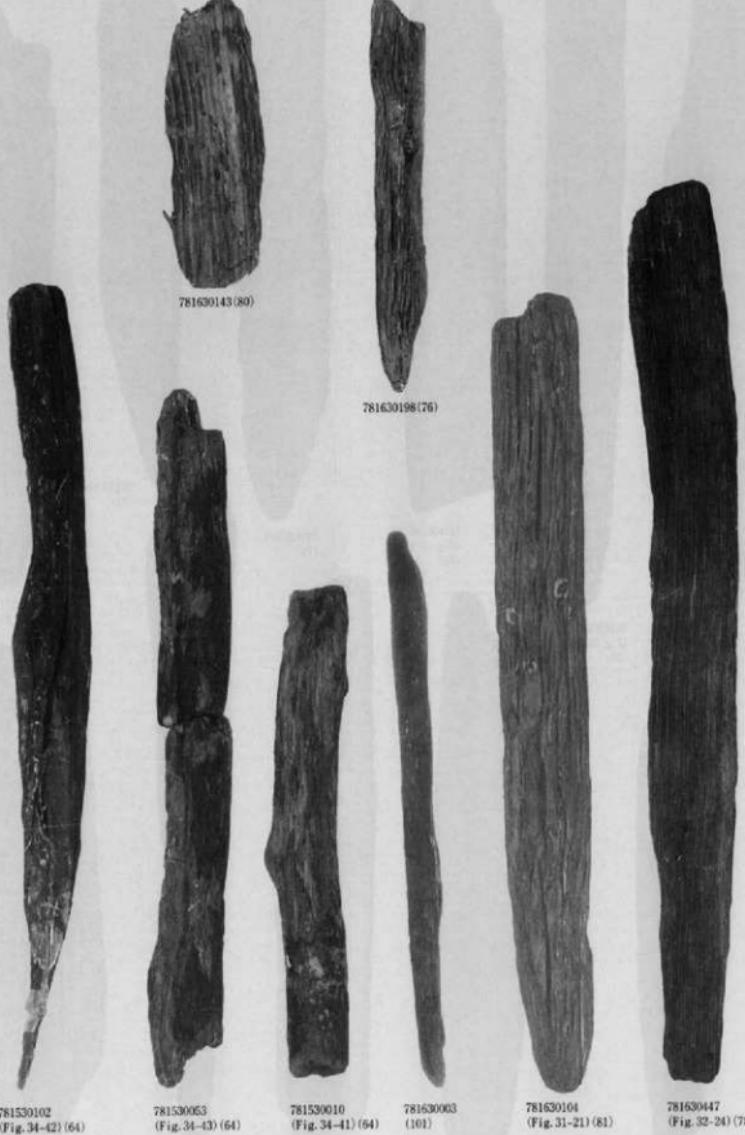
781630425  
Fig. 33-30  
(77)

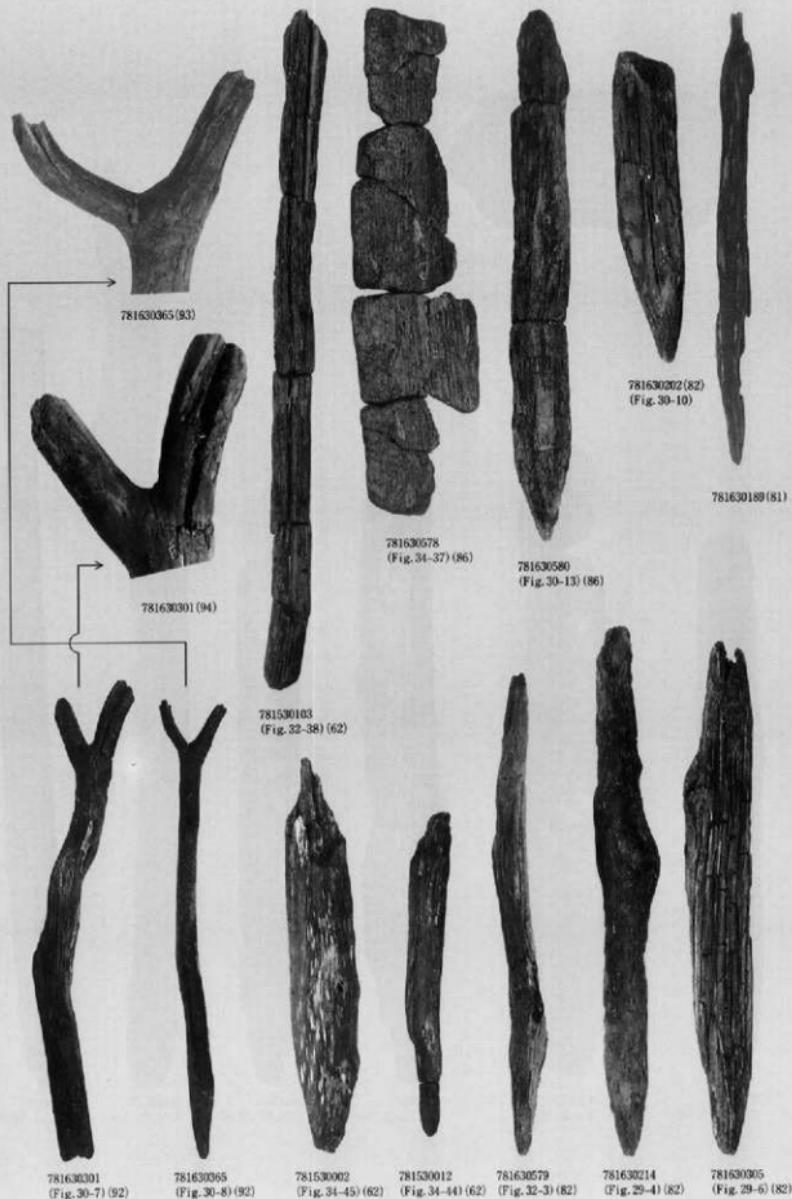


781630446  
Fig. 33-28  
(77)



出土遺物（木器）－6（縮尺1/3）





出土遺物（木器）－8（縮尺1/6, 1/8・縮尺不統一）



781630322(88)



781630193  
(Fig. 31-17) (76)



781630273  
(Fig. 31-16) (84)



781630347  
(Fig. 31-18) (76)



781630147  
(Fig. 31-15) (84)



781630132  
(Fig. 29-3) (81)



781630203  
(Fig. 31-20) (84)

---

福岡市早良区  
四箇周辺遺跡調査報告書  
(7)  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第482集

1996(平成8)年3月14日発行  
発行 福岡市教育委員会  
印刷 ㈱九州カスタム印刷

---



四箇周辺遺跡調査報告書（7）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第四八二集

一九九六年 福岡市教育委員会